

# 巻頭言

会長 木村高久

今夏、2020東京オリンピック（7月23日から8月8日まで）及びパラリンピック（8月24日から9月5日まで）が開催されました。新型コロナウイルス禍が収まっていない中での実施のため賛否両論がありました。が、いずれも大過なく幕を閉じ安堵したところです。さて、オリ・パラの競技大会で選手たちの真剣な眼差しや躍動する姿に心を打たれました。いくつかの競技の名場面が今でも脳裏に焼き付いています。新型コロナウイルス禍により人々が不安と閉塞感に覆われていました。選手たちの活躍が我々に感動と勇気とそして喜びを与えてくれたのです。よって全ての選手の皆様に「ありがとう」という言葉を贈りたいと思います。そして、今後のご活躍を祈るところです。

ところで、2020年（令和2年）1月以降、今日まで新型コロナウイルスという悪鬼が世界を席卷し甚大な被害をもたらしています。国内での新型コロナウイルス感染者合計数は約170万余人で、死者が1万7千余人となりました。（令和3年9月28日現在）。世界では2億3千万余人の感染者が発生し、約476万人が亡くなっています。ここに、お亡くなりになった方々のご冥福を心よりお祈りいたします。併せて新型コロナウイルスの一日も早い収束を切に願っています。

さて、この様な新型コロナウイルス感染状況下で今私が思うことは二点あります。

一つは医療従事者、救急車要員、保健所職員その他コロナ対策に従事されている方々に対する感謝で

す。常に新型コロナウイルス感染の危機があり、また休暇もままならなく激務です。その上新型コロナウイルスにより病院経営が悪化の為、給料やボーナスを減額された人もいます。でも彼らは使命感をもち献身的に仕事を遂行しているのです。お蔭で多くの人命が救助されていることに只々感謝いたします。

二つ目は、新型コロナウイルス禍が収束した段階で、医療・政策・報道等それぞれの分野で新型コロナウイルスについて分析・研究し記録を残すことです。今のコロナが収束しても、また新たなウイルスが暴れまわる恐れは十分にあります。それは、地球上に未知のウイルスを有する未開の地が沢山あるからです。新たなウイルスに対処し被害を極力軽減するために絶対に実践して頂きたいと思えます。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」の諺のようになります。

さて、当会は今年も多くの計画事業が新型コロナウイルスのために中止となりました。

誠に断腸の思いです。来年は待望の創立四十周年です。新型コロナウイルスに負けずに、歡喜溢れる記念事業を盛大に開催したいと決意するものです。



作 藤盛詔子氏 俳画

# 中国・南京の三大偉人

長田 格

筆者の生まれは東京だが、子供の頃横浜に移り、以後約六十年、故郷は「横浜」と意識している。しかし、横浜が故郷の方は多いであろう。

筆者は以前、中国南京に四年間暮らし、自分の第二の故郷であるという思いがある。南京在住中、その歴史を調べ、週末には各地を訪問し、訪れるお客様に、その成果をお話してきた。筆者が勝手に考えた言い方であるが、「南京の三大偉人」というのは、その中の一番のテーマの一つであった。ただ、この偉人たちは超有名人であり、その生涯などを追っていたら、一人一冊以上の本になるし、実際多くの本が出版されている。ここでは、彼らの銅像（石像）と墓の話を中心に、南京の紹介をしたい。

## (一) 南京の概要

南京は中国江蘇省の省都で、人口約八百万人の大都会である。中国の四大古都（他は西安、洛陽、北京）の一つであり、緑が中国の中のどの街よりも多く、南京大学等の超有名大学がある。そんなところから筆者の勤めていた会社は南京大学と合弁会社を作り、筆者も派遣された。筆者は「緑と歴史と学問とITの街」と呼んで非常に好きな街であった。

そんな街を、南京市は「十朝の都」と自称する。十の国が南京に首都を置いたという意味である。ちなみに西安が十三朝の都としており、最も多い。

その十の国、各国でのこの街の名称、国の存続期間を以下に示す。南京が首都であった期間とは異なる場合もある。



呉	建業	二二二〜二二八
東晋	建康	三一七〜四二〇
宋	建康	四二〇〜四七九
齐	建康	四七九〜五〇二
梁	建康	五〇二〜五五七
陳	建康	五五七〜五八九
南唐	江寧	九一二〜九七五
明	応天府	一三六八〜一六四四
太平天国	天京	一八五一〜一六四四
中華民国	南京	一九一二〜

十の国のうち、中国全土を治めたのは、明と中華民国（若干怪しげ）だけで、他は概略でいえば、呉は三分の一、東晋から陳は二分の一、南唐、太平天国は十分の一程度である。そんなことから自然に三大偉人が浮かんでくる。なお、「南京」という名称は、明

の一四二一年に、北京へ遷都した後に「副都」の意味で、初めて付けられたものである。  
\* 独自年号設定の年。孫権が皇帝に即位した二二九年を建国年とする説もある。

## (二) 三大偉人

筆者の考える南京の偉人は、以下の三人であり、十のうち三つの国の初代トップである。生没年と共に示す。

孫権	呉	一八二〜二五二
朱元璋	明	一三二八〜一三九八
孫文	中華民国	一八六六〜一九二五

(2)

孫権は、国の統治範囲としては三人の中で見劣りするものの、御存知「三国志」の主人公の一人で知名度は高く、最初に南京に都を置いて、南京への貢献度は最大である。秣陵というひどい名前と呼ばれていたこの地に本拠地を移し、二一二年に「建業」と改名した。業をこの地で成し遂げるといふ意である。秦の始皇帝が、金陵と呼ばれていたこの地を訪れた時、「この地に五百年後天子が現れる」と聞き、この地を切り刻み、名を秣

陵に変えていた。当時の予言を孫権が具現したのである。

朱元璋は、中国史上、最も貧しい層出身の皇帝として知られる。国の統治範囲からいえば、南京最大の偉人と言っている。

孫文は、国への貢献度としては疑問があるものの清を倒す原動力の中心であり、また現在の南京への貢献度として抜きん出ている。

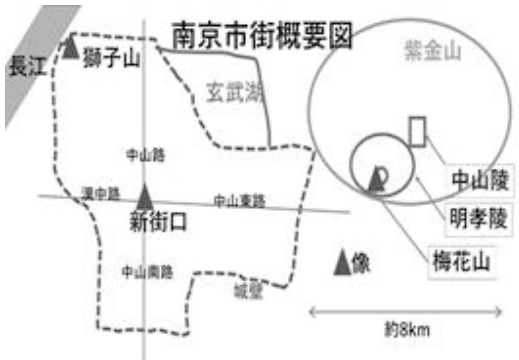
この三人には、南京に首都を置いた国の初代トップであるということ以外に共通点が二つある。

- ・ 南京市内に巨大な像がある。
- ・ 南京市内に巨大な墓がある。

現南京市にとって最大の観光資源であり、南京市民からいかに親しまれているか、さらに、本人の南京への思い入れもある。以下、この二点を紹介する。

ここで、南京市街概要図に各像と墓の位置を示す。

南京には、明代に整備された一周約三十四km、世界一の城壁があり、これを点線で示す（一部は破壊されているが）。三十四kmといえば、東京の山手線と同じ。「城内」とは「山手線内」と同じような意味となる。城壁に接するように玄武湖と紫金山があり、南京市民の



写真は城壁と玄武湖。



憩いの場となっている。また、長江が城の北西を流れる。

像は城内に二つ、紫金山に一つある。墓はすべて紫金山の南麓に集中している。

## (三) 銅像（石像）

孫権  
城壁の東端から東に5kmほどのところに、孫権記念館があり、その前にある。



孫権と言うと若者のイメージが強いが、皇帝即位後の姿のようで、貫禄タップリである。

## ・ 朱元璋

城内の南西隅に獅子山という小山がある。長江の端まで1kmと近いところで、閱江楼という建物の前にある。

朱元璋と言えば顎がしゃくれたとんでもない醜男の絵が有名だが、ここは普通の顔。馬を横に置いて若々しさをだしている。



獅子山は、朱元璋が頭角を現しライバルとの決戦で、大勝利を得た場所であり、本人としては思い入れがあったのだろう。政権樹立後の一三七四年、ここに閱江楼を建築するよう指示をしたのだが、基礎を整備した段階で、夢の中の神のお告げにより建設を中止した。それを南京政府が建築すると決め、二〇〇一年、朱元璋の指示より約六百年後に、竣工した。四層七階、高さ五二m、その名の通り、長江を眺めるのにちょうどよい建物である。

## ・ 孫文

繁華街の中心で、城内の位置的にも中心である新街口にある。中山路と漢中路という二つのメインストリートの交差点がロータリーとなっていて、その真ん中にある。日本でいえば銀座四丁目の交差点の真ん中にあるのと同じである。

(3)

おなじみの髭を生やした顔で、ステッキをついている。周りはすぐに車道なので、そばに人が寄っていくことはできない。威厳を示すのにいいが、親しみという点ではマイナスである。



#### (四) 墓

##### ・孫権

三つの中で一番東南にある。梅花山という小山で、これが孫権の墓である。直径五百m、高さ二十mほどの小山である。孫権の像と記念館は、実はこの山の麓にある。

この山はその名の通り、ほぼ全山が梅の木で覆われている。2月から3月にかけて満開となり、花見の市民であふれる。筆者も弁当と缶ビールをもって花見をした。



なお、梅は南京の「市の花」であり、その意味でこの山自体が南京のシンボルであるといっている。



動物の道と、武将・文官の道の右側に挟まれた場所が梅花山である。要するに、明孝陵は梅花山を迂回する形で作ってあるということである。これは、明孝陵を作る時、その場所の中に孫権の墓があることが分り、部下が報告したところ、朱元璋が「では参道はそれを迂回するようにして、孫権の墓を破壊するな」という指示をしたからだ、とされている。

この道を抜けて今度は左に曲がり、いくつかの建物を越えていくと、長い神道の最後、一番奥に巨大な建築物がある。



・朱元璋  
「明孝陵」と呼ばれ、二〇〇三年に世界遺産に登録された。朱元璋とともに、馬皇后も合葬されている。百七十万㎡という広大な敷地に各種資産が点在している。

一三八一年、在世中に自身の命により建設を始めた。翌年、馬皇后が世を去るとここに葬り、「孝陵」と名付けた。馬皇后の諡号「孝慈高皇后」から取られている。

一三九八年に、朱元璋を葬ったが、その後も建設を続け、約三十年かけて現在のような形式とした。膨大な構成物件をすべて説明するスペースはないので、ここでは、ごく一部の物件だけ説明する。

陵地の一番東南にあり、参道(神道)の開始地点となるのが「下馬坊」である。高さ約八mの石門で、それほど大きくはない。額の上に『諸司官員下馬』と刻まれている。参詣者はどんな高官であっても、この場所ですべて降りて歩かなければならない、という目印である。ここから実際に葬られている場所まで、道なりに約三kmある。



ここからいくつかの碑や門を抜けると、石像が立ち並ぶ道にでる。ここには馬、麒麟、象、駱駝、獅、獅子が各一對向き合って並んでいる。小ぶりで若干ユーモラスな雰囲気である。



ここから道は大きく右へカーブし、今度は武将と文官が各三対並んでいる道となる。写真は武将であるが、精悍な顔ではなく、何か不満を持ったような変な顔をしている。

方城であり、東西約七五m、南北約三二mある。内部が五四段のトンネルで、南側に出られる。さらに両側の階段を登る。方城の上にある建物が明楼で、東西約四〇m、南北一八mの大きさ。黄色の瓦で覆われている。写真では方城・明楼が一体となっている。

その奥にある小山が実際に葬られている場所で、「宝城・宝頂」と呼ばれる。直径約四百mの円形をしている。周囲は石壁で覆われ、周りと中央(宝頂)へ道が造られている。写真は宝頂への道である。ただ、頂上に何の目印もなく、肩透かしを食らう。

の死後、南京紫金山の麓に葬られてくれ。南京は臨時政府の成立した地であり、辛亥革命を忘れてはならないからだ。』により南京に運ばれ、葬られた。一九二六年から二九年にかけて建設され、面積八万㎡で、明孝陵の二十分の一ではあるが、それでも東京ドーム六つ分に相当し、二十世紀に造られた中で世界最大の墓とされる。

紫金山の傾斜を利用して作られており、門のところから、最上段の祭壇まで高低差七三m、階段で三九二段ある。当時の中国の人口三億九二〇〇万人にちなむとされる。写真ではこの大きさがなかなか伝わらないが、初めてこの下に立つと、そのスケールに圧倒される。高齢者などでは、この階段を見て、お参りするのをあきらめる人もいる。

「中山」は、孫文の号であり、中国では、「孫中山」と呼ぶことが多い。孫文の日本亡命時代、近くに「中山」という名前の家があり、それを気に入って自分で「中山」を号にした。中国の中山市や中山路など、皆、孫文にちなんだ名称である。



祭壇内に、椅子に座った孫文の像がある。また、墓室があり、ここには、横たわった孫文の玉による像があり、その下に遺体が葬られている。

・孫文  
「中山陵」と呼ばれる。孫文は北平(北京)で死んだが、遺言『私



# 川崎のナシ、モモ栽培の恩人

近藤 政次

はじめに

川崎市が明治から大正、昭和の戦前期(第二次世界大戦前)にかけ国内有数のナシ、モモ、イチジクなど果樹の生産地であったことは令和3年の今日、同市民も含め、知る人は少なくなっている。さきにふれた3種の果物は多摩川沿いに栽培され隣の東京、横浜両市にその多くが出荷され、夏秋の庶民の食卓をにぎわした。

ナシは江戸末期から、モモは明治中頃から、イチジクは大正期からそれぞれ栽培が盛んになり、農家の経済を豊かにした。『米と繭の構造』とも言われた時代に新しい作目にチャレンジし、技術の確立、品種の改善に尽力した精農家がいたことが明らかとなっている。

神奈川県はモモは大正10年から昭和11年まで生産金額で全国の

首位であった(『時事年鑑』。第2位は岡山県ほか。大正14年の生産金額は神奈川県100万6千円。2位の岡山県は40万9千円。

『西の岡山、東の神奈川』と評された時代であった。神奈川のモモの主産地はいうまでもなく現在の川崎市域である。

小稿では新品種の発見・育成に尽力した4人の農家を紹介する。いずれも死後『恩人』と呼ばれ、地域から慕われた。『偉人』ではなく恩人を取り上げたゆえんである。

1. 長十郎ナシを発見・育成した当麻辰次郎

川崎のナシは『武江産物誌』(1824年)、『江戸名所図会』(1836年)に記載されており、後者では川崎辺のナシが棚栽培されている様子が絵で紹介されてい

る。徳川御三家の紀州和歌山藩士酒井伴四郎の万延元年(1860年)の江戸づめの日記が青木直巳著『下級武士の食日記』として酒井が横浜見物の途中、川崎宿でナシ2個を購入、食べたことが紹介されている。さらに江戸市中で18個(6月〜8月)を買い求めている。価格は1個当り最盛期の7月で4文〜16文でバラついていて。なお、酒井は28歳で妻子を和歌山に残しての単身赴任であった。

(1) 長十郎の発見

橋樹郡大師河原町出来野(現・川崎市川崎区)の当麻辰次郎が明治22年に発見した。同年苗木を作る目的で実生した中から発見し、同26年9月に初結果した記録が確認されている。辰次郎は文政9年の生まれで米麦とあわせ、ナシ、モモを栽培していた農家で明治33年に死去した。「長十郎」の名前は「家号」からとったもので、特に名前をつけたものではなく、ナシ栽培農家がいっしょか「長十郎」と呼ぶようになったという。また、別の名を果実が丸く豊円なことから「満月」とも呼ばれた。

明治30年前後に黒紋病が全国

に広がり従来の品種が被害を受けたのに対し、「長十郎」は軽微で済み、以来国内各地に普及した。

(2) 品種の特質

果実の大きさ……300〜400グラム

果実の形……豊円

果皮の色……赤褐色

品質……上

収穫時期……8月下旬〜9月下旬  
10a当り収量……6〜7トン

樹勢……中位・栽培容易

その他……適応性が広く全国各地で栽培された。特に東北、関東、東海地帯に大産地を形成した。

(3) 普及のあらし

栽培が容易で豊産、味も良好、病気に強い品種とあって一挙に「長十郎」は県内はもとより全国に普及し、赤ナシ系の代表となった。ライバルとなる青ナシの優良品種「二十世紀」が生まれたのは明治31年前後であった。

大正9年11月の橋樹郡農会の調査では「長十郎」が122町9反歩余を占め、同郡内の70.8%の作付面積となっている。以下「早生赤」が20町8反歩(11.0%)、

「幸蔵」が12町1反歩(6.4%)、「太平」が3町2反歩余(1.7%)、「独乙」が1町歩余(0.5%)などとなっている。「二十世紀」は1反歩弱の作付となっている。合計15品種及び品種不明を合わせて187町6反歩のナシの作付が確認されている。(『園芸』第三巻第三号、大正10年9月号。『川崎で生れた果樹の品種解説(その1)』昭和45年3月川崎市園芸技術普及農場)

※なお、橋樹郡には当時、大綱村、城郷村等が含まれていたことに留意されたい。

国内の「長十郎」の栽培面積を農林省農務局が昭和11年に調査した「ナシ品種別作付面積」に依ると5,376ha(13.3%)で46.7%のウエイトを占める。ライバルの「二十世紀」は2番目に位置し、1,527ha(13.3%)、「早生赤」1,416ha、「晩三吉」1,115ha、「八雲」、「菊水」などとなっている。同調査に依ると県外の「長十郎」作付面積は静岡県が700ha以上、愛媛県が400ha以上、300ha以上が千葉、茨城の2県、神奈川県は200〜300haの栽培となっ

ている。隣の静岡県が全国で首位の座を占めている。いわゆる「富士ナシ」のブランドで東京市場に乗り込み「多摩川ナシ」の競争相手となった。(前掲『川崎で生れた果樹の品種解説(その1)』)

「長十郎は神奈川で生まれて神奈川県で育った。二十世紀は千葉で生まれて鳥取で育った」日本ナシの代表である。「長十郎」は昭和50年代頃まで、「二十世紀」は令和の今日も市場の一角を占めている。

幸水、豊水の全盛の今日、各産地では新品種の開発・育成に拍車がかかる。大玉で上品な甘味を売りものにする茨城県の「恵水」、埼玉県が育成した「彩玉」は糖度の高い早生品種で大玉果が特性で、すでに50haまで栽培が広がっている。千葉県の「秋満月」、新潟県の「新美月」、鳥取県の「新甘泉」などが有力品種として登場している(『日本農業新聞』令和3年9月16日号)。

「長十郎」の記念碑は大正8年3月に橋樹郡果物業組合連合会によって川崎大師の境内に建立された。

2. 伝十郎・橋早生モモの発見・育成者吉沢寅之助

「大師河原モモ園花ざかり……12町歩の桃園」……明治14年4月3日の『毎日新聞』にモモ園のPRが掲載されている。これは食用モモではなく花をめぐる花モモである。大師参りの人々を対象に4月8日の花まつりにあわせた宣伝と見てよい。

外国の食用モモを大師河原で最初に栽培したのは川中島の石渡七左衛門であった。石渡は明治10年頃、保土ヶ谷の青物仲買商青木徳次郎が横浜居留地の英人アーサーよりもらった外国種モモ苗を分けてもらい栽培した。桃果を横浜で販売したところ大変好評で利益を得たという。石渡の成功を見て、村内でモモ栽培を始める農家が現われた。

明治20年代は上海水蜜、天津水蜜、アムステルダム等を中心に多くの品種が大師河原で栽培されたという。

(1) 伝十郎・橋早生モモの発見

明治29年、田島村(現・川崎市川崎区)の吉沢寅之助が大師河原村の桜井佐七より早生種の良い

モモがあると聞き、その穂木を得て高接したものが31年に結果した。

早生ではなく中生種であったが、形や色が良く甘くて水分が多く、多収で病害にも強いという品種であった。これが「伝十郎」であった。この伝十郎は吉沢家の先代の名からネーミングしたものだ。

吉沢は明治25年頃、大師、六郷、羽田、小向等で作られていたモモを田島でも作れないかと三十種前後を集めて栽培比較を行ない優良種を得たもの。先の「伝十郎」に続き、明治43年には「橋早生」を発見・命名した。

モモの改良に多年苦心して良種を得た功績に対して同村の果樹組合が中心となって、村社八幡大神境内へ碑を建立、大正5年2月13日午前、田島小学校大島分教場で竣工式が行われた。この席で吉沢の事業を援助した同村の市川善太郎、小原長平、岩崎伝次郎の3人に表彰状が贈られた。(この項、『横浜貿易新報』大正5年2月15日、13年3月6日)

(2) 品種の特質  
「伝十郎」

果実の大きさ……170グラム位  
果実の形……豊円  
果皮……厚く強靱、むぎやすい  
肉質……緻密で多汁、甘味多く風味良好  
外観よく収量も多く栽培しやすい  
熟期……7月下旬

「橘早生」……「伝十郎」の実生から発見

果実の大きさ……170グラム位  
肉質……甘味ややうすい  
果皮および形……「伝十郎」と同様

熟期……7月上・中旬  
※東京のお盆用に贈答用として調法がられた

(3) 普及のあらまし

橘樹郡農会の大正9年11月調の「橘樹郡桃品種作付反別調」(前掲『園芸』)で見ると、「伝十郎」が首位で66町6反歩(27.9%)、次いで「早生水蜜」が61町5反歩(25.8%)、「天津水蜜」が25町6反歩(10.7%)、以下「田中早生」、「上海水蜜」、「日月桃」が9町6反歩(4.0%)、「橘

早生」が8町歩(3.3%)の順である。合計29品種及び未詳の合計面積は238町2反歩。ナシと同じように大綱村、城郷村も含む。

なお、大正14年7月17日、20日、横浜市内の鶴屋別館で行われた高座郡農会の高座郡桃品評会では「橘早生」と「伝十郎」の2品種に出品がしぼられるなど、県内への広がりが確認される(『横浜貿易新報』大正14年7月21日)。高座郡の産地は藤沢、茅ヶ崎両町が主力であった。

3. 日月(じつげつ) 桃の発見・育成者池谷道太郎

(1) 日月桃の発見

橘樹郡大綱村(現・横浜市港北区)の篤農家池谷道太郎が明治40年頃、多数の桃樹の中から選り出したもので、原名は不明、池谷が命名した早生種である。彼は明治33年頃、自村の鶴見川沿岸地に桃園を拓きモモ栽培に力を注いだ。村内の農家に栽培を呼びかけ普及をすすめた。42年、綱島果樹園芸組合の設立にこぎつけ、ナシ、モモの生産・販売に尽力し

た。この間、品種改良の取り組みも忘れず、45年、優良品種「日月桃」を発見・命名に至った。組合運営もますます順調に推移し、大正10年には出荷額5万円に及んだ。大正11年5月に橘樹郡果物業組合連合会から優良組合として表彰を受けた。

(2) 品種の特性

果実の大きさ……中果  
果実の形……円形なり  
果皮……白色地に鮮紅色の縞を散布し外観すこぶる美なり。皮むき容易

果肉……甘味多汁、果肉やわらか、品質良好

熟期……6月下旬〜7月上旬、早生種として美大なる為、市場に歓迎される。栽培に土質選ばず病害にも強い

(3) 普及のあらまし

大正9年11月調べ(前掲『園芸』)に依れば郡内で9町6反歩(4.0%)と下位であるが、その後発見者の池谷は同品種を3町歩栽培(『横浜貿易新報』大正12年7月14日)、「綱島の桃振興計画」(『横浜貿易新報』昭和13年

9月13日)などの記事が見えることから「日月桃」は地元を中心に生産されていたことは間違いがない。

4. モモについて附記

(1) 白鳳について

名桃として関係者に知られている中生種「白鳳」は戦前に神奈川県農業試験場で作出された品種である。同品種は岡山県の「白桃」と川崎市原産の「橘早生」の交配に依って生まれた。交配は大正14年、結実調査は昭和6年であった。戦後、各県から注目され、「日川白鳳」、「はなよめ」、「あかつき」など今日も多くの品種につながっている。

(2) 「日月桃」について

発見・育成者池谷道太郎の子孫が復活させ、現在も量は少ないものの「池谷家で受けつがれてきた桃を絶やすことはできない」と汗を流し完熟どりをし、自宅の直売に並べている(『日本農業新聞』令和2年6月25日)。

(3) モモを5等級にて出荷……昭和9年産から

橘樹郡農会が音頭をとって昭和9年産のモモから5ランクに分けて市場出荷することを各果物組合長を集めて決定した。そのランクは「特・多・摩・加・和」とした(『横浜貿易新報』昭和9年6月20日)

(4) 「早生水蜜」について

大正9年11月調べ(前掲『園芸』)に依れば「早生水蜜」は橘樹郡内で61町5反歩(25.8%のシェア)を占める。この品種は大師河原村の伊藤市兵衛が明治32年頃発見した。7月上旬〜8月上旬にかけて成熟する中生種。樹勢は強健で豊産、品質良好であった。上海水蜜に比して熟期が早いことから早生水蜜と命名した。伊藤は桃を大切にされた人物で、『桃はいたみやすく、船でも大八車でもだめだ』と言って日本橋の間屋まで毎日天秤棒で運んだ」との逸話が残されている。

◎主な参考文献

- 『神奈川県園芸発達史』昭和18年11月富樫常治著。
- 『園芸』昭和3年1月、第10巻第1号。
- 『大師河原誌』昭和63年3月、川崎市立東門前小学校。
- 『新訂川崎区の史話』平成8年4月。
- 『農事試験成績』昭和11年3月、神奈川県農事試験場園芸部。
- 『桃の奨励品種解説と苗木の定植まで』昭和24年12月、神奈川県果樹研究同志会。
- 『桃』2012年1月、有岡利幸著。
- 『川崎市史・通史編3』

(以上)



## 師走に三平を想う

榎 良生

### 一 はじめに

西国街道は江戸時代の主要街道のひとつであり、京都から下関までの経路で山陽道とも言う。このうち、京都―西宮間は山崎街道とも呼ばれ、宿場や問屋場、本陣・脇本陣などが整備された。大坂を迂回するこのルートは参勤交代の西国大名などが利用し賑わった。京都―西宮間には六つの宿駅、山崎（大山崎町）、芥川（高槻市）、郡山（茨木市）、瀬川（箕面市）、昆陽（伊丹市）、西宮（西宮市）が設けられ繁栄した。大阪府北部に位置する箕面市の南部をほぼ東西にこの街道が貫いている。今から三百年ほど前、元禄十四年（1701）三月半ば、ここを西へ急ぐ二人の武士がいた。赤穂藩士早見藤左衛門と今回の主人公である若干二十七歳の萱野三平であ

る。彼らは江戸城松乃廊下で起きた事件について国元に報告する書状を届ける役目だったのである。彼らはちようど萱野村（現在の箕面市南部）にさしかかっていた。地名のとおり、萱野三平はこの地の出身だった。ここで偶然にも母の葬列に出くわしてしまったのである。母の小満は三月十七日に死去していた。同行している藤左衛門が亡き母に一目会ってゆくよう勧めるのを振り切って先を急いだのだった。彼は仇討ちには参加できなかつたが、四十八番目の幻の志士として人々の記憶に残り、『仮名手本忠臣蔵』でも早野勘平として舞台に登場している。師走の討入りに前に、私の故郷である箕面出身でわずか二十八歳でその短い生涯を閉じた彼に焦点をあてて、その足跡を追ってみたいと思う。

親しかったのである。元禄十四年（1701）三月十四日、浅野長矩は江戸城松乃廊下で吉良上野介義央に刃傷に及んだ。この事件の発生当時、江戸在府中の三平は早見藤左衛門とともに、これを赤穂に知らせる浅野大学（長矩の弟で旗本）の書状を託された。あて先は家老の大石内蔵助である。早駕籠で江戸を出発、旅人なら十七日、飛脚でも八日のところを昼夜兼行でわずか四日で走破したと言う。冒頭の西国街道を急ぐ三平が、母の葬列に出くわしたのはこの時のことであった。三月十九日未明、大石の屋敷近くの井戸で水を飲んでから息を整えて事件を伝えたという。これが現在に残る「息継ぎ井戸」として残っている。三平は浅野大学の書状を無事大石に届けることができた。これを見た内蔵助はさぞかし驚愕したことだろう。こののち、彼は大石たちの仲間に加わることになる。

二 わが故郷箕面  
それではわが故郷、箕面について紹介しよう。大阪府の北部に位置し、北側には北摂の山岳地帯が連なる。標高は1000、600mほどで地質は古生層であり、多くの動植物を育んでいる。山中には落差333mの箕面大滝、瀧安寺、勝尾寺などの古刹も点在する。これらは山岳修行の道場であり、古来霊地として知られているものである。あたり一帯は明治百年記念事業のひとつとして、昭和四十二年（1967）に東京都八王子市にある高尾山とともに国定公園に指定された。この時誕生したのが、明治の森箕面国定公園（963ヘクタール）と明治の森高尾国定公園（770ヘクタール）である。自然研究路やビクターセンターなどが整備され、二つの国定公園は全長1400kmに及ぶ東海自然歩道で結ばれることになった。当公園は年間二百万人が訪れる大阪屈指の観光名所であり、川沿いの遊歩道「滝道」にはレストランや土産物店が立ち並んでいる。

箕面大滝は「日本の滝百選」に

の仕官を強く勧めたのである。浅野家へ彼を推挙したのも大島家であったが、実は吉良家とも縁が深かったのであった。ここで彼は大いに悩むことになる。仲間とともに神明に誓って仇討ちを約束した以上、それは父親にも話すことはできなかったのであった。元禄十五年（1702）一月十四日未明、主君浅野長矩の月命日のこの日、大石宛に仇討ちに参加できぬことの詫びと同志の本懐を祈る遺書をしたため、自害したのであった。享年わずか二十八歳であった。その前夜、父や兄嫁と談笑しており、朝になつても起きてこないことから発見されたのである。泉岳寺に彼の供養塔が四十七士の墓の傍に設置され、実家の旧宅は萱野三平旧邸宅長屋門として、大阪府指定史跡として保存されている。

四 日頃心の花曇り  
三平は俳人としても知られていた。涓泉という号を用いて句集を著すなど、藩にもその腕前は評価されていたようだ。「落ち葉見ん人もほつほつ切通し」、「秋風や隠元豆の杖のあと」、など多くの俳句を詠んでいる。彼の最期の句、す

も選ばれている名瀑で、その流れ落ちる雄姿が農具の「蓑」（箕）を思い起こさせるところから箕面と呼ばれるようになり、地名もここに由来するとされている。箕面駅からのびる滝道を行くと左右に「もみじの天ぷら」を揚げる土産物店が目につく。箕面の紅葉は有名で、大阪はもとより関西各地から多くの観光客が訪れるが、これを天ぷらにしたのは珍しい。その歴史を紐解くと起源は何と1300年前にさかのぼるといふ。修験僧の役行者はもみじの美しさを愛でて、燈明の油でこれを揚げて旅人に供したとされている。これがもみじの天ぷらの始まりで、明治四十三年に阪急電車が箕面有馬電軌鉄道を開設すると、観光客も大いに増えて人気を博していった。この製造は手が込んでいて、紅葉が盛りだの十一月の下旬ごろ、一枚一枚でいねいに手拾いで収穫にはじまる。材料は箕面に多く自生するイロハモミジではない。真っ赤に染まるもみじ葉を使うと、揚げた時に黒く変色するのだそう。

そこで使用するのはいくつかの特殊な種類で、黄色く色づいた時に収穫し、水洗いした後、塩

なわち辞世の句が次のとおりである。

晴れゆくや 日頃心の花曇り  
（現代語訳）殿の切腹以来、ずっともやもやして晴れなかった私の心も、これでようやく晴れることができそうです。

昔、若い時にこの話を聞いた時には、何と古臭い価値観に押し潰された人だったのかと特に気にも留めなかつたことが思い出される。しかし、今になってこの事件を振り返ると印象もまた異なる。あの渋沢栄一ですら、若い時は攘夷を計画していた。『忠臣蔵の決算書』（山本博文著）によると、仇討ちに参加した四十七士のうち、上級・中級武士で参加したものは少なかつたという。むしろ、下級家臣の参加が多く、特に江戸詰めの藩士にとって、藩主切腹、相手の吉良は存命では武士としての面子が立たないと考えたのは当然だったのだろう。事件を国元に知らせた四人（二便・萱野と早見、二便・原と大石）のうち、三人が仇討ちに参加し、萱野が討ち入り前に自害したのだった。

大阪市を南北に貫く地下鉄御堂筋線（北端部は北大阪急行電鉄）

漬けにして一年ほど寝かせて灰汁抜きをする。塩抜きと脱水の工程を経て、やっと揚げるときになる。衣は上質の小麦粉にザラメ、白（まなど）を加えて、菜種油で揚げる。揚げたてを希望する観光客も多いが、これは油が切れておらず、二〜三日おいてから袋詰めするそうである。滝道では店先に大鍋を構えた土産物店がもみじの天ぷらを揚げており、箕面の代表的な風物詩となっている。

三 四八番目の赤穂浪士萱野三平  
次に私と同じく地元箕面の出身の萱野三平の短い生涯を辿るとしよう。生年は延宝三年（1675）、旗本大島善也の家老萱野重利の三男として生まれた。兄が二人、姉も二人、妹が一人いた。三平と称されるが、本名は萱野重実である。俳人としても知られ、涓泉と言う号を名乗っていた。萱野氏は摂津国の萱野村（現在の箕面市）で鎌倉時代から続く土豪であり、旗本の大島氏に仕えていた。三平が十三歳の時、大島義近の推挙により播州赤穂藩主の浅野長矩に仕えることになった。大島家と浅野家はともに山鹿素行の門下で

が北の終点、千里中央駅から箕面市内へ延伸する工事がようやく完成する。これが2023年度に開業する予定であり、終点は「箕面萱野駅」に決定した。当初は「新箕面駅」と仮称していたが、由緒ある萱野の名を冠することになったのである。来阪の際には箕面萱野の駅名を目にすることもあるだろう。その時はぜひとも、若千二十八歳の悩める青年の姿が確かにあったことを思い出しもらいたいものである。(以上)



箕面大滝（箕面市観光協会から）

萱野三平記念館  
（箕面市観光協会から）



もみじの天ぷら（久國紅仙堂から）

### 【参考文献】

「忠臣蔵」の決算書

山本博文著：新潮新書

このほか、ウィキペディア、箕面市HP、箕面市観光協会の萱野三平記念館、久國紅仙堂HP、などを参考にした

## 特集テーマ「わが故郷の偉人」

### 讚良に馬がやってきた！ 〜古代河内の牧と馬匹生産〜

小林 道子

はじめに

現在は大型動物を「頭」で数えるが、これが使われるのは明治時代末期からであり、古くは「匹（疋）」と数えていた。「匹（疋）」という数え方は馬に由来するもので、「馬匹」や「匹」は馬の意味でもある。馬の尻が二つに割れているので、対（ついで）になっているものを表す「匹（疋）」を使用したという。のちに「匹（疋）」は馬だけでなく、他の動物を数えるときも使用されるようになった。

日本列島に馬が持ち込まれたのは四世紀後半から五世紀前半頃のことだ。馬骨・馬歯・馬具などが出土するのは古墳時代以降である。馬の飼育技術は渡来人の指導により各地に広まり、河内の讚良（さら）地域はその始まりの地のひとつと考えられている。

#### 古代の讚良地域

讚良地域は大府四條畷市の全域・寝屋川市南東部・大東市北部を範囲とし、律令制下では河内国讚良郡に属した。「讚良」は平安時代の『和名類聚抄』には「佐良良」という訓で記載されている。

『日本書紀』欽明天皇二十三年（567）七月一日条に「河内国更荒郡鷓鴣野邑」とあり、『日本書紀』天武天皇十二年（683）十月五日条には「婆羅羅馬飼造」と「菟野馬飼造」がみられ、この二人は連の姓を賜ったと記されている。持統天皇の名「鷓鴣野讚良」の「讚良」も讚良郡に由来し、この地と関係があったようだ。皇族の名に地名を使う場合は領地があったか、その地で生まれ育ったか、その地の出身豪族から乳母が出て養育され

たと考えられる。「鷓鴣」の地は現在の四條畷市砂、岡山を中心とする地域らしい。

#### 朝鮮半島から運ばれた馬

馬に関する文献は『日本書紀』応神天皇十五年（西暦？）八月六日条に百濟から良馬二匹が贈られ、大和の厩坂（奈良県橿原市大軽町付近）で飼育したという記事がある。ヤマト王権によって馬の導入が進められ、河内でも馬の飼育と生産をすることになった。

讚良地域で出土した遺物は百濟地域の系譜を引く韓式系土器が多く、百濟系渡来人が馬牧を運営していたとみられる。当時、わが国の玄関口であった讚良地域には馬とともに、馬の飼育経験と知識のある馬飼たちが移住したのだろう。

讚良牧は日当たりの良い斜面で栄養価の高い牧草が繁茂し、西は河内湖、東は生駒山系の山に挟まれていた。生駒山系からはいく筋もの川が流れ出し、湖や川は牧場の柵となっていたようだ。ここで飼育された馬は体高125センチ前後の蒙古系の馬で、この血統の馬は現在も長野県木曾町にある開田高原の牧場で飼育保存されている。

#### 海を渡ってきた馬

馬は準構造船に乗せられ日本列島に運ばれてきた。船の形は丸太をくり抜いた丸木舟に縦板や舷側板等を組み合わせて大きくしたものである。全長約十メートル、幅は約一メートル、最大十人の漕ぎ手と馬一〜二頭は乗せることができ、朝鮮半島と河内平野の直接航行が可能だった。馬を乗せた船は数ヶ月もかけて瀬戸内海経由で運んできたといわれるが、航海日数の少ない日本海経由だったかもしれない。どちらにしても危険な航海であり、多くの犠牲を伴ったと思われる。

#### 馬牧の条件

- ①放牧地域の広さは頭数によって広範囲（馬一頭につき一町から二町歩）の土地が必要であること。
- ②土地はやや傾斜地で、酸性土壌でなく乾燥性の肥沃な栄養価の高い牧草地であること。
- ③馬一頭につき一日一斗から二斗の水を必要とするため水源が得られること。
- ④飼料や生産物の運搬などに便利なこと。

⑤馬の健康に適した気候であること。

#### 馬匹生産と鍛冶技術

朝鮮半島では四世紀後半になると高句麗の南下政策により、新羅・百済・加耶諸国が圧迫されるようになった。倭国は鉄の原材料を確保するため百済・加耶諸国に援軍を送ることになる。百済・加耶諸国は軍事支援を要請する見返りとして、馬の生産と飼育の技術者を派遣することで倭国に協力したのだろう。馬や馬飼だけでなく、鉄製品をつくる鍛冶技術者もいたと思われる。

馬匹生産は畿内・九州・東日本の各地に牧を設置することで急速に普及していく。継体天皇六年

(512)条に馬四十四、欽明天皇七年(546)条に馬七十四、同十五年(554)条には馬百匹を百済に送ったという記事がある。このことから六世紀中頃には馬の国内生産が軌道に乗り、輸出するまでになったことがわかる。

高句麗の広開土王碑文には多少潤色を加えてあるかもしれないが、倭国が朝鮮半島に出兵し高句麗と交戦したと記録されている。

高句麗の騎馬による戦力を目の当たりにし、戦いに馬を使う必要性を感じたと思われる。乗馬の風習は五世紀前半に導入され、六世紀には日本全国へと広まった。

#### 四條畷の馬関連遺跡

四條畷市は大阪府の北東部、市域面積の三分の二を生駒山地が占める近郊都市である。名前の由来は南北朝時代、楠木正行と高師直らとの戦いの古戦場である四條繩手(畷)にちなむ。歴史は古く、古墳時代中期から後期の遺跡が多数存在しており、『日本書紀』にある「河内馬飼」に関連がある場所とされる。

① 忍ヶ丘駅前遺跡(古墳時代中期・四條畷市岡山一丁目)

昭和六十三年、JR忍ヶ丘駅の西側広場建設に伴う発掘調査で、ほぼ完全な形で雄の子馬の埴輪が出土した。ふつう、馬形埴輪には鞍が付属されている。しかしこの埴輪には鞍とたてがみが見られなかったため、発見当時は子犬形埴輪と紹介された。その後、奈良県荒蒔古墳の発掘調査において裸馬が発見されたことから子馬形埴輪に訂正された。

② 南山下(みなみさげ)遺跡(古墳時代中期・四條畷市岡山東一丁目)

昭和六十一年、忍ヶ丘駅前整備事業に伴う発掘調査において、幅約3.5メートル・深さ約40センチの大溝から発見された。主な遺物として、須恵器壺・土師器の壺・甕・高坏・馬形埴輪などが出土している。

発見された馬形埴輪の特徴は、朝鮮半島から運ばれた古代の蒙古系の馬と同じく、足の短いずんぐりとした体形をしており、胴体には粘土で轡・辻金具・手綱・鞍・障泥(あおり)・輪鏡(わあぶみ)などの乗馬の際に馬を制御するための馬具を付け、足元は蹄(ひづめ)を表現している。

近年、部屋北遺跡からこの埴輪に装着されているものと同じ形で、実際に使われていた漆塗りの木製鞍や木製輪鏡、青銅製轡が発見されている。このことにより、南山下遺跡の馬形埴輪が牧の馬であることが実証され、埴輪が当時の乗馬の状況を忠実に表現したものとわかった。

③ 部屋北遺跡(古墳時代中期・四條畷市部屋砂)

が、奈良時代になると馬の姿は見られなくなる。馬匹生産は河内から長野県の伊那谷や群馬県の榛名山麓など、より大規模な適地へ移行したからだ。古代の讚良地域は平地が少ないため、本格的に馬牧を経営するのは難しかったのだろう。

『日本書紀』天智天皇七年(668)七月条に「多くの牧場を設けて馬を放牧した」とあるように、各地に国営の牧が定められ、法律で厳しく管理されるようになった。

天武天皇十三年(684)閏四月五日条に「政治の要は軍事である。文武官の人々は努めて武器を使い、乗馬を習え。馬・武器、それに本人が着用する物は仔細に調べておけ」と記されている。また『続日本紀』文武天皇四年(700)三月十七日条に「諸国に命じて牧場の地を定め、牛馬を放牧させた」とある。

令制の牧は『養老律令』第二十三「厩牧令」に官営牛馬の飼養、駅および伝馬の設置と運営などが規定されている。平安時代中期までに勅旨牧(御牧)が信濃・甲斐・武蔵・上野の四か国で

平成十三年から十年間の発掘調査で、部屋北遺跡から馬飼集団の集落が発見された。遺跡からは竪穴住居・掘立柱建物などが検出され、五世紀後半から末にかけて集落の最盛期であったことが明らかになった。

集落遺跡からは日本で初めて埋葬された馬の全骨格(蒙古系で体高124センチ、年齢五歳から六歳と推定)が発見された。他に鉄製轡・櫛の一本造りの鏡二点・黒漆塗りの木製の鞍・馬の飼育に必要な塩の製塩土器約1500個が出土している。

この遺跡から外洋航海が可能な準構造船を再利用した井戸が七基も出土し、船材は杉材が占めているが、その中に一基、朝鮮半島で一般的に使用されているモミ材の船材のものが見つかった。

部屋北遺跡は河内湖東南端の水際近くにあり、海上交通の玄関口のひとつだった。

④ 奈良井遺跡(古墳時代中期・後期・四條畷市中野三丁目)  
昭和五十四年に発掘調査を実施した結果、一辺40メートル、最大幅約5メートル、深さ約1メートル×1.5メートルの隅丸方形

三十二牧設置され、毎年八月になると朝廷に宮廷儀式や神専用の馬が送られた。

#### おわりに

十世紀以降、東国の勅旨牧(御牧)から送られる馬はしだいに減少し、甲斐・武蔵・上野の三か国からの貢馬はなくなった。代わって現地の管理者たちが牧の経営を請け負うことになり、勅旨牧は私牧へと変化した。これが武士団の誕生とされる。中世になると源平の戦いや武田騎馬隊などで馬の活躍が目立ち、近世では流通手段として重要な役割を果たした。

以前から馬の考古学の文献は読んでいたが、今回「故郷」という特集テーマを企画していただいたことで、私が学び育った讚良(四條畷)の古代馬牧についてより理解を深めることができた。

#### 【主な参考文献】

『馬の考古学』右島和男監修  
雄山閣  
『図説北河内の歴史』瀬川芳則  
櫻井敬夫監修 郷土出版社

周溝墓の溝から七頭分の馬の骨が発見された。そのうちの二頭は首を切られて神の生け贄にされたもので、馬の年齢は馬歯の計測から十四歳以上の高齢馬とわかった。板の上に乗せられた状態で全骨格が検出され、骨の計測から120センチの馬だと分かった。この遺構は馬の生贄を神に捧げる祭祀遺構のようだ。馬の埋葬は主人とともに古墳に殉葬されている例も多いが、馬飼による神への生贄もあったと思われる。

⑤ 中野遺跡(古墳時代中期・後期・四條畷市中野)

昭和五十二年、大阪ガス埋設工事に伴い発掘調査をしたところ、溝の右岸側から火を使う祭祀に使用された焼け木と馬の下顎骨が見つかった。(年齢五歳位と推定)

さらに、昭和六十一年、国道163号拡幅工事に伴う発掘調査では古墳時代後期の素掘り井戸が検出された。井戸の中から板材の上に乘せた馬頭骨が発見され、頭骨の上には石と土器が置かれていた。井戸の廃棄に伴う犠牲馬とみられる。(年齢三歳から四歳と推定)

⑥ 更良岡山古墳群一号墳(古墳



- 『馬』が動かした日本史』 蒲池明弘 文春新書
- 『日本書紀』全現代語訳(下) 宇治谷孟 講談社学術文庫
- 『続日本紀』全現代語訳(上) 宇治谷孟 講談社学術文庫
- 『継体天皇と朝鮮半島の謎』 水谷千秋 文春新書
- 『はるかなる日々』 四條畷の史跡・文化財 四條畷市立歴史博物館 編集 四條畷市発行

「生贄にされた馬」奈良井遺跡出土四條畷市立歴史民俗資料館資料



「子馬形埴輪」忍ヶ丘駅前遺跡出土四條畷市立歴史民俗資料館所蔵



「馬の埋葬」 部屋北遺跡出土 大阪府教育委員会提供



## 特別寄稿 古代びとの犯罪被害(一)

松尾 光

高齢者を狙った犯罪は、あとを絶たない。認知機能の衰えた老人を狙って同じ物品を複数回売りつけたり、子・孫をかたって金を騙し取るオレオレ詐欺も巧妙になった。形は多少変わったが、他人様を騙しても自分だけ得しようとする気持ちがある限り、犯罪の種は尽きない。古代でも現代でも、そういう人はどこかにいる。

### 一、貸金詐欺・過払い金

昔も今もいちばん遣いやすいのは、借金をめぐる犯罪である。もちろん貸し借りなどしないで、自前で持っているものの範囲で生活していれば、犯罪被害者にはならない。しかしそうもいかないのだ。たとえば田植えは、早稲・中稲・晩稲の差はあるが、五月中にはすべて終えることになっている。また稲刈りは、播いた種の種類による

が、それでも稔りはじめて緑色から半分が黄色になる長くて七日の間に刈り取る。この時期を間違えると、田植えでは収穫の時に台風で倒され、水浸しになった稲からまた発芽する。稲刈りでは、実がいりすぎて粉のなかで胴割米・粉米となってしまう。

だから限られた数日間に集中して作業したいのだが、それには家族労働力だけじゃ足りない時もある。そこで人手を借りようとなるわけだが、ほぼ同じ時期に人集めが行われるので、売り手市場になりがちだ。となると労働提供側としては、条件のよりよいところに行きたい。たとえば、「うちでは」支払額がほかより多い。するとあっちでは「支払額は同じで、酒をつける」。じゃあ、「こっちは」酒に魚を付けよう。極上の鰯だよとか。そうやって集めた以上は、酒・魚を用意せねばならないが、酒など

いつも自分が飲む以上に持っているはずがない。そこで借りたり買ったりにして、酒を調達する。その酒代のために、高利貸しのもとを訪れる。

『令義解』雑令公私以財物条によれば公定利率などは、凡そ公私の財物を以て出挙せらば、任に私契に依れ。官為理めざれ。六十日毎に利を取れ。八分の一を過ぐるを得ざれ。四百八十日を過ぐるると雖も、一倍を過ぐるを得ざれ。家資盡きなば、身を役して折ぎ酬ひよ。利を廻らして本と為すことを得ざれ。

とあり、同令以稲粟条には稲粟の公定利率などを、凡そ稲粟を以て出挙せらば、任に私契に依れ。官為理めざれ。仍て一年を以て断りと為よ。一倍を過ぐるを得ざれ。其れ官は半倍と為よ。並に日本を回して、更に利を生さしむ及び利を廻らしとす、さらに同令出挙条には、

凡そ出挙は両情和同して、私契せよ。利を取ることを正条に過ぎたれば、任に人、札告せよ。利物は、並に糺人に給へ。とする。これらを纏めると、稲粟

借用(出挙)の利率は民間で一倍(一〇〇%)、官庁は半倍。財物出挙の利子は六十日ごとにそれに当たる価の八分の一(一二五%)とするが、四八〇日で一倍となっても、それ以上取ってはいけない。ともに利子分を元本に繰り入れてあたらしい元本とする複利計算は禁止。稲粟の二年目また財物の四八〇日以降は、利を増やさず、納れてある質物を売却して充てるかまたは労役に服して弁償せよ、との規定である。

ところが『日本霊異記』によれば、借り手の弱みに付け込んだ違法行為が横行していたようだ。

下巻第二十二縁に、信濃国小郡郡跡目の他田舎人蝦夷の悪行が記されている。軽重二つの秤を準備し、貸し出すときには(おそろく稲一束に対して)一把少なくし、返却時には一把多くさせた、という。稲粟だとすると、貸し出しが九把なのに、利一倍が二十二把になるので、元利合計が二・四四倍。四四%の過払いである。

このていどはまだよい方かも。下巻第二十六縁にある讃岐国美貴郡の大領の妻・田中広虫女は、「酒を活るに多の水を加へ、多くの直

を取り」「斗升、斤に兩種用ゐて、他に与ふる時には七目を用ゐ、乞め徴る時には十二目を用ゐて取め」たとか「貸の日は小き升にて与へ、償る日は大きなる升にて受受けぬ。出挙の時は小き斤を用ゐ、大きなる斤にて償り取む。息利を強ひて徴ること、太甚だし。非理に或は十倍に徴り、或は百倍に償る」とある。十倍・百倍はともかく、七目で貸して一年後に十二目なら、公定利率年〇・七五倍のところ、元利合計で三倍を納めることになり、一二五%の過払いとなる。さらにこれを複利にされたら、借り手は地獄を見る。現代では出資法違反だが、いまの利息制限法に罰則はない。とりあえず「過払い金返還の無料相談は……法律事務所に、いますぐお電話を」に連絡を取らなければ、である。

大領の妻ならたぶん金持ちだろうが、強欲でかつ吝嗇だから金持ちになつたのか。まあ、惜しげもなく使つたり慈悲の心を懐くようでは一生金持ちになれまいが、そこまでしなくとも、である。その結果、借主は「多の人方に愁へ、家を棄て逃れ亡げ、他国に跨蹴フル」つまり放浪する羽目になつた。何も

逃げなくとも、官に利の取り過ぎを訴えればよいはずなのだが、相手が郡司の妻では、告発しても夫に揉み消される。国司にじかに告発すれば上申ルートで逸脱した越訴となるから、今度は訴えた方が逮捕されてしまう。

## 二、私鑄銭の使用

金錢は不思議で、貴族は穢れた卑賤の者が持った物にふつう触らない。しかし金錢なら喜んで手に取る。金錢は誰からも忌避されない。人間の思考が作り上げた歴史的文化財の最高傑作であろうか。というのも、それ自体に価値がないものを有り難がつているからである。現在使っている一万円札の財務省印刷局での原価はせいぜい十五〜二十円で、日本銀行には二十二円で売り渡している。五十円・百円硬貨も原価十三円ほどで（「一万円札の驚きの原価率とは？」「雑学ゆるコラム」二〇二一年八月三日閲覧）、つまり手にしている紙幣や硬貨自体にほとんど価値はない。兌換と不換の話は措いておくとして、それだけの価値がないものを不当に高いものとして通

用させられるところが、貨幣鑄造の魅力である。

古代日本の最初の貨幣は、おそらく無文銀錢であろう。円形の銀板で、中央に小さな丸い穴が開いている。重さにこだわりがあったらしく、欠片を付着させて調整している。ただし実用の錢貨なのか、錢貨の形状をした儀式用具（厭勝錢という）なのか不明である。

ついで『日本書紀』天武天皇十二年（六八三）四月壬申条の「今より以後、必ず銅錢を用ゐよ。銀錢を用ゐること莫れ」の銅錢に当たるのが富本錢である。これも儀式用かもしれないが、円形方孔で「富本」と鑄出されていて、無文銀錢よりよほど錢貨らしい。おそらく、天武天皇は飛鳥の外側に藤原京建設を企てており、その造営經費を捻出するために、中国で使われている錢貨を導入しようとしたのだろう。ただ、今のところ発行数が多くなく、そこまでの決意で発行したものかどうか確信が持てない。

これに対して、通貨として本腰を入れて発行したのが和同開珎である。和銅元年（七〇八）に武蔵国使えば、詐欺罪か「額面価格の三倍以下の罰金又は科料」になる。くれぐれも、被害者のふりをしてカラー複写機なんかで作ろうとしないように。

以上

ところが解体されそうになつていた仏の「痛きかな、痛きかな」と叫ぶ声が寺の近くの路を行く人に聞こえ、結局、捕えられて牢獄送りとなつたという。同様の話は中巻第二十三縁にもある。これらは地金を売っているだけのようだが、これをもとに銅貨を作るとは難しくない。あるいは大仏鑄造現場で見聞きした技術をもつてすれば、自分たちも国家がしている魔法の錬金術ができる。この私製の銅貨が私鑄銭といわれる贗金である。

しかも、これは製造現場を押さえるほかに止めようがない。今の文様はプレス加工でつけるが、和同開珎では合わせ型方式の鑄型で鑄出す。鑄型は熱でポロポロになつてすぐ使えなくなり、一度に大量の鑄型を作ろうとすれば、原版の文様が多種類になつてしま

う。しかも錢貨製造所は、平城宮内・平城京内（平城左京三条四坊七坪）・近江・河内・長門など複数ある。多様な原版による錢貨の発行が見えられ、現に発掘で出土した和同開珎は重さも字の形・大きさも、細かく異なる（藤井一二氏著『和同開珎』中公新書）。

だから使う人からすれば、「この

錢貨はちよつと違う」と分かつて、製造所の違いかと思われてしまう。そんな使用状況なら、一枚の真正の錢貨を原版にして鑄型に押しつけ、それで踏み返したのとどれほど違つて見えようか。もちろん踏み返しは字や線が不明瞭で太く甘くなるが、使う側に精粗の差など分からない。いやそもそもどんなのが正しい和同開珎なのか、だれも知らされていない。

通貨偽造罪は刑法一四八条などに規定され、国家社会の信用にかかわるため重罪となつている。無期または三年以上の懲役で、執行猶予はつかない。古代では「凡そ私に錢を鑄るは斬、従ふは没官（官奴婢にする）。家口は皆流す。五保、知りて告げざれば与同罪」（『続日本紀』和銅四年十月甲子条）とあり、主犯は死刑である。

貰えば被害者、使えば加害者ともなりうる庶民だが、仮に私鑄錢と分かつていてそのまま使つても罪に問われなかったようだ。『続日本紀』には私鑄錢を作つた人が使用したかどうかの言及しかないから、それはよかつたが、だから一度出てしまった贗金の流通が止まらないのだろう。なお今は知つて

秩父郡（埼玉県秩父市黒谷）での和銅（高品位の銅）発見をきっかけに発行したとあるが、二年後に始まる平城京造営の經費捻出が狙いと見られる。二十二円が一万円となるほどではないが、四グラム弱の銅に文様を付けたら二キログラムの米が買える。その驚異的な錬金術に期待を寄せたのだ。効果のほどは不明だが、ともあれ以降、都のなかでは勞賃が錢貨で支払われるなど錢貨が流通し、畿内周辺では錢納もできるようになつた。

国家が公然となす錬金術を見て、指を咥えて見ているほど古代びとはお人好しでない。そんなの、自分にもできる。政府のすることを真似て、利益のおこぼれに預からうと企む人々が出てくる。和銅元年八月に魔法の壺の蓋を開けてから五ヶ月後には、贗金との際限のない闘いがスタートした。

『日本靈異記』中巻第二十二縁によれば、孝謙朝のある日、和泉国日根郡在住の盗人が尽恵寺に入り込んだ。そして仏像を仰向きに寝かせて、手足を切り取り、鑿で首を切断した。いつものように、これを帯状に延ばし、通行人に見せびらかして売るつもりだったのだ。



# 会員研究

## 古代蝦夷とその暮らし

木村 高久

### 1 はじめに

『日本書紀』『続日本紀』などの六国史には「古代蝦夷」に関しての記事が散見される。初見は十二代景行天皇の時代（一世紀から二世紀）からである。なお、最古は神武天皇紀にあるが、これは歌謡であり成立は六世紀前後で、時代が異なるので除くこととする。

ところで蝦夷の詳細については不明なことが多い。それは文献資料の記述が少ないことや、大和政権（のち律令国家）側の六国史や公式文書のみで、蝦夷側文献が皆無だからといえる。このため蝦夷側の主張が全く分からないのだ。

また『日本書紀』などの記事は結果だけで理由などが述べられてないことが多く記録が十分でない。更に、蝦夷は悪・野蛮との一方的な評価基準に基づき記載されているため『日本書紀』などの記述は鵜呑みにはできないのである。

考古学などを駆使し客観的に考察してもそこには限界がある。

ところで、蝦夷といえは大和政権との戦いが述べられることが多いが、今回は、基礎的な「蝦夷とは何か」と、余り語られることがない「蝦夷の暮らし」について論ずることとする。

### 2 蝦夷とは

蝦夷とは、国家側（大和政権）が古代の特定の時代に、東北地方の特定の地域の人々を指した呼称であると言える。

ここで、工藤雅樹氏（注1）の五段階説を基に蝦夷の解説をする。

（注1）考古学者。「蝦夷の古代史」などの著者である。

**第一段階** 「時代」五世紀以前  
「地域等」この段階では大和政権の支配は関東地方から東北地方南部まで及ぶ。ただし不安定であり時

には大和政権との戦いがあった。「蝦夷と評価」蝦夷とは、大和政権と戦うこともあった東北人を指した。また、強力な人、恐るべき人であるが少し敬意を払うべき人でもあった。

**第二段階** 「時代」ほぼ六世紀～七世紀前半である。

「地域等」この段階になると国造制（注2）という地方制度が敷かれたので、その制度の外部の地域住民が蝦夷と呼ばれる。主として仙台平野など東北地方中部の人たちである。この地域は弥生時代以来、水田稲作が行われていた。石廬丁（稲穂摘み取り道具）、蛤刃石斧（大陸系石器）さらに鋤、鍬など木製農具が発見されている。

また古墳時代には、大型前方後円墳である雷神山古墳（宮城県名取市）など沢山の古墳がつくられていて、国造制が置かれた地域と文化上の違いはない。

（注2）古代日本の行政機構に於いて、氏姓制に基づき地方を治める官職の一種

「蝦夷と評価」第一段階評価に加え大和政権支配外の人の意となる。

**第三段階** 「時代」大化の改新（六四五年）～平安時代初期

《エ》『日本書紀』斉明天皇五年（六五九）の条に遣唐使派遣の記事があり、その時陸奥の蝦夷男女二名を連れていき唐の天子（高宗）にお目につけたとある。その時のやりとりは随行した伊吉連博徳の書に記述されている。概要すると次の通りである。

天子「ここにいる蝦夷の国は何の方角にあるのか。」

使者「国は東北にあります。」

天子「蝦夷は幾種あるのか。」

使者「三種あります。遠い所の者は都加留（津軽）と名付け、次の者を鹿蝦夷と名付け、近いものを熟蝦夷と名付けています。今ここにいますのは熟蝦夷です。」

天子「その国に五穀（米・麦・粟・黍・豆）があるか。」

使者「ありません。肉食で生活しています。」

天子「その国に家はあるのか。」

使者「ありません。深山のなかの樹の下に住んでいます。」

天子「朕は蝦夷の顔や体の奇妙なのを見て不可思議に感じた。」

なお、中国史料の『通典』に「大唐の顕慶四年（六五九）十月、倭国の使者に従って蝦夷が入朝し

（七九四頃）まで。

「地域等」地方制度が国造制から国郡制（注3）に変わる。蝦夷の地域を所管する国として陸奥国と出羽国が置かれた。岩手県盛岡市と日本海側の秋田市を結ぶ線より南の地域に城柵（注4）が造営される。しかし、これより以北の地域は平安時代の未近くまで郡が建てられ大和政権の直轄支配を受けることはなかった。城柵が設置されると、東北南部、関東・中部地方から沢山の移民が連れてこられた。一方蝦夷を日本各地へ強制移住させたのである。

なお、仙台平野などの地域は七世紀末～八世紀初めまでに大和政権の直轄支配地にされたが、宮城県北部から北と秋田県は奈良時代（710年～784年）後半以後に直轄支配地となる。この時代の特徴は大和政権側と蝦夷の戦がしばしば行われたことであった。

（注3）古代日本において大宝律令により施行された地方行政・地方官制の方式である。

（注4）古代日本（7世紀～11世紀まで）において大和政権が東北地方を征服する事業の拠点として築いた施設

「蝦夷の評価」第二段階評価に足して伝統文化が異なる人々の意味を含めることとなる。

### 第四段階

「時代」平安初期

（七九四年）～平泉藤原時代まで。「地域等」元慶二年（八七八）の蝦夷の反乱である元慶の乱、前九年の合戦で蝦夷系豪族の安倍氏滅亡、清原氏の内部分裂に起因する後三年、これに伴う平泉藤原氏政権の出現などがある。この段階の蝦夷は、盛岡市と秋田市を結ぶ線より北の本州および北海道の人々をいう。

「蝦夷と評価」律令国家の直接支配以外の人々の意味は亡くならないが、異文化の北方の人々の面が強くなる。

### 第五段階

「時代」平泉藤原時代

の後半過ぎから鎌倉時代以降である。本州の北端部近くまでに郡が置かれ、時の政府の直接支配が行われる。

「地域等」蝦夷は北海道の人々（アイヌ民族）をいう。この段階は古代の蝦夷ではなくなるので、ここで記述を止めることとする。

### 3 蝦夷の暮らし

（1）初めに「蝦夷の暮らし」が記載された文献を表示する。

《ア》『日本書紀』景行天皇二十七年二月の条、武内宿禰が東国の田舎に日高見国（北上川流域か）が存在します。その国の人々は男も女も、髪を椎のように結び（髪をうしろに垂らして束ねたまげ）、身に入れ墨をしていて（略）これらすべてを蝦夷といいますが、また、土地は肥えていて広大です。攻略するとよいでしょう」といった。

《イ》『日本書紀』景行天皇四十年の条、天皇は皇子の日本武尊に蝦夷征討を命じ、「その東夷は性質が狂暴で、（略）冬は穴に寝、夏は樹に住む。毛皮を着て、血を飲み（略）」

《ウ》『日本書紀』斉明天皇四年（六五八）四月の条で、阿倍比羅夫が水軍を率いて秋田・能代二郡の蝦夷を討伐に行くと二郡の蝦夷は降伏した。その時秋田蝦夷の首長恩荷は「官軍と戦うために弓矢を有しているのではありません。ただ、手前どもは肉食の習わしがあるのので弓矢を持っているのです。」

た。」と記録されているので蝦夷が唐に渡ったことは事実であろう。

（2）暮らしの中の「食」、「衣」、「住」などを個別に検証する。

《ア》「食」について  
①前掲の文献資料等で「食」についての記述を確認する。

齊明天皇四年の条では、阿倍比羅夫に降伏した蝦夷が「肉食の習わしがあります」と述べている。また齊明天皇五年の条は天子が「蝦夷の国に五穀があるのか」と尋ねられたのに対し、使者が「ありません。肉食で生活しています」と返答しているのである。

さらに、延暦十七年四月官符で俘囚（注5）は「狩漁を生業とし、養蚕を知らない。」と書かれている。以上から文献資料では、蝦夷は、狩猟・漁猟を生業としていて農耕はないと記しているのである。

但し、『続日本紀』天平九年（七三七）では田夷 遠田君雄人があり、『日本後紀』弘仁三年（八二二）には田夷 置井出公皆麻呂など「田夷」の記載がある。田夷とは農業に従事する夷のことである。

よって、この頃になると農業を産業とする蝦夷もいたとする。

②次に考古学から文献内容を検証する。まず、東北地域の稲作導入はいつからであろうか。

青森県南津軽郡「垂柳遺跡」(紀元前三〜一世紀)から大量な炭化米と水田が見つかる。ついで、青森県弘前市「砂沢遺跡」(紀元前四世紀)から水田が発見された。

世紀前半に生じた洪水に起因する火山灰の泥流により水田が埋め尽くされ放棄されたからだという。私見を述べると基本的には寒冷化が要因であり、併せて火山灰の泥流による影響もあったと考える。根拠として対馬暖流は日本海沿岸地域のみに影響し、中央部や太平洋側の地域には影響がないと思われる。また東北地域全てが火山灰泥流に覆われたのではないからである。他方、東北中部・南部(山形県・宮城県・福島県)は水田稲作を継続しているのである。

このことは東北地域が古い時代から水田稲作が行われていたことを示している。ところが前一世紀〜六世紀にかけて東北北部(青森県・秋田県・岩手県)では水田稲作が消えてしまったのである。

その理由として高橋 崇氏(注6)は、その頃東北地方は小氷河期に入り気温が摂氏一〜二度ほど低下した。このため稲作が打撃を受けたので、稲作をやめ狩猟・漁労生活(続縄文文化(注7))へと回帰したか、あるいは住民が南下したのだという。

一方、藤尾慎一郎氏(注8)は、津軽地域は対馬暖流が流れているため田植えの時には湿潤温暖であり、気候が厳しい理由説の可能性は低いと述べる。実際は紀元前一

摘が妥当と考える。

③東北歴史博物館編集の図録「蝦夷」を参照すると以下の物が出土している。「青森県熊沢溜池遺跡」から「炭化ご飯塊」と「ダイズ炭化趣旨塊」が発掘。また他遺跡から「木製の椀」と「木箸」が発見された。その他、東北各地から農耕用具である木製鍬、鋤先、鉄製鎌、鉄製穂摘農具、釣針、鉄ヤス、製塩窯跡や製塩土器が発掘されている。このことは、蝦夷も農耕をしていたことを示すものである。

従って、東北北部人の続縄文文化時期の「食」は肉・魚・木の実等であるが、その他の時期は主に五穀を食べていたのである。

また、東北中部・南部人は引き続き五穀を食べていた。『日本書紀』等の記載は不正確であったのだ。

(注5) 陸奥・出羽の蝦夷のうち大和政権支配に属することとなった者

(注6) 古代史学者。蝦夷の著者(注7) 弥生・古墳文化に平行。

寒冷な気候の稲作を行わず縄文文化の影響を残す土器を使用

(注8) 国立歴史民俗博物館教授(注9) 歴史学者

は明らかに誤りである。

②また、ガラス玉・土玉・管玉などの装飾品で飾る者もいたと言えらる。縄文人はおしゃれであったが、弥生時代以降はおしゃれでなくなったと言われるので、岩手県台太郎遺跡の住民は続縄文文化時代すなわち狩猟の生活をしていた時期のものであろう。

③さらに、景行天皇二十七年一月の条に、「身に入れ墨をしていて」と記載され、また斉明天皇五年(六五九)の条、天子「朕は蝦夷の顔や体の奇妙なのを見て不可思議に感じた」とあるが入れ墨があったのであろうか。縄文時代の土偶の身体表示は入れ墨ではないと思うので、身体に入れ墨の有無は不明である。ただし、顔には一部入れ墨と思しきものが見られる。一定の期間、一定の地域では顔に入れ墨があったのかもしれない。

《ウ》「住」について

①景行天皇四十年の条で蝦夷は「冬は穴に寝、夏は樹に住む。」とあり、斉明天皇五年(六五九)の条では、天子「その国に家はあるのか」、使者「ありません。深山のなかの樹の下に住んでいます」と記述されている。いずれも蝦夷は

家屋に住んでなく、穴に寝あるいは樹の下に住んで居るとされる。

では、実際はどうであろうか。東北歴史博物館図録「蝦夷」では、竪穴住居跡(宮城県石巻市角山遺跡・青森県中野平遺跡)が出土されている。蝦夷の竪穴住居は方形でしかも壁の内側にカマドがあり、長い煙道があるのが特徴である。煙道を通った煙は住居外に出されるのである。暖房設備に関しては大和政権支配地と異なっている。『日本書紀』の「冬は穴に寝、夏は樹に住む。」の記述は事実誤認である。

《エ》交易

律令国家と蝦夷の関係は、常に対立や戦いばかりと思われるかもしれない。ところが、両者間では交易が行われていたのだ。

交易は、都または城柵で実施され、朝貢と饗給(注10)の場で行われた。律令国家にとって蝦夷との交易でもたらされる北方の産物は天皇や貴族たちの間で重宝されたところである。一方、蝦夷にとっても律令国家との良好な関係を築くと共に生活上に絶対必要なものであった。

(注10) 宴会を催し、禄物を与

えて懐柔すること。

『延喜式』に陸奥国、出羽国それぞれの交易雑物として、前者は葦鹿皮、砂金、昆布などが、後者は熊皮、葦鹿皮などが書かれている。他方、蝦夷にとっても交易で得る鉄製品、繊維製品、米、酒、塩などは必要不可欠であった。しかし、交易に携わる大和政権側の役人の中に私益を得るため蝦夷に対し不正な取引を強いたものがあった。これが蝦夷の乱を招く要因の一つであったことは、政権側もこれを認めているのである。

4 おわりに

大和政権が東北地方の蝦夷を支配したのは何故か。景行天皇二十七年二月の条、武内宿禰が東国から帰国して申し上げるのに「東国の田舎に日高見国(北上川流域)が存在します。(略)また、土地は肥えていて広大です。攻略するとよいでしょう」といった。これは収奪そのものである。このため、建前としては、蝦夷は未開で野蛮人であるから、大和政権により文明化するという中国の中華思想の模倣であった。

本音は、国際的には中国から朝鮮

《イ》「衣」について

①景行天皇四十年の条に蝦夷は「毛皮を着る」とある。

まず、東北北部の続縄文文化期間はどうであったのか。土偶をみて服の文様か入れ墨か判断がつかないと述べる人もいるが、裸に入れ墨で年間過ごせる人はいない。衣服の文様と考えるのが妥当ではないか。また、山内丸山遺跡(青森県)から出土した縄文ポシェットから植物繊維を編む技術がみられることから布製品(衣服)はあったと考えられる。

次に東北歴史博物館編集の図録「蝦夷」に衣服や装飾に関する出土品が提示されている。アサ繊維を編んだ布(青森県沢部(一)遺跡)、鉄製紡錘車(青森県砂子遺跡)、土製紡錘車(岩手県台太郎遺跡)、編み物のおもり(青森県野木遺跡)、木櫛(青森県中野平遺跡)そしてガラス玉・土玉・管玉(岩手県 台太郎遺跡)である。これらから、蝦夷は布製品を着用していたことが分かる。

なお毛皮であるが、冬期などでは防寒着として着用していた者もいたかもしれない。しかし、年中毛皮だけという『日本書紀』の主張

半島の各国より優位な評価を得たかったからであり、また、国内的には大和政権の権威付けの為に必要であったのである。

『日本書紀』などの六国史はしきりに蝦夷の暮らし、人格、容姿を野蛮で悪逆であると強調していたが、考古学的には全く異なっていた。続縄文文化期の東北北部を除けば、蝦夷の暮らしは大和政権支配地とたいして相違ない生活をしていたのである。

【参考文献】

- 1 「蝦夷の古代史」 工藤雅樹著 平凡社新書 2001:1発行
- 2 「蝦夷」高橋 崇著 中公新書 1997:8発行
- 3 「古代東北の地域像と城柵」 熊谷公男編 2019:3発行
- 4 「蝦夷―古代エミシと律令国家―」 編集・発行 東北歴史博物館 2019:9発行
- 5 〈新〉弥生時代」 藤尾慎一郎 著 吉川弘文堂 2011:10発行

# 鎌倉室町400

1576年(天正4年) ・信長安土城築城  
・足利義昭、毛利輝元に幕府再興を図らせる

## いざ南無(1376)義満の専制開始 <義満武家政権の確立を開始>

◆南北朝時代 永和2年(天授2年) 丙辰 第98代長慶天皇(第5代北朝:後円融天皇) 将軍足利義満

幕政を担っていた管領細川頼之の施政は斯波氏や山名氏らとの派閥抗争、寺院勢力の介入、南朝の反攻などにより徐々に信頼を失っていた。康暦元年(1379)細川頼之は斯波氏らとの抗争に敗北し失脚。前年、従三位に叙せられ、国政を担う公卿の職位を得た義満(19)は、頼之に代わり軍勢督促状\* a や感状\* b を発給するなど、軍事指揮権を掌握するようになる。また犬追物や蹴鞠を下賀茂神社で催すなど公家志向の強い武家の棟梁の顔を見せるようになる。



幕政を担っていた管領細川頼之の施政は斯波氏や山名氏らとの派閥抗争、寺院勢力の介入、南朝の反攻などにより徐々に信頼を失っていた。康暦元年(1379)細川頼之は斯波氏らとの抗争に敗北し失脚。前年、従三位に叙せられ、国政を担う公卿の職位を得た義満(19)は、頼之に代わり軍勢督促状\* a や感状\* b を発給するなど、軍事指揮権を掌握するようになる。また犬追物や蹴鞠を下賀茂神社で催すなど公家志向の強い武家の棟梁の顔を見せるようになる。

時代狂句

日野の縁百年たてば家勢増す幕府操る緊縛の紐

## 一夜南無(1476)富子へ懇意のご進物 <幕府権力が日野富子に集中>

◆室町時代 文明8年 丙申 第103代後土御門天皇 9代将軍足利義尚



富子の祈願所 梶尾高山寺  
富子が男子(義尚)出産を祈願成就した寺。浄土宗寺院。  
南無阿弥陀仏(なむあみだぶつ)

日野富子 幼将軍義尚(12)を護るため幕府の要となる。この年将軍代を務めていた富子(37)の兄日野勝光(48)が没すると、富子が実質的な幕府の指導者となる。「御台一天御計い」といわれた権力者富子の下には八朔の進物\* 2 を届ける人々の行列が1〜2町にも達した。また、ひつ迫する幕府の財政危機に、富子は持ち前の経済感覚を發揮し、応仁の乱東西両軍の大名に多額の金を貸し付け、米の投機等でも蓄財を増やした。しかし夫義政が東山山荘の費用捻出に苦勞していたが一銭の援助もしなかったと言われる。11月に室町第が焼失すると義政が住む小河御所へ移る。しかし富子と義尚が移った直後に義政は長谷聖護院の山荘に移る。↓81 83

### 幕府の財政 室町幕府の税制

- 直轄地: 御料所(直轄地)だけは幕府の運営は(できない)
- 段 銭: 田畑に対しての課税田 畑の一段(一反)に課す税金
- 棟別銭: 家屋に対しての課税
- 酒屋役: 高利貸を兼業する酒屋に対する課税
- 土倉役: 高利貸を営む質屋に対する課税
- 関 銭: 関所の通行税
- 津 料: 港への船の入港税
- 勘合符: 勘合貿易からの収入

※2 八朔…旧暦の8月1日。農民は早稲の穂を恩人へ贈った。ここから田の実「たのみ」節句と呼び、武家や公家でも進物の風習となった。

( )数字はその年の年齢(数え歳)

南無=敬意、尊敬、崇敬を表す

# 76 恒久の平和を願う

歴シキワード

# 南無 願いに手を合わせる

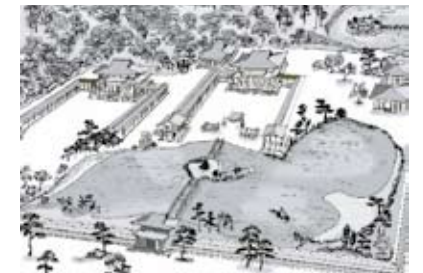
## 日々南無(1176)一切奥羽の平和 <藤原秀衡 鎮護国家教典の集大成を完成>

◆平安時代 安元2年 丙申 第80代高倉天皇 <院政> 後白河上皇

●平泉藤原三代の歴史  
初代清衡 長治2年(1105)、かつて慈覺大師が開いた中尊寺に平和国家建設を願って大規模な堂塔造営を開始。20年の歳月で金色堂・二階大堂の建設、庭園の造営を行い、平泉の基礎を築く。  
二代基衡 清衡の跡を継ぎ仏教を平泉のまちづくりに発展させた。毛越寺建立\*我が国に例がないほどの立派な寺と記録されている。鳥羽法皇は京の仏師たちの素晴らしい薬師如来像の出来栄に京からの持ち出しを禁止した。清衡菩提の紺紙金字の法華經千部製作を図る。  
三代秀衡 毛越寺の完成 無量光院の建立 平泉市街の完成。鎮守府将軍陸奥守を任命される。  
◆後白河法皇(50)は天台座主明雲(61)高倉 安徳天皇の護持僧より天台の戒を受ける。  
◆10月曾我十郎祐成(すけむね)五郎時致兄弟の父親・伊豆の豪族河津祐泰が工藤祐経に射殺される。



金色堂 極楽浄土を象徴する中尊寺の廟堂。内部を金箔で飾った阿弥陀堂。



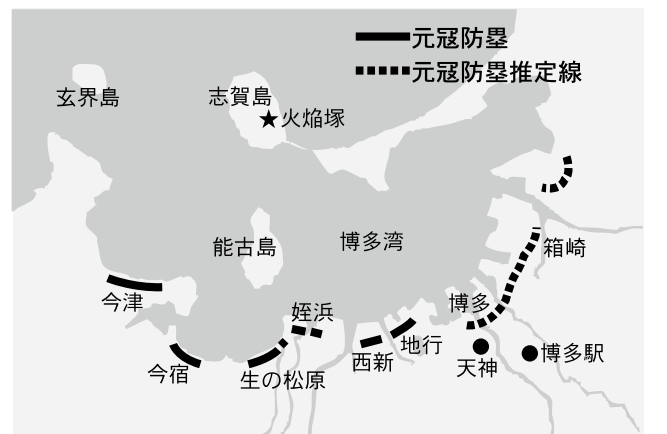
毛越寺 都の鬼門に当たる当地に鎮護国家祈願所として薬師如来を祀った天台寺院。

奥州平泉の藤原秀衡(55)は亡き先代のために一切経を写す。『紺紙金字一切経』(国宝)は経文の内容が美しい絵で描かれ平泉文化を飾るものとして伝われ『秀衡経』とも呼ばれる。

## 日々南無(1276)鎮西の石塁築く <幕府 鎮西武士に元寇防塁を築かせる>

◆鎌倉時代 建治2年 丙子 第91代後宇多天皇 <院政> 龜山上皇 7代将軍惟康親王 8代執権北条時宗

◆中国南宋が滅亡: 1127年金の侵略により北宋から高宗が江南へ国を再建、漢文化の伝統を保持し、高い経済力で繁栄する。この年、元フビライハンに臨安を占領され事実上滅亡。南宋幼帝は脱出後、抵抗するも入水自滅し完全に滅亡(1279年)。\*南宋の滅亡は1279年と記しているものもある。  
◆北条実時死去(53) … 8代執権時宗の寄合衆として政権を支え、金沢文庫を創設した実時が六浦莊金沢で亡くなる。



★火焰塚: 弘安4年(1281)の元寇の際、高野山の僧侶一行が護摩を焚き、博多湾に侵攻した蒙古軍の降伏を祈禱したといわれている場所。蒙古軍が退散し、一行が帰るとき、不動明王の火焰形をこの地にとどめた。  
南無遍照金剛: 真言宗(なむへんじょうこんこう)

幕府は高麗征伐の用意をさせるとともに、その他の鎮西武士に元寇石塁(元寇防塁)を築かせる。3月から約半年間で博多湾の海岸沿いに約20キロにわたる石垣を築いた。高さ: 幅は約2m。内部に小石を詰め、陸側に傾斜を持たせ、海側を切り立たせている。

※1 一切経…中国に伝わる釈迦教説の経典。大蔵経とも呼び、僧の生活規律「律蔵」、説教を述べた「経蔵」、これらの解釈「論蔵」の三蔵で構成

時節狂句

清き里基を作りし藤原の秀でる伽藍崇華三代

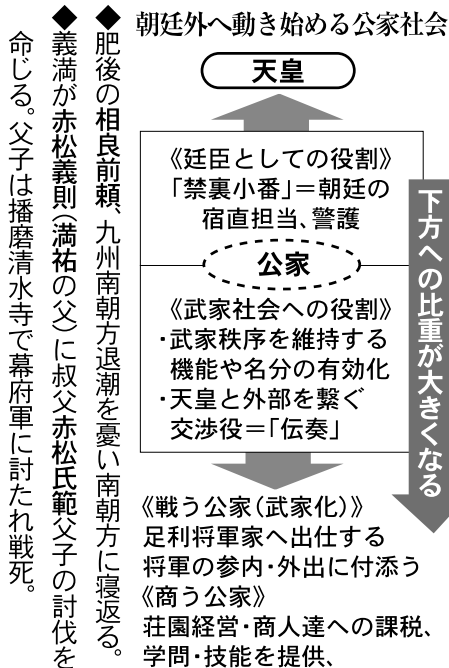
監修 高尾 隆

悲壮闘(1383)に紛れて正室刺傷 <後円融 不義を疑い正室三条氏を刺す>

◆南北朝時代 弘和3年(永徳3年) 癸亥 第98代長慶天皇(第6代北朝:後小松天皇) 3代将軍足利義満

時代狂句

ごうつくの富子むかつく父子のふるまい 政はケンツク尚はタテツク



朝廷のスキャンダルと建国以来の朝廷支配権喪失

将軍義満(26)が後小松天皇(7)を我が子のごとく手なづけ、禁裏に踏み込んでくるのを疎ましく思う後円融上皇(26)は、正室の三条敵子(33)と義満の関係を疑い太刀の峰で切りつけるといふ愚挙\*に及ぶ。さらに愛妾按察局と義満の密通を疑い自殺を図るなどの醜聞を起す。\*三条公忠(後愚昧記)

こうした事件の背景には武家が三条家をはじめとする公家社会を経済的な助成で武家社会に取り込み、例祭などの慣例をなし崩し、建国以来続いた朝廷独自の支配権を喪失してしまいう節目にあった。6月義満は准三后※2の宣下を受け、次第に公武権力の掌握を進めて行く。



一夜闘(1483)の中 義政家族崩壊 <将軍義尚 富子と不和 伊勢貞宗第に移る>

◆室町時代 文明15年 癸卯 第103代後土御門天皇 9代将軍足利義尚



※2 准三后...平安期以降、皇族やその近親者、摂政、関白等を優遇するために太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮に准じる者として与えた称号。

( )数字はその年の年齢(数え歳)

平家闘(1183)に紛れて都落ち <源 義仲、行家入京 平氏天皇・神器を奉じ西海へ>

◆平安時代 寿永2年(治承7年)\* 癸卯 第81代安徳天皇→後鳥羽天皇 <院政> 後白河法皇

時代狂句

白河と同じ旗色源氏とは仲違いしてほうほうの態

◆後白河法皇の院宣により藤原俊成が編纂『千載和歌集』完成

2月 頼朝と敵対していた志田義広と源行家が義仲に庇護を求める。

3月 義仲は頼朝との対立を避けるため嫡男義高を人質に鎌倉へ送る。

4月 平維盛が10万兵で北陸へ。火打城の戦い、「三条野の戦い」「安宅の関」で義仲勢に連勝。

5月 源義仲 倶利伽羅峠で維盛軍へ奇襲攻撃、逆転勝利。

6月 義仲行家軍加賀で平氏を破る。

8月 平氏一門の官位を奪い没収所領を義仲行家に与える。

9月 尊成親王(後鳥羽)が後白河法皇の命を受け即位。

10月 義仲備中水島で平氏に敗れる。平氏屋島に到る。

11月 義仲 法皇の御所法住寺殿を襲つ。明雲射殺。

12月 頼朝 義仲追討に範頼、義経を上洛させる。

なぜ頼朝は京へ上らなかつたのか?  
①上洛中に陸奥の藤原秀衡、常陸の佐竹秀義が鎌倉を攻めるから?  
②数万の兵が入京すると兵糧が不足するから?

平宗盛に擁せられた安徳天皇は神器と共に西海へ

大宰権少貳原田種直の庇護を受けるも豊後緒方惟美の追討により再び西海へ

赤間関 長門 水島の戦い 屋島 福原 安徳天皇 行の動き 倶利伽羅峠 安宅の関 三条野 火打城(随城) 京

悲憤闘(1283)について禁中乱入 <延暦寺衆徒神輿を奉じ禁中に乱入>

◆鎌倉時代 弘安6年 癸未 第91代後宇多天皇 7代将軍惟康親王 8代執権北条時宗

四天王寺別当職をめぐる叡山の仁義なき戦い

1月 延暦寺衆徒が四天王寺別当※1の人事に抗議し、神輿(またはシンヨ)を奉じて禁中に乱入し、四脚門を破壊するなどの乱暴狼藉を働く。後宇多天皇は、近衛殿(龜山上皇の邸宅)へ避難する。

「山門派」延暦寺

「寺門派」園城寺(三井寺)

神輿と神木

寛治八年(1092)延暦寺は強訴の際、日吉神社の神輿を先頭に立てて訴えた。また翌年の興福寺の強訴では、初めて春日大社の神木を押し立てて入京するなど神威によって強訴の正当化を図った。嘉保元年(1095)延暦寺の強訴を武力で撃退した関白藤原師通が4年後に急死すると、神輿神木を押し立てた強訴を真族たちは恐れるようになり、強訴は増加していく。こうした強訴は大寺院の既得権益の侵害を阻止することが目的で、政府の政治問題や朝廷の問題に介入することはなかった。

武装化強訴の始まりは天台座主(叡山)をめぐる山門派と寺門派の分裂抗争

中世の院への強訴の主な理由

- 地方の荘園をめぐる国司と大寺院が対立し院に抗議
- 大寺院の未寺において国司と紛争が起き、院に国司の処罰を求めた。
- 大寺院の人事や既得権益に朝廷が介入した時。

◆ 円覚寺を将軍家の祈願所とする。 ↓ 82

春日神社(藤原氏の氏神)の神木(しんぼく=神)をかざして興福寺の僧兵(大衆)が朝廷の使者に強訴をしている。「天狗草子(鎌倉期の絵巻)」

※1 四天王寺別当...聖徳太子の創建当初、宗派の概念がなかったが、最澄が四天王寺の別当を務めて以来、天台(叡山)が寺の執事となる。

監修 高尾 隆

## 会員研究

### 幕末の薩摩藩と体調不良男と維新

#### クーデターという疾患と 眞野 信治

はじめに

幕末から維新にかけて薩摩藩閥の貴重な記録類は大量に失われてしまっていたという事実はあまり知られていない。現在我々が接している薩摩藩の幕末から維新にかけての歴史は、明治になってから再編された史料をもとに語られている歴史なのである。つまり、近世であるにもかかわらず、薩摩藩所収の同時代史料は非常に少なく、その時本当は何が起こっていたのか、実際のところはよくわかっていないのである。加えて、現代の我々に浸透しているのは、やはり「司馬史観」であり、そこから導き出される薩長英雄伝なるフィクションが定説化していることは否定できない。もちろん明治維新の立役者は西郷隆盛・大久保利通らであることは間違いないが、このような独特史観の陰に隠れた薩摩藩の実態を掘り起こすことの重要性が日々

増してきているのも事実である。ここでは、その実像に迫ると共に、その中から窺い知ることの出来る薩摩藩重要人物が、実は体調不良に悩まされていたことに触れながら、幕末薩摩藩激動の瞬間をおさらいしてみたい。

#### 一. 記録類が失われた四つの出来事

薩摩藩幕末史料につき、多くの同時代史料が失われてしまい、良質のものが無いのは、以下の事情によると家近良樹氏は指摘している。

【その一】安政五年、島津斉彬没後、その遺言により関係資料の多くが焼却された。ひよつとして、琉球との密貿易の事実を隠すためにその関係書類を処分した可能性がある。【その二】慶応三年、江戸薩摩藩邸焼き討ち事件による大量焼失。【その三】明治五年、大山綱良が旧習を打破するために旧藩閥

係の史料を意図的に焼却。この大山の行動は諸説あってよくわからない。【その四】明治十年、いわゆる西南戦争時における焼失。こうしてみると、鹿児島城下・藩江戸屋敷などが戦禍によって何度か焼かれたことで、貴重な書類が残らなかったわけだが、激動の時期であるが故に致し方ない事であろう。では、我々が史実を知る手段として他に何かあるのか。現状では同時代に書かれた藩士らの日記類を利用すること、それ以外に方法はない。そこで家近氏が注目したのが市来四郎という一藩士の書簡である。またそれ以外にも、道島正亮などの日記、及び藩士が残した書簡の一部などを引用してみることにする。そこから、当時の薩摩藩、特に国許と京都の間で発生していた意外な事実が浮かび上がってくる。

#### 二. 決して「地ゴロ」ではなかった島津久光

西郷が島津久光に初めて拝謁した時、久光は無位無官、単なる島津三郎でしかなく、薩摩を出たこともなかったという。それを踏まえ

#### 四. 最後まで少数派であった

##### 西郷・大久保

慶応三年八月六日付の道島正亮日記にこうある。「家老の関山礼が言うには、西郷が挙兵という暴論を吐き、長州を助けようとしているのは、第一次征長時に三家老の処刑で事が済むと豪語したにもかかわらず第二次征長が起こってしまったことで長州側に顔が立たず、やむなく挙兵論を提唱しているだけと指摘している」と。関山は万延元年三月、大久保を「第一人望帰服、天下の形成も心得居り候者」として久光に推奨したほどの人物なので、その関山から猛烈に批判された西郷はぐうの音も出なかった。さらにこの関山が、武力討幕を推進する小松と激論に及んだところ、「小松を討て討て」という声がいたるところで上がったという。さすがの小松も分が悪かったという事だ。また国許でも、挙

兵の是非をめぐり対立が派生している。寺田屋騒動で同胞の有馬新七を惨殺した奈良原幸五郎（後の繁）は、強く上京を希望し「西郷などが万一間き入れなかつたら刺し殺す考えだ」と発言、挙兵討幕には断固反対の意思を激しく表明

を「地ゴロ」つまり田舎者とバカにするともに、その計画に対し「浮浪輩の書生論」とまで言っている。かなり厳しい発言であり、無礼極まりないものであった。家来筋の西郷にここまで言われた久光が、終生西郷に対し反感・嫌悪を抱いたのは当然のことであろう。同時に久光の側近達も同様の憎悪を西郷に向け続け、西郷一派が後々まで藩内で孤立していた大きな要因ともなっている。その後西郷の予想に反し、上洛以降の久光の働きはなかなかのもので、京都での政局を見事にやっつてのけ、孝明天皇に認められて薩摩兵千人が勅使に随行しての江戸行きを許されている。また江戸では幕政改革に関する建白書の提出など幕府への対応に関しても素晴らしい実績をあげており、その手腕には大いに驚かされたのである。ただ、久光が一般的に評価を下げている理由の一つはやはり

「生麦事件」およびそれが起因している「薩英戦争」の勃発であろうか。しかし、これは大名行列を横切った英国人の落ち度であり、久光の対処に問題はない。一方で「寺田屋事件」出来時に下した咄嗟の判断は決して間違いとは言えず、

これによって朝廷の久光に対する信望は大いに高まったことは非常に重要である。結果として、久光は決して「地ゴロ」ではなかった。逆に、西郷の人を見る目が確かであったのかどうか、こちらのほうが問題である。

#### 三. 薩長同盟は

##### 軍事同盟だったのか？

慶応三年五月から行われていた「四侯会議」が、徳川慶喜にうまく牛耳られてしまったことを踏まえ、京都薩摩藩邸内で今後の対応を練るため会議が開かれた。何のために久光を引つ張り出したのか、家来達はその事由を問われかねないからである。その際、驚くべきことに、京に詰める藩の重役（大目付兼家老の関山礼、側役の田尻務、養田伝兵衛、留守居役の内田清風）の中で、薩長同盟の存在をこの場で初めて聞かされ、驚愕した者がいたという事実である。最近の研究では、薩長同盟が虚構であった旨の論調が多く見受けられる。要するにこの件は小松帯刀や西郷などのごく一部の藩士と長州藩木戸孝允の間で取り交わされた、口約束程度のものであったという事

である。そうでなくとも、せいぜい覚書の取り交わしレベルのものではないだろうか。その要旨はおそらく、第二次長州征伐が起こった際、薩摩は中立の立場をとる、などを取決めた程度であろう。京都詰めの家老の中にこの件を認識していない者がいたという事実は重要であり、その点を踏まえると到底軍事的な盟約であったはずはない。そもそも「薩長同盟」というフレーズも、明治十年頃、木戸孝允が「薩長盟約」という言葉を使い始めたことで注目され出したのであって、それまでは幕末の重要なインシデントと言えるほどの代物ではなかった。因みにこの盟約の仲立ちをしたと言われている坂本龍馬であるが、その役割が何であったのか、確実な史料からは見えてこない。坂本はこの盟約をもとに薩摩藩名義でグラバーから武器を購入し、それを長州に流したことが通説となっている。しかし維新後に、伊藤博文が当時の長州藩の武器調達は坂本ではなく自分がやっていたと証言していることから、この時期の坂本の動きは再考すべきことと考える。

している。結果を知っている現代の我々は、維新クーデターに成功した西郷・大久保の「武力討幕」論が薩摩藩の主流であったと思いがちだが、当時藩内は決してそのような風潮ではなく、逆に西郷らの意見はマイノリティであったことが日記から読み取れる。また、藩士『本田右衛門の手紙』からは、「藩の収支のバランスが崩れ日々の用途にも差し支えがある。京都大阪は何事もなく、他藩も静謐なものになぜ我が藩のみが事を進めるのか、京都と薩摩がはなれていて情意が通じておらず、皆出兵に驚いている、この度の上京に際し病氣と言う者が多く、何故出兵が必要なのか重臣連中もわかつていない」と記しており、国許では一体何のための挙兵なのかかわからず、藩士の隅々までその意向が浸透していない状況であったことが窺える。

#### 五. 腰痛に悩まされていた久光

こうした中で島津久光の胸中は如何なるものであったのか？少なくとも武力討幕などは眼中になかったとみて間違いない。慶喜とは政治的妥協を見出だせなかつたが、だからと言って挙兵しての討幕な

どは考えてもおらず、あくまでも徳川家を存続させた上での「公議政体」へのスムーズな移行を目指していたのである。したがって、西郷・大久保の意見に賛同することは恐らくなかったと思われる。ところが久光は、慶応三年の九月には、京都滞在中に患っていた腰痛が悪化、ついに薩摩に帰り養生することとなった。その際、医者の見立てを取り上げて頻りに帰国をすすめる西郷らに胡散臭さを感じていた久光であったが、その気力も失せるほどの重症であり、帰国の途に就かざるを得なかった。ここが非常に重要な分岐点であり、以降の久光は、激動の京都への再上洛は能わず、遙か彼方の鹿児島で静養を続けつつ、明治新政を迎えることとなってしまう。そして、もちろん彼の意思は在京の西郷らに伝わることはなかった。この久光の体調不良による京都不在が、維新クーデターに多大なる影響を与えることとなったのは言うまでもない。仮に彼がそのまま在京していれば、おそらく薩摩藩兵の挙兵は絶対あり得なかった。反面、久光の代わりに上京した藩主茂久は、まだ若く経験が浅かったため、西郷らの操

り人形であったことは容易に想像がつく。後に、西郷らに騙されたと悔しがる久光が版籍奉還・廢藩置県などの新制度を許容するはずもない。毎夜錦江湾に火花をあげて憂さを晴らしていたというが、その気持ちはよくわかる。

#### 六、足痛に悩まされていた

##### 小松帯刀

体調不良であった重要人物がもう一人いる。当初から西郷・大久保の挙兵討幕論に加担していた小松帯刀である。ただ、大政奉還の建白書が出されて以降、裏では討幕の密勅発布を画策しておきながら、表では徳川慶喜の大政奉還の上奏、その後の勅許がでるまでを上手くサポートしている。その間、何度か登城し、慶喜と密談に及んでおり、慶喜も小松を大変気に入っていたという。こうしてみると、この時期の小松は完全なるダブルスタンダードと言われても仕方がない。その背景には、やはり討幕の密勅は偽勅であるが故の後ろめたさと、加えて藩を背負う立場上、その場にはない久光の意向は無視できない思惑もあった。したがって、武力発動というリスクを背負う暴

挙よりも、政権を無血で勝ち取れるのであれば、貪欲にそれを追求するというスタンスに変心しつつあったのである。ところが、この帯刀も以前から足痛に悩まされるなど、体調不良が続いていた。慶応三年十一月、大事を前に小松・西郷・大久保が揃って鹿児島に帰国した後、小松の病状はさらに悪化し、歩行も困難となってしまった。一か月後、藩主茂久が父久光に代わって上洛する際、随行する予定であった小松だが、当時自分たちと小松の間で微妙に意見の食い違いが生じていると感じた大久保が、病氣療養を勧めるふりをして、小松に上洛をさせないよう密かに手を打った。これが大きな歴史のターニングポイントになるのである。仮に小松が上洛し、気心が通じている將軍慶喜及び土佐の後藤象二郎と連携しながら、小御所会議を取りまとめたとしたら、確実に鳥羽伏見の戦いは無かったであろう。そう考えると久光同様、この時期体調不良で上京出来なかった小松不在の影響は計り知れないものがある。

#### 七、二人の体調不良が歴史を変えた

このように幕末薩摩藩を俯瞰すると、少数派で苦境に立たされていた西郷・大久保にとって、久光及び小松の病状悪化がとてつもなく好都合であったことがよくわかる。繰り返すが、二人の体調が不良であったことが、まさに歴史を大きく変えた要因であった。すなわち、西郷らは両名の京都不在時期を最大限に活用し、彼らの思惑とは全く違う武力クーデターを成功させてしまったのである。先に触れた通り、久光・小松のどちらか一方が在京していた場合、薩摩藩の武力発動はあり得なかったと言っても過言ではない。小松は帰郷する直前の二カ月間、非常に重要な動きをしている。このまま行けば、西郷らの武力討幕に与することはなく、無血での政変を画策したと見なす余地は大いにある。しかし、維新後すぐに病没してしまっていることから、小松と西郷・大久保の間でかなりの温度差があったことはあまり知られていない。因みに、武力討幕から無血政変へ心変わりした可能性のある小松の状況を徴証する史料として『寺村左膳道成

日記』がある。この日記には、留守居役の高崎正風が小松をたしなめるため何度となく意見具申していたことが記されており、それが小松の心変わりにならずに影射していることがわかる。高崎は慶応三年末までは間違いなく薩摩藩を代表する天下の人材であり、彼の京都藩邸内での影響力は計り知れないものがあった。しかし、その高崎は鳥羽伏見の戦い後に京都から追放される。穩健派であり、反西郷・大久保であったがゆえ、一瞬で手のひら返しを食らったと言っている。

#### おわりに

市来四郎は、後年、慶応三年末の薩摩藩の状況を次のように回想している。「当時藩庁に於いては、島津図書（久治）君国老上席にありて、桂右衛門と事を取れり、伊地知壯之丞、奈良原幸四郎の一輩、西郷・大久保等と緩急の議を異にし、過激事を破り、累を島津家に及ぼさんことを慮り、君に説き、西郷・大久保の所為を不策とし、暗に謀る旨あり、之に左袒する者川上助八郎・高崎五六・三嶋弥兵衛（通備）の諸氏なりと伝ふ」。つま

と突き進んでいくのである。すべてがこの一瞬でひっくり返ってしまった。これが幕末薩摩藩、激動の一瞬なのである。

参考資料：家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局』、『もう一つの明治維新』、鈴木莊一『明治維新の正体』、高村直助『小松帯刀』、原田伊織『知ってはいけない明治維新の真実』、町田明広『新説坂本龍馬』





## 会員研究

# 大伯皇女 — 帰路の嘆き —

遠田 千代吉

### はじめに

私たちは歴史にどう対峙したらよいのであろうか。歴史上の事象について、意見を述べ、また、それを叙述するとき、私たちのとるべき姿勢がとても大事である。ここでは二人の識者の導きを得て、市井で歴史を愛好する私たちの道しるべとした。

### (一) 司馬遼太郎氏の言

多くの人が敬愛する司馬氏は、直木孝次郎氏との対談「古代史の人間を語る」[註一]のなかで、次のように言っている。

「古代史の世界というものが、たいへんポエジーの世界になっているんです。このなかで詩的(※)空想(※)というのはしろうとの特権的立場でしてね」

このように学者ではない多くの人が、自由に、古代の世界に詩的空想を馳せる面白さを強調している。

### (二) 呉座勇一氏の言

わたせるものがあるが、称制前紀を含め巻三十の持統紀をみると、皇子○○、皇女○○の表現が随所にみられ、必ずしも罪人としての皇子・皇女の呼び捨て呼称ではない。持統紀全体での皇子・皇女の呼称を各人別に集計してみると、次の通りである。

### ①皇子○○・皇女○○の呼称

### 十一例

### ②○○皇子・○○皇女の呼称

### 四例

ここにみるように①の呼称表記が多く、三分の二以上となっている。『紀』における持統紀を記述担当した史官の個性、記述方法の特殊性が窺われるのである。

(三) 大伯皇女の齋王としての任の評価

ここで大伯皇女の齋王としての評価をしておく必要がある。大伯皇女は天武朝(六七二〜六八六)の伊勢神宮の祭祀を、交替することなく一人で安定的に支えた。齋王制度成立の草創期に、十三年にわたり任を果たしたことは、天武天皇の信頼が厚く、本人の真摯な祭祀への取り組みが認められたものとして、改めて評価されるべきである。このことは、次に齋王の派遣

一方、『応仁の乱』の執筆以来脚光を浴びる呉座氏は、朝日新聞の書評欄「註二」で、次のように述べている。

「三十一年で弥生時代・古墳時代の考古学研究は大きく進展した。その成果を無視した作家・自称歴史研究家の新説は学問的に無価値である」

ここでいう自称歴史研究家であくられる市井の私たちの空想新説は、条件付きながら「無価値」として切つて捨てられている。私は「うーん、そんなことを言ったって」と、ひそかに反発の念を持ちながら唸るばかりである。ただ、あまり感情に走らず、ここでは呉座氏は、確実な史料に基づく持説の展開をすべきと強調していることを理解すべきである。

### (三) 史的空想

この二氏の発言を受けて、私たちが市井で歴史に向かうとき採るべ

される文武朝(六九七〜七〇七)と比較すれば浮き彫りとなる。文武朝においては、この十年の間に、当者皇女・泉皇女・田形皇女の三人が交替し、齋王の任に当たっている。時の天皇の齋王についての認識・期待が違うとはいえ、これに続く奈良時代と比較しても、大伯皇女の齋王としての長期性・安定性が際立つのである。大伯皇女は、それだけ十分に、任じられた役割を果たしたのである。

### 三 帰京の嘆き

### (一) 万葉歌の嘆き

大伯皇女が齋王を退き、飛鳥の都に戻るに際しての悲しみの歌がある。『萬葉集』巻第二一・一六三〜一六四番歌である。

「大津皇子の薨せし後に、大伯皇女、伊勢の齋宮より京に上る時に作らず歌二首

神風の 伊勢の国にも  
あらしを

何しか来けむ 君もあらなくに  
(一六三)

き立場は、「史的空想」であると私は思う。この言葉は、司馬氏の言にみられる「詩的空想」から転用した言葉である。しろうとが、しろうとなりに確実と思われる史料を集め、集めた史料のなかから「こうではないか」という歴史上の姿を空想してみたいのである。この空想のなかに見出す自分なりの新しい歴史領域の発見が、しろうとの喜びなのである。しろうとなりに確実と思われる史料に基づき、制約を受けず空想に遊ぶ、是こそが「史的空想」であり、いわばしろうとであるからこそ許された「しろうとの醍醐味」である。

### 二 大伯皇女の齋王退下

天武天皇の崩御、弟大津皇子の刑死を受け、大伯皇女は齋王を退下することとなる。

天武天皇に任命され、天皇の名代として伊勢の神に仕える立場からすれば、退下は已むを得ざることと言える。ただ、十数年にわたる齋王の務めを真摯に果たしてきた皇女にとっては、父天皇の崩御、弟の刑死のなかでの突然の退下は、悲しく無念なことに違いない。

### (一) 持統皇太后の召喚

見まく欲り 我がする君も

あらなくに

何しか来けむ 馬疲るるに

(一六四)

父天武帝の崩御、兄の刑死とうち続く悲報に、都への召喚と続き、やり場のない悲しみに沈む歌となっている。伊藤博氏は『萬葉集釋注』[註四]のなかで、「何しか来けむ」が二首の嘆きの焦点となり、背後に、次の二つのやりどころのない怒りさえ含んでいるとしている。

①姉として弟大津の運命に対して、何の力も貸すことができなかった

自責の念

②また、弟皇子をかくあらしめた「モノ」(権力)に対する内に秘めた怒り・詰問

ともかくにも、このようにうちひしがれた心を引きずりながら、都に帰ったのである。

### (二) 「なくに」止め

先にみた万葉歌のなかに、「なくに」の表現が共通してみられることから触れておきたい。「なくに」は主として詠歌に用いられ、句切れの助詞として「逆接の意」を表し、

現代語の「〜ないのに」に相当す

『日本書紀』(以下『紀』)持統天皇称制前紀に次の通り記される。

「朱鳥元年(六八六)十一月一日 伊勢神祠に奉れる皇女大来、還りて京師に至る」

齋王の任にある大伯皇女は、自らの意志で行動できぬ身の上であり、この齋王の解任・召喚は、天武天皇亡きあと、時の朝廷を統率する持統皇太后によってなされたものに違いない。「註三」それにしても九月九日の天武天皇崩御、九月三十日の殯・誄儀礼の一段落、一〇月三日の大津皇子の刑死とあわただしい儀式・混乱の続くなかで、一月中旬の齋王解任は、事態の鎮静化を踏まえた絶妙のタイミングといえる。

(32)

### (二) 「皇女大来」の呼称表記

ところで、先に挙げた『紀』の記文の「皇女大来」の呼称表記が気になる。大津皇子の謀反については『紀』・持統称制前紀を中心に記述されている。このなかで大津皇子の謀反の罪状に関連し、皇子大津、皇女大来という手厳しい呼称表記がなされているという論もある。たしかに、謀反に関連する記事の筆致は手厳しく、それを窺

る。事実と違う逆接であるだけに、使われる場面により、詠嘆の念も深くこもることとなる。いわば「嘆き」と「落胆の余韻を残す」なくに止めといえる。誰もいない寒々した荒野に一人取り残された寂寥感の感じられる言葉である。嘆き、落胆の感情の波がつきつぎに打ち寄せ、悲しみに一人無言で立ち尽くす言葉である。大伯皇女の、先の二首については「なくに」止めが、このように使われていると解すべきである。

(33)

この、「なくに」止めは万葉集で、

逆接表現の手法として他にも多く使われており、その事例をみてみる。同じ天武皇女である紀皇女の

巻第三一三九〇番歌である。

「紀皇女の御歌一首

軽の池の 浦み行き廻(み)る  
鴨すらに

玉藻の上に ひとり寝なくに」

独り寝の寂しさをかこつ我が身の寂しさを詠ったものであるが、紀皇女が艶問の多い人として知られているだけに、何か軽妙な寓意も感じられる歌となっている。大伯皇女の歌に比べ、独り寝の寂しさ

を嘆き、背景の深刻さが相違する  
とはいえ、歌を比較することによ  
り、二人の皇女の個性・人間性の  
あり方の相違が浮かび上がってく  
る。

#### 四 齋宮からの帰り路

齋王の任を解かれ、都に帰るこ  
ととなった大伯皇女は、どの路を  
たどり、また果たして徒歩（かち）  
により帰ったのであろうか。

##### （一）帰路

飛鳥側から伊勢神宮、齋宮への  
官道は「阿保越え」である。阿保  
越えは、伊賀郡（こほり）の駅（う  
ま）馬（や）から阿保山を越え、  
伊勢側に行宮（あんぐう）の置か  
れた河口に至る峠道である。今は  
近鉄大阪線が走り、青山町駅の先  
で、伊賀と伊勢の国境の青山トン  
ネルを抜ける。ここにいう青山は、  
於（あ）保山（ほやま）の現代風  
表記である。この官道は、道沿い  
に駅馬、郡家が控え、宿泊施設や  
各種物資が備えられている。大伯  
皇女は齋宮からの帰路に、この「阿  
保越え」の官道を逆に辿ったと思  
われる。

具体的には次の道筋となる。

○伊勢国  
齋宮→ 志志郡・郡家→  
→河口頓宮→ 阿保越え→

○伊賀国  
→伊賀郡・駅馬→  
→名張郡・駅馬→

○大和国  
→宇陀郡・郡家→飛鳥・浄御原  
行程で百キロメートル余の距離と  
もなり、移動手段にもよるが、四  
泊ないしは五泊の旅であったと思わ  
れる。

##### （二）「馬疲るるに」

ここからは大伯皇女が、召喚に  
より齋宮から飛鳥に帰るとき、徒  
歩によったのか、乗り物によったの  
かを考察したい。この課題は本来、  
初瀬において禊を終え、齋宮に向  
かうときに考えるべき課題でもあっ  
たが、見過ごしていた。ここでは  
帰京に際しての万葉歌一六四番歌  
に既に接し、「馬疲るるに」の表現  
を見出している。古代の旅の乗り  
物にかかり伝わる史料は少ない。  
万葉歌に残る「馬疲るるに」を一  
筋の光明として、ここでは改めて  
行程上での移動手段について考え  
たい。何人でもと帰ったのか、伝  
わる史料はない。ただ、任の解任  
により召喚されることからすれば、

十人に満たない数人の一行として  
想定したい。

大伯皇女の利用する移動手段と  
して、次の方法が考えられる。

○徒歩 ○乗馬 ○輿 である。ま  
た、このほかに駕籠を考える向き  
もあるが、駕籠は室町末期に登場  
し、江戸時代に普及「註五」した  
ものであり除外される。各移動手  
段について、その可能性を検討し  
たい。

○輿 輿は文献史料に古くからみ  
られ、史実上確実な最初の例は、  
壬申の乱の時、吉野脱出に際し、  
皇后（後の持統天皇）が輿に乗っ  
て従っている。また天皇が輿に乗っ  
たことがわかる最も古い史料は、  
和銅三年（七一〇）二月、藤原宮  
から平城宮へ遷る際に、元明天皇  
が輿に乗ったとの記録「註六」で  
ある。ここにもみるように「輿」は  
本来天皇の乗り物「註七」であり、  
時にそれに準ずる皇后や太上天皇  
が利用する乗り物である。皇子・  
皇女は利用できる乗り物ではな  
かった。それでは齋王はどうかとい  
えば、「天皇の名代」として、齋王  
は天皇の代理であり、参宮のとき  
輿の利用も考えられる。しかしな  
がら往時、大伯皇女が任を解かれ

都に向かう今は、輿の利用は出来  
なかったと思われる。すると残る  
のは、○徒歩あるいは○乗馬であ  
り、当時において両者ともに可能  
性はある。ここで手掛かりとなる  
のが、万葉歌の「馬疲るるに」で  
あり、わたくしは、次のことを根  
拠として、大伯皇女は馬に乗り帰  
京の路を辿ったと推定している。

（三）皇女乗馬の根拠  
「馬疲るるに」と皇女の独白する  
万葉歌（一六四番）の現代文解釈  
「註八」は次の通りとなる。

「逢いたいと私が願う弟もいないの  
に、どうして大和などに帰って来た  
のであろう。いたずらに馬が疲れ  
るだけだったのに」

ここでは弟のいない都に帰った皇  
女の疲労感を、馬の無駄な疲れに  
象徴させ、表現している。皇女の  
落胆に沈む疲れを背後において、  
馬の流れる汗の疲労をいうことに  
より、いわば帰路での人馬一体と  
なった疲労の悲しみを訴えている。  
この表現は、長く苦しい旅路を人  
と馬がひとつとなって乗り越えな  
いと、出てこない表現であると思  
う。一日また一日と馬上であゆみ  
を進め、乗る馬に愛着と感謝を感  
ずるからこそ、この表現となった。

馬は一行の荷物を運んでいたとの  
論に接したこともあるが、そのよ  
うな間接的な皇女と馬の関係から  
は、この表現は出ないと思う。万  
葉歌に残る「馬疲るるに」の表現を、  
一筋の糸としてたどり、皇女乗馬  
の根拠としている。

（四）古代に女性が馬に乗ること  
最後に難問が残った。七世紀後  
半の古代にあって女性が馬に乗る  
ことがあったのだろうか。ましてや  
皇女として高位にある女性が馬に  
乗るだろうか。管見の限りでは、こ  
のことに答える史料に接すること  
が出来ない。このため横浜市根岸  
競馬記念公苑内にある「馬の博物  
館」に調査に赴いた。ここでも明  
快な結論は得られなかったが、女  
性の乗馬図の事例として、江戸時  
代に描かれた「王昭君図」と「駿  
河八景図屏風」のコピーがいただ  
けた。

○王昭君図「註九」  
王昭君は中国漢代の後宮に仕え  
ていたが、紀元前三三年元帝の命  
により、匈奴との和平政策の犠牲  
となり、単于（ぜんう）に嫁ぐこ  
ととなった。このとき漢の都から、  
遙かな西域まで悲しみにくれなが  
ら移動する。この図には、手綱を

握る従者を連れて、王昭君が馬に  
乗る姿で描かれている。

##### ○駿河八景図屏風「註十」

このなかでは、頭巾姿の婆と浅く  
笠を被る若い女御の二人連れが、  
それぞれ馬子の引く馬に乗り、繁  
華な街並みを物見遊山しながら進  
む様子が描かれている。この図で  
目立つのは、馬の背におかれた大  
きな鞍であり、それに坐る女性た  
ちは楽々と周囲を見回している。  
次に、女性乗馬にかかわる史料に  
ついては、日頃より注意していたが、  
次の参考事例が得られた。

##### ○齋内親王参宮図「註十一」

齋宮も文武朝以降、制度的に徐々  
に整備され、とくに平安時代には  
齋王群行、参宮行ともにももの  
しく大規模化する。群行の移動に  
際して伴の女官は騎馬であり、ま  
た齋内親王参宮図では参宮に際し  
て、騎乗の女官が随行する様子が  
描かれている。

##### ○粉河寺縁起絵巻「註十二」

粉河寺は奈良時代後半の宝亀元  
年（七七〇）草創の古刹である。  
十二世紀後半の作とされる粉河寺  
縁起絵巻には同寺の創建縁起とし  
て、娘を重病から救ってくれた不  
思議な童子をもとめて、あわただ

しく紀州に旅立つ河内国の長者の  
一家の様子が描かれている。その  
なかで、一行の一人として黒馬に  
跨り、今まさに出立しようとする  
娘も描かれている。

これらの事例からわかることは、  
女性も、時に特別な鞍を用意しな  
がら、必要に応じ馬に乗っていたと  
いうことである。また、皇女の乗  
馬も、高位であるからこそ利用可  
能であり、徒歩（かち）に代わる  
手段として利用していたと考えら  
れる。

##### 五 おわりに

大伯皇女は召喚を受け、馬に乗  
り、悲しみに沈みながら都に向か  
う。従者は手綱をとる者も含め数  
人の一行であったと思われる。皇  
女は馬上で揺られながら、刑死し  
た弟への想いが途切れることはな  
い。嘆きの旅、これが私の「史的  
空想」の至る結論である。

##### 「註」

「一」直木孝次郎・司馬遼太郎  
対談「古代史の人間を語  
る」『日本の歴史 二』  
中央公論社 一九六五・三  
「二」令和二・四・一一

##### 朝日新聞書評

- 「三」北山茂夫『天武朝』
- 「四」中公新書 一九七八・六  
中公文庫 一九七八・六
- 「五」伊藤博『萬葉集釋注 二』  
集英社文庫 二〇〇五・九
- 「六」櫻井芳昭『駕籠』法政大  
学出版局 二〇〇七・一〇
- 「七」『萬葉集』  
巻第一・七八番歌
- 「八」櫻井芳昭『輿』法政大学  
出版局 二〇一一・九
- 「九」伊藤博『萬葉集釋注 一』  
集英社文庫 二〇〇五・九
- 「十」清原雪信 紙本着色  
掛幅装 江戸時代
- 「十一」紙四着色 六曲一隻  
江戸時代
- 「十二」齋宮歴史博物館  
『齋王群行と伊勢への旅』  
一九九八
- 「十三」和歌山県紀の  
川市粉河 粉河寺



# 会員研究

## 『もつひとつの古代史』逸文③

### 「藤原鎌足」東国出自」論

忌部守

#### 1 春日大社の祭神

近鉄電車で平城宮跡を通過して、奈良の街に近づくと最初に気が付くのは街の奥に横たわる三笠山の姿だ。三笠山と言えば奈良の守り神・春日大社である。

この春日大社は、七二〇年の平城遷都時には既に鎮座していたとお考えの向きも多いと思うが、実は遷都から約半世紀も経った神護景雲二年（七六八）に造営されている。つまり、平城遷都の後には、まず東の高台の上の外京に藤原氏の氏寺である興福寺が建設され、次に聖武天皇が東大寺を建てて大仏開眼を行なったのが七五二年の事で、その後姿を現したのが春日大社ということになる。

意外なのは建造時期だけではない。平城京で権力を握る藤原氏の氏神ならば、その主祭神は当然、出身とされる中臣氏の祖先神であるアメノコヤネ（天児屋根）のはず

より北の五里とを割きて、別きて神の郡を置きき。其處に有ませる天の大神の社・坂戸の社・沼尾の社、三處を合せて、惣べて香島の天の大神と称ふ。因りて郡に名づく」（\*5）。

引用が長くなったが、周知の通り、タケミカヅチは現在の茨城県鹿嶋市に鎮座する鹿島神宮の主祭神だ。そして、『常陸国風土記』の記事は地方行政区画としての香島郡（当時は評）と鹿島神宮の創設の経緯を示している。孝徳天皇の時代に、海上国造と那珂国造の領地を削って、新たに神郡である香島郡を作り、そして三つの神社を統合して鹿島神宮としたとある。香島郡の創設に当たって、惣領である高向大夫に対して中臣（子と中臣部菟子が申請したとあって、通常はこの（子）子を鎌子（鎌足）として中臣氏族の二名が鹿島神宮の代表者ではないかとし、鎌足を中臣氏の傍流・中臣鹿島連の出身とする見方があるが、筆者はそうではないと考えている。

元来、中臣氏は卜占を担当して、大陸・半島に近い西日本を拠点として、東国には地盤がなかったはずだ。例えば、『新撰姓氏録』の

だが、それが違う。春日大社の第一殿に祀られているのは東国の鹿

島神宮の神であるタケミカヅチ（武甕槌）で、アメノコヤネは第三殿である。なぜ、東国の祭神が藤原氏の氏神として祀られているのか。藤原氏が本当に中臣氏の出身なら、中臣氏の祖先神であるアメノコヤネを第一殿に祀るはずだ（\*1）。

これは重大な問題なのだ。祖先神を大事にしない氏族など有り得ない。したがって、その合理的な解答は藤原氏は本当は中臣氏の出身ではない、という事になる。鎌足の家系以外は、中臣氏であつても藤原の氏の使用は認めないという事実も、それを傍証する。

奈良時代に書かれた藤原氏の伝記『藤氏家伝』によれば、藤原氏の始祖・鎌足は「諱は鎌足、字は仲郎、大倭国高市郡の人なり。（中略）美氣古卿の長子なり。母は大伴夫人と曰う。大臣は豊御食姫天

津島（対馬）直は「天児屋根命十四世孫雷大臣命之後也」とあり、対馬に雷命（いかづち）神社が現存するが、これは氏の拠点である。津島直は、対馬の古代豪族で、この一族が上京して卜部、そして中臣氏になったと考えられている（\*6）。

藤原鎌足が、この中臣氏族に直接関係がないとすれば、さらなる手掛かりがないだろうか。神郡である香島郡の創設は、二つの国造のうち、常陸国の那珂国造の領地を中心に割譲してできたものである。つまり、元々鹿島神宮は那珂国造の領地にあつた神社で、那珂国造の一族が奉斎してきた神社であつたのである。それが、鹿島神宮の鎮座地を香島郡として独立させ、その行政官が新たに中央祭祀を専業とする中臣氏族になつたというのが実態である。

それでは、那珂国造とはどのような一族であつたのか。『先代旧事本紀』によれば、那珂国造は、伊予国造と同じ先祖、すなわち神八井耳命の後裔である建借馬（たけかしま）命とある。神八井耳命の後裔とは多氏（太氏）の一族であり、また名前にカシマとあるように本来

皇二十二年の甲戌の歳に藤原の第に生れる」（\*2）とあり、家伝によれば推古二十二年（六一四）に大和国高市郡の藤原邸で中臣御食子（みけこ）の長男として生まれたとある。これは、言わば功成り名遂げた後の公式見解であつて、必ずしも事実を述べたものではない。

一方、平安時代の歴史物語『大鏡』には「孝徳天皇の御代よりこそは、さまさまの大臣定まりたまへんなれ。但し、この御時、中臣の鎌子の連と申して、内大臣になり始めたまふ。この大臣は、常陸国にてむまれたまへりければ」（\*3）とあつて、具体的な地名は記さなものの、東国の常陸国の生まれと書いている。この『大鏡』には鎌足（鎌子）の子である不比等が天智天皇の御子であるとの記事も載せている（長男は定恵）ほか、明らかに間違いと分かる記述もあることから、『大鏡』を以つて鎌足を東国生まれとすることは出来ない。

ところが、十五世紀の神社縁起である『多武峰縁起』に、鎌足は「大和の国高市郡大原藤原第に生まれる。或る説に曰く、常陸の国鹿島郡に生まれる」（\*4）とあり、この国造一族の祖先神である鹿島神を奉斎していた。神八井耳命の中央における後裔には太安万侶を排出した多氏（太氏）がいる。

筆者は、鎌足はこの那珂国造の一族の出身ではなかつたかと考えている。つまり、鎌足が鹿島神の本来の奉斎一族の出身であるということが重要なのだ。

#### 2 鹿島神宮の祭神

霞ヶ浦の北浦に程近い茨城県鹿嶋市に鎮座する鹿島神宮の主祭神がタケミカヅチ（武甕槌）である。甕は神の依り代である聖器であり、「甕槌」は「雷」に通じる荒ぶる神として勢威を示すことになる。

『日本書紀』によれば、天孫降臨に当たつて、アマテラスは子のオシホミミに代えて、孫のニニギノミコトを降下させるが、その際に葦原中国を平定させたのがフツヌシとタケミカヅチの二神だ。これは単なる神話ではなく、持統女帝が子の草壁皇子ではなく、孫の文武天皇を皇位継承させ、それを支える左大臣・物部麻呂と右大臣・藤原不比等という時の律令政府のメンバーを表す寓話であると筆者は考えている。つまり、『日本書紀』

の或る説とは『大鏡』のことであろうが、東国説が根強い上、鹿島郡という具体名まで記されている。春日大社の主祭神が鹿島神宮のタケミカヅチである事と併せて考えれば、鎌足が東国出身であることを簡単には否定できないことにな

る。 それでは、藤原氏の始祖である鎌足の本当の経歴と出身地を知ることは出来ないだろうか？

その手掛かりが、実はある。 それは、冒頭でみた春日大社の主祭神であるタケミカヅチの存在だ。春日大社の主祭神であるからには、必ず始祖鎌足と藤原氏に深い関係があるはずだ。

日本は、八世紀に入ると大宝律令の施行により本格的な律令国家としてスタートするが、その前段階の地方行政組織である「評制」（国郡制の前の体制）を知る貴重な史料が以下の『常陸国風土記』である。「古老のいへらく、難波の長柄の豊前の大朝に御宇しめしし天皇のみ世、己酉の年大乙上中臣（子）大乙下中臣部菟子等、惣領高向の大夫に請ひて、下総の国、海上の国造の部内、軽野より南の一里と、那珂の国造の部内、寒田

には明記されていないが、タケミカヅチは藤原氏を象徴している。 この鹿島神宮の主祭神タケミカヅチをなぜ、藤原氏を象徴させ、春日大社の主祭神としたのか？その合理的な解答は、藤原氏の始祖・鎌足はアメノコヤネを始祖とする中臣氏の出身ではなく、自身が奉斎していた祭神が、タケミカヅチであつたという事ではないだろうか。

鎌足が、鹿島神を奉斎する那珂国造の一族の出身であるとする、那珂国造が支配する地元では有力者であることは疑いがないが、都である平城京に上ればそういう事にはならず、いわば只の地方の国造一族というに過ぎないということになる。

大宝律令制下では、地方の国造一族が中央で採用されるためには、郡領（令制後の国造）の子弟が舎人や兵衛のいずれかになる道があるが、この時代も同様な状況であつたろう。鎌足も、舎人として仕えるか、兵衛として軍事的能力を発揮して昇任して行くしかないだろう。

記録に表れた鎌足の評価は、乙巳の変における武人的な行動や、

白村江の戦いにおける軍事的な武将としての姿であり、兵衛としてスタートした可能性が高い。

しかし、鎌足が例え軍事的才能を開花させたとしても、それだけでは下級貴族に過ぎず、天皇や皇子に近づきその腹心になる事は出来ない。そこで、天皇や皇子に近づくと手段として有効なのが、中央の宮廷祭祀を担当する中臣氏の存在ではなかったのではないか。つまり、中臣氏に東国の有力神社の祭祀権を与える見返りとして、中臣を名乗る事を許されたという見方である。そして、中臣氏を名乗ることで、鎌足は、まず軽皇子、そして次に中大兄皇子に近づき親密になることが出来たと考えられるのである。

大化元年（六四五）六月、いよいよ鎌足の最大の成果である乙巳の変が起こり、時の権力者である蘇我入鹿が暗殺された。入鹿を直接撃つたのは佐伯子麻呂と若犬養網田の二人であるが、鎌足も弓矢を持ってその場に居り、事件後、孝徳天皇が即位し、中大兄皇子が皇太子、鎌足が内臣となったと『日本書紀』は記す。時に、鎌足三十二歳であった。弓矢を持って

控える鎌足は、兵衛出身であることを彷彿とさせる。

神郡である鹿島郡が中臣氏によって創設されたのが、その四年後の大化五年（六四五）であり、鎌足は既に力を持っていた時期である。つまり、鎌足が鹿島郡の建郡（立評）に中臣氏を関与させる事が可能であったと考えられる。中臣氏に取っても東国に地盤を得ることはとても重要であった。

筆者は、実は乙巳の記述事件の内容が、『日本書紀』の既述通りであったとは思えないと考えている。なぜなら、宮殿の内部の密閉された空間で実行された事件が、当事者間の会話の内容を含めて、あれほど臨場感のある記録が実際になされたとは考えられないからである。事件の場所を宮殿として、皇極天皇の前で入鹿の殺害が行われているのは、クーデターの正当性を主張するためだろう。『日本書紀』特有の潤色である可能性が高い。『日本書紀』編纂の責任者は、鎌足の子である藤原不比等なのである。

ただ、いずれにしても、入鹿が暗殺され、鎌足の功績が認められた事は、その後の人事や状況から明国の鹿島神宮の分霊を神鹿の背に載せて遷座させたのである。同時に、鹿島の鹿が奈良に住み着くことにもなった。

さて、その鎌足が亡くなるのが、天智八年（669）十月のことである。『日本書紀』によれば、天智天皇は自ら鎌足の自宅に赴き、望むことがあるかと問うと、鎌足は「生きては軍国の為に役に立てず、死ぬに当たっては何も無い」と答えたといい、「軍国の為」については解釈が色々あるが、最も有力なもの白村江の戦いである。

つまり、663年に唐・新羅連合軍に大敗した事が後悔であったというものである。鎌足は、その出自からも大臣ではなかったが、天智の軍事顧問であった可能性が高い。子供の頃から中国の兵法書である『六韜』を諳んじており、乙巳の変では蘇我入鹿の暗殺の実行犯として実績を上げたが、外国との戦争には判断を間違え、敗戦に終わったという後悔である。ここにも、東国出身の軍人としての鎌足の姿を彷彿とさせるのではないだろうか。

また、本稿の冒頭で述べた平城京の春日大社造立に当たっては、東

すべては、鎌足が東国の常陸の国の国造家に生まれ、成人して都に

らかだろう。孝徳天皇にせよ、中大兄皇子にせよ、自分たちの政治を行っていく上で蘇我氏の存在が邪魔であったことは想像に難くなく、いわば汚れ役をやったのける鎌足の存在が特別に評価されたのだろう。

蘇我氏が決して悪い政治を行っていた訳ではない。事実、蘇我氏は、技術を有する渡来人を配下にして当時では革新的な政治をしていたと考えられる。吉備など全国の各地に、天皇家の直轄領である屯倉（みやげ）を創設し、管理も渡来人を使って行っていた。つまり、天皇家にも貢献していたのである。

また、蘇我氏は、出自がはっきりしない無名の一族でもない。『古事記』にある通り、第八代孝元天皇の後裔と考えて良い。蘇我本宗家が乙巳の乱で滅ぼされたために、『日本書紀』には詳しく記述されていないだけだろう。

したがって、孝徳天皇や中大兄皇子らの天皇家側からすれば、天皇中心の政治を行いたいという理由であり、蘇我氏のような豪族側からすれば、主導権を握りたいという両者間の抗争に違いない。そこに、鎌足が介入する余地があった訳であるが、結局、藤原氏は天

皇中心の律令体制を構築するという名目の中で、蘇我氏に代わって藤原氏が権力を握るという結果になったと評価する事が出来る。

### 3 「藤原鎌足＝東国出自」の理由

実は、鹿島には鎌足の生誕地という伝承を持つ鎌足神社が存在する。鹿島神宮から西へ北浦に向かって二キロの場所、住所は鹿嶋市大字宮中宇下生（しもものう）。現在は何の変哲もない所だが、鹿島に実査に行った時に判明したのは、北浦が古代には水際はもっと近く、鎌足神社の付近まで来ており、そこには大船津の湊があって、鎌足神社は実は交通の要衝にあったのだ。参詣者はここで船を降りて陸路で鹿島神宮まで向かったと考えられる。現在も、鎌足神社から城山の脇を通って鹿島神宮まで続くつづら折りの細道が残っている。

この神社は少なくとも江戸時代以降は存在しており、小さな木製の本殿がひっそりと建っただけであるが、境内には「大織冠藤原公古宅址碑」という石碑がある。江戸時代には、ここに鎌足の住居があったとの伝承があったと考えられる。

【写真1】鎌足神社（筆者撮影）



【写真2】北浦と鹿島（筆者撮影）



以上

雑詠

藤盛 詔子

百日紅炎ゆる百日始まりぬ  
秋うらら立てて売らるるフランスパン  
幸せは足元にあり干蒲団  
ときめきは生くる証や冬薔薇  
風花や空のどこかに夫の声

雑詠

竹村 清繁

水打つて紅殻格子艶めきぬ  
野仏の耳を飾れる蝸牛  
子かまきり斧をかざして吹かれをり  
いつまでも纏れとかざる梅雨の蝶  
余り苗風呼ぶほどに育ちけり



壇はま  
こはま

俳研よ  
歴

竹内 章二

盆の月看取れず逝きし兄想ふ  
知の巨人呑み語りし日も星月夜  
夜長挑むローマ帝回想記は友の推し  
名月やピアノソナタを浴びながら  
断酒の身されど気になる今年酒



折々の無苦集滅道

市川 康夫

メリヤスの春の手ざわり下着かな  
くさもちや包みとなりて手に優し  
アフリカの土漠に驟雨フラミンゴ  
秋立つ日濁世なればとわれも発つ  
寒月にもうそを問ふサイエンス

夏の海岸を詠む

谷川 操一

ひく波の余韻の長き夏の浜  
大夕焼けオホーツク海を一望す  
白南風や築百年の大灯台  
丸窓の港のパン屋夏惜しむ  
水着干す口の達者な少女たち

俳研よ  
歴

壇はま  
こはま

初夏の海

高島 治

大仏の目元ゆるむや初夏の海  
鎌倉の五山騒がす青嵐  
子規庵に糸瓜は茂る命水  
焼茄子を供えて黄泉の話など  
蝉時雨座禅の黙を通せんば



# 壇はま こはま

市川康夫

高野賢彦

山本修司

木星か土星かと見る冬の空  
きのふと同じ空にありけり

夏木立みあげて高き夕空に  
真白に浮かぶ山月うるわし

こんな時必要なのは演技力  
メルケルがいい総理大臣

ひむかしの霞か霧か薄れゆき  
明けの明星あらはれ出でぬ

遠山を眺めて歩む道ばたに  
つわものどもの夏草しげる

出雲より到来物の鯛めしで  
柔らかな風今朝の食卓

ややありて雲に隠れし日輪の  
昇りて明かし朝は来にけり

薄紅のかそけし花のエバーグリーン  
遠き昔に思うねむの木

つまずいて顔面打撲四日後の  
金婚写真はゾンビの笑顔

出勤に急かさるるなき静寂に  
ただコーヒーの香の漂へる

蝉しぐれ緑かがやく半夏生  
われこの先は何をなすべき

金婚の花に囲まれこみあげる  
山・谷あった二人三脚

富士しろく函嶺くろき朝まだき  
まなこは遙か灘をさまよふ

鬼ユリと鹿の子のユリは咲きけるが  
待ち遠しきは山百合の花

夕闇を白く浮き立つハナミヅキ  
人影のないコミュニティ道

この日まで心をくだき探求し  
詩とはと問へば春さわぐなり

近ごろの常ならざらん熱帯化  
この敷島を本居宣長いかに詠むらむ

花色も葉色も目立つ道端に  
シラン鮮やか春がたけなわ

曲水に杯は浮くべしいざ出でむ  
晴れたる空へ歌はむかなや

コロナ禍で巣こもりをしようこと  
訪ねてみたし木枯らしのころ

太陽にサンパチェンスは耐える花  
あざやかな色に力をもらう

## 浄められた夜

## 丹下重明

静寂の中の

何時しか湖上の月は澄みわたり

不吉な森のざわめき

きらめく光のなか

官能の月の光

清冽なそよ風に送られて

湖面をわたるなまめく風に

二人はほのかな雲となつて

ひた寄せるさざ波

未来に溶け込んでゆく

立騒ぐ濁れる砂

シェーンベルク「浄められた夜」  
ロマン派終焉のゆたかな揺らめき

女は不実を告げ

男は沈黙で答える

何ごともなかったように

# 詩よ 歴研よ

足元の砂の濁りを  
沈黙の清い流れが  
さらさらと浄化させる



# エッセイ

## 古歌を訪ねて『その十三』

### 心づくしの秋

## 古歌に見る秋

### 丹下 重明

木の間より  
もりくる月の影みれば  
心づくしの秋は来にけり

詠み人しらす

古今和歌集・秋歌上(184)

「源氏物語」の須磨の巻には、「須磨には、いと心づくしの秋風に……」というくだりがあります。「源氏物語」は「古今和歌集」(905年編纂・以下古今集)からほぼ100年後に書かれています。ここにある「心づくしの秋風」という表現は、冒頭の古今集歌に由来すると言われています。

歌の大意は「木の間から漏れてくる月の光をみていると、あれこれ思い悩む、秋の季節がまたやって来たのだとしみじみ思う」といったことからの発想と考えられます。例えば杜甫の有名な七言律詩「登(とう)高(こう)」にも「悲秋」が入った次のような一節があります。

万里悲秋常作客

杜甫が晩年、高台に上って長江を眺めながら、遠い故郷を想ったの作といわれています。「遠く故郷の彼方にあつて秋を悲しむ私は、いつも旅人だった」と言っています。因みに、杜甫は作詩に「悲秋」という表現をよく使っています。

☆ ☆ ☆

話は和歌に戻って、古今集の秋歌の数(144首)は、春歌(134首)を少し上回る程度ですが、その秋歌の最初の一首は、有名な藤原敏行の「秋立つ日よめる」との詞書のある、次の歌です。

秋きぬと

目にはさやかに見えねども  
風の音にぞおどろかれぬる

日本人の繊細な季節感を、風の音で表現した名歌として、今日に至るまで高く評価されている一首

ところでしようか。木の間に隠れもれくる月の光という表現には、初秋の感じが込められていますが、

けれどもこの歌の秀逸と思われるところは「心づくしの秋」というフレーズだと思います。

「心づくし」とは、広辞苑によると、①さまざまに物思いをすること。また気をもませられること。

②心をこめてすること。とあります。現代での使用は②の方ですが、古典での解釈は①の方です。

「心づくしの秋」とは、人それぞれだと思えます。けれども「秋」という一字の持つ独特の季節感によって、多くの人が感じる共通のある思いがあるのです。それはある種の寂寥感とか哀感です。「心づくしの秋」という表現には、様々な思いに、なにがなし心が深みに沈んでゆくような感覚があるので

す。無論、「秋」という言葉には、「さわやかな秋」「実りの秋」など、明るく前向きな意味もありますが、どちらかといえはやがて来る冬枯れを前にし、なにかが終わりに向かって行くといった、ネガティブな季節という思いが強いよう思われます。

です。古今集には、この歌を筆頭に今日でもよく知られた秋歌いくつも入集しています。二、三例をあげてみます。

月みればちちに物こそかなしけれ

わが身ひとつの秋にはあらねど

大江千里

秋歌上(193)

ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは

風よりほかにと心人もなし

詠み人しらす

秋歌上(205)

奥山にもみじ踏みわけ鳴く鹿の

声きく時ぞ秋はかなしき

詠み人しらす

秋歌上(215)

三首のうち、一首目、三首目は、「小倉百人一首」にも採られている歌で、よく知られています。

いずれにせよ、これらの秋歌には、「心づくしの秋」という言葉と同様、いかにも秋という季節を持つ、物悲しい、しみじみとした思いをともなう深い情趣が感じられます。

☆ ☆ ☆

ます。

詩人で文芸評論家の大岡信(まこと)氏は「心づくの秋」という表現について、次のように評しています。

『主観的な気分重点を置いて、実は秋の情感を客観的に深くとらえた含蓄ある表現』と。

☆ ☆ ☆

前記の須磨の巻の文章はさらに次のように続きます。

「海は少し遠けれど、行平の中納言の『関吹き越ゆる』と言ひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり」。

行平中納言とは、在原行平(801~893年)のことで、王朝時代のプレイボーイで知られる在原業平の兄です。理由は不明なのですが、須磨に流されたことが

ありました。当時としては京の都から遠く離れた地方にあたる須磨での暮らしは、わびしく、何かと思ひ悩むものだったと思われ

ます。源氏物語の須磨の巻も、自主的にとはいえず、光源氏が須磨に居を移すという話です。そこには貴種

そうした「秋」への思いは、古今時代以降、王朝文学に広く取り入れられて行きました。先にあげた、源氏物語・須磨の巻の一文などもその一例です。

和歌でいえば、勅撰集の中の歌で、これまた「小倉百人一首」にもある次の二首など、その典型かと思われ

八重律しげれる宿のさびしきに

人こそ見えね秋はきにけり

恵慶法師

拾遺和歌集・秋(140)

寂しき

宿を立ち出でてながむれば

いづこも同じ秋の夕暮

良暹法師

後拾遺和歌集・秋上(333)

☆ ☆ ☆

さらに、古今集から300年後の「新古今和歌集」(以下新古今集)になると、秋歌が断然多くなり

ます。秋歌は上下合わせて265首と、古今集の144首を大きく上回っています。一方、春歌の数は古今

流離の嘆きと悲しみが表現されています。

源氏物語の解説書的な存在の一つに「無名草子」があります。新古今時代の女流歌人として知られる、俊成卿女の作といわれます。このなかで、源氏物語の各巻を寸評した文章がありますが、ここでも「須磨の巻」についてはこう評しています。

「あはれいみじき巻なり。京を出で給ふほどのことども、旅の住心のほどなどいとおはれにこそ侍れ」

このように、「須磨の秋」にせよ、冒頭歌の「心づくしの秋」にせよ、「秋」にはもの思いに沈む、わびしい季節という感覚があるといえます。

☆ ☆ ☆

「秋」を「寂しくわびしい、さらには悲しい季節」ととらえる発想は、万葉時代には見られないのです。万葉集の秋歌には、寂寥感や悲壮感を強く感じさせる作品が、見当たらないのです。

おそらくは平安初期、多くの漢詩が日本に入ってきて、その中に「悲秋」などという表現があつた。集と大差はありません。

言うまでもなく、古今集と新古今集とでは、歌の総数では後者が前者の倍近くになっているとはいえ、やはり秋歌がいかに重視されているかを示しています。

そうした新古今集の秋歌をどうして感じるかは、古今集歌との違いです。云うまでもなく新古今集はその名称からも分かるように、古今集をその範としています。ただし、新古今集歌には、題詠や本歌取が多いのですが、すぐれたレトリックによって、歌の奥行や深さの点で、古今集歌以上に心にしみる作品がいくつもあります。そのことを、強く感じられるのが、秋歌です。

無論、その秋歌にも、秋のさわやかさ、美しさを詠った健康的な詠歌もありますが、総じて感じられるのは、ここでも「秋」という季節の持つ哀感が込められた趣き深い歌が多いことです。

そうした新古今集の秋歌には秀歌が多く、その代表歌を選ぶのは至難のことなのですが、あえて二、三例を挙げるとなると、ありきたりで恐縮なのですが、「三夕(せき)の歌」で知られる、

次ぎの三首です。

寂しきはその色としもなかりけり  
槇立つ山の秋の夕暮

寂蓮法師(361)  
心なき身にもあはれは知られけり  
鳴立つ沢の秋の夕暮

西行法師(362)  
見わたせば花も紅葉もなかりけり  
浦の苫屋の秋の夕暮

藤原定家朝臣(363)  
三首とも「秋の夕暮」をテーマとして、「三句切れ」「体言止め」という新古今調の特徴を共有しています。

いずれにしても、この三首には、「秋の寂寥感」を強く印象付けるものがあります。ただし、内容的には寂蓮と西行の歌には、実景を詠んだと思われる親近感があり、一方、定家の歌は観念的ではありませんが、厳しい緊張感が感じられ、もともと新古今調を代表する一首といえます。

☆☆☆

この定家の「秋夕」の一首を、冒頭の「心づくしの秋」の歌と並べてみると、同じ秋の寂しさを詠

んでいても、そこには、大きな違いがあります。

前頁でもふれた古今集と新古今集の違いがここにも見受けられるのです。この二つの勅撰集の間には、300年の隔たりがあり、後者が撰進されたのは鎌倉初期の1205年です。時代は大きく変遷していました。政治の主体は、貴族から武士へと大転換してしま

した。王朝和歌の勅撰集の最後を飾った新古今集―それは王朝貴族が自己の存在をアピールする最後の抛り所の一つだったと思われま

す。その意識が、詠歌の表現の徹底となり、厳しい緊張感を生んだのではないのでしょうか。現実感の薄い作品でも、技巧をこらして、観念の美の極致を目指して。

それに比べ、古今集の時代は、王朝文化がこれから花開くという900年代初期です。どこか穏やかで悠揚としたところがあります。

この両者の違いが定家の歌と冒頭の心づくしの歌とが、それぞれが持っている秋の「寂寥感」の違いとなつて表れているのだと思われま

☆☆☆

## エッセイ

### 鹿苑寺

#### 市川 康夫

今夜のNHKのFMは、黛敏郎作曲のオペラ「金閣寺」の演奏会形式の演奏を聴かせた。これは作曲者自身による抜粋版であるというが、ドイツ語のオペラの中に日本語のナレーションが入るとい

うが、ドイツ語のオペラの中に日本語のナレーションが入るとい

うが、ドイツ語のオペラの中に日本語のナレーションが入るとい

「ここであつたと余談となつて恐縮ですが、以前この会報76号での

「古歌を訪ねて」で、王朝和歌とクラシック音楽について書いたことが

ありました。今回この二つの和歌を比べてみて、ふと、シューベルトの歌曲集「冬の旅」の、或る二つの演奏が思い

浮かびました。ディートリッヒ・フィツシャー＝ディースカウとハンス・ホッターの

演奏です。ともにずっと以前、生演奏を聴いての感想なのですが、

ディースカウは強い緊張感をもつて、完璧ですきのない厳しい演奏

で、この曲集の持つ寂寥と孤独を歌いあげていました。

これに対し、ホッターの歌は、地味で孤高な演奏なのですが、寂寥感が、ゆつたりとした情緒の中にあつて、あたたかささえ感じさせられるものがありました。

曲は「秋」ではなく「冬」が背景ですが、さしずめ、定家の詠歌はディースカウの歌、詠み人知らずの冒頭歌はホッターのそれにたとえられるように思いました。

☆☆☆

した。こんな書き方の時代もあつたのかと思つたものである。

三島作品を読み返す気がしないもう一つの理由として、三島由紀夫が二二六事件に絡めて書いた若書きの小説を題材にして、ある讀書会で高名な学者が小説の一部を朗読したときの印象がある。

兵士の演習が終つて聯隊への帰りに道に青年将校が一人で自宅に立ち寄り、新婚の妻を早速押し倒し妻もよくそれに応えて云々、という箇所を朗読するに際して、「この先

は朗読するのが辛いですが、読みます」と仰せられ、読み終わるとその和服の美人がわざわざわたしの席の前に来て、やれやれと言

わんばかりにパパタと扇子を使つたのである。何故にわたくしを意識したのかという気がした。また三島の文章が

あまり巧くないという気もした。そもそもそのような内容を書きたがる三島には偏つたところがある

と感じられると思つたのである。そして昨今よく言われるように、

三島由紀夫の割腹自殺から五十年というわけで、今夜も「金閣寺」というオペラを聴いたような次第である。

こうした「心づくしの秋」という感覚は現代に入つても、受け継がれていきます。現代短歌は、どちらかと言うと、明るい歌が多いように思われますが、明治の歌人、与謝野晶子の歌集「夏より秋へ」にこんな歌があります。

秋の日はさびしげつなし  
部屋の棚

あらゆる花をもて飾れども

先にあげた杜甫の漢詩「登高」、さらには、上田敏の名訳で知られる、フランスの詩人ヴェルレーヌの「秋の歌」(落葉)

(46)

秋の日の  
ヴィオロンの

ためいきの

ひたぶるに

身にしみて

うら悲し

などを見れば、「心づくしの秋」は、四季のある世界に暮らす人たちにとつて、秋という季節への共通した想いなのではと思うのです。

おわり

その市ヶ谷の東部方面総監室、介錯する男が振り上げた日本刀がぶつかつてできた柱の傷痕、等を、陸上自衛隊の下士官がもう何回も繰り返し語つたかのような口振りで名所旧跡の案内人のように説明してくれたものであつた。

極東国際軍事裁判が行われた旧陸軍士官学校の大講堂を含むその建物は、すでに移築されて当時の場所にはない。一人づつ呼び出し被告席に立たせて、裁判長がA級戦犯として絞首刑の宣告を言い渡被告が昔風の弓の付いたレシーバーを両耳に当てて聴いた姿も、記録映画に観るだけのものになった。

消失前の鹿苑寺の舍利殿を見た人も、今や数少なくなつたであろう。第二次大戦の敗北も、大統領が発明したどうも unconditional surrenderも、裁判長の Death by Hangingの音声も、何もかも遠い過去のこゝこになった。

(二〇二〇・一一・二八)



## 蘇我本宗家

## 八佾の舞いは

## 滅びの舞い

高野 賢彦

## 一・蘇我氏の出自

蘇我氏は六・七世紀の歴史に大きな足跡を残したが、その蘇我氏の出自はどこであろうか。百濟からの渡来説、河内石川説、大和葛城郡説などいくつかの説が存在する。渡来説はかつて提唱されたが現在は完全に否定され、もっぱら近年は大和の葛城地方に基盤を持っていた葛城集団から、稲目が有力者を引き連れて独立したという説が強いようだ。

「古事記」では、蘇我氏の系譜として欠史八代の孝元天皇の孫・武内宿禰の子稲目を祖としている。宿禰は応神・仁徳など多くの天皇にお仕えした人物であり、九州の熊襲を討ち、朝鮮の新羅へ遠征し、

「古事記・日本書紀」では応神天皇の即位を助けたとされている。また宿禰は齡三百を超える異例の長寿の持ち主で、その七男から葛城・蘇我・巨勢氏などの祖が生まれたというが、その実在性を問題視されている。

なお蘇我氏の系譜については、六国史の「続日本紀」「三代実録」には書かれているが、「紀」には書かれていないという。

## 葛城集団とは

ところで葛城集団とはなんであろうか。「記紀」によれば、葛城氏は五世紀には仁徳・履中・雄略天皇などに妃を差し出すなど大王家の外戚になっていたという。また葛城襲津彦をはじめ葛城玉田宿禰、葛城円大臣など高位の者を輩出し、朝鮮との軍事・外交を担っていたという伝承を持っていた。その真否は判然としないが、葛城地方に勢力を持っていた集団に属していた最有力者こそが、実はその後の蘇我氏と言っても過言ではないようである。そのことは多くの古墳の存在などから推測できるという。

二・蘇我氏の全盛期  
蘇我稲目の躍進

蘇我稲目・馬子父子と物部尾輿・守屋父子の覇権争いは宿命的なものであったが、蘇我氏も有力な他氏族がそれぞれの氏の神社を造ったように宗我坐宗我都比古神社を造り、稲目や馬子の時代に躍進した。稲目は娘の堅塩姫と小姉君を欽明天皇の妃として入れ、堅塩姫の子女の中には用命、推古などの天皇のほか多くの皇族がおり、また小姉君の子女にも崇峻天皇、穴穂部皇子・穴穂部間人皇女などがいた。稲目はこれら皇族との関係もあってその勢力が躍進を遂げたのである。その背景には稲目は淀川往来の船舶の管理、吉備国のほか諸国に屯倉を設置しており財力も恵まれていたようである。

## 三・仏教受け入れ問題

ところで蘇我氏や稲目として大きくかわっていたのが、「紀」では欽明十三年（西暦五五二）のこととしているが、百濟から伝えられた仏教受け入れ問題である。これには旧来から存在する神事を尊

崇していた物部氏や蝦夷が猛反発をした。この崇仏・排仏問題については、欽明三十一年（五七〇）に蘇我稲目が死去し、ほぼ一年後には欽明天皇も死去したので、その後は代替わりして蘇我馬子と物部守屋の紛糾となった。紆余曲折はあったが、敏達天皇が死去（五八五）すると、殯の宮で執り行われた儀礼において馬子と守屋の対立が極限に達した。そして馬子は用明天皇崩御（五八七）の六月に厩戸皇子（用明天皇の孫。聖德太子）など多くの豪族を引き連れて河内・淡川（八尾市）に守屋の館を攻め、餌川の河原で守屋を射殺したという。

## 四・蘇我本宗家の滅亡

## 八佾の舞い

蘇我蝦夷・入鹿の時代に移って蘇我氏の傲慢さがとみに増した。蝦夷はわがまま勝手に入鹿に対して紫冠を授けていたが、その傲慢さは入鹿になってからさらに増し、自ら国の政を執り行うようになってきた。そして天皇家を睥睨し、天皇の地位を乗っ取りかねない勢いとなり、そのことを中大兄皇子は心痛

し、ひいては恐れるようになった。それは皇極元年（六四二）に入鹿が葛城の高宮に祖廟を造って八佾の舞いを舞ったからであった。広辞苑にも「皇極紀」に蘇我入鹿は己が祖廟を葛城の高宮に建てて八佾の舞いを舞ったと記されている。八佾の舞いとは一体どのような舞いであろうか。その舞いは横一列に八人がならび、それが八列、すなわち総人数六十四人が正方形の形をつくって舞う群舞である。それは天皇の特権とされていた舞いであり、天皇のほかはいかなる者も舞うことができなかった舞いである。

## 五・乙巳の変・大化の改新

(西暦六四五)

入鹿に対する中大兄皇子の怒りは頂点に達し、藤原（中臣）鎌足らの協力を得て飛鳥板蓋宮（明日香村雷・奥山付近）の大極殿で入鹿を殺害した。下手人は大伴氏と同じく軍事氏族であった佐伯氏と言われている。そのため父親の蝦夷は甘檜岡で「天皇記」と「国記」（厩戸皇子が編集した国史の書）を焼き、自害して果て、ここに蘇我本宗家が滅亡し、同年大化の改

新が行われたのである。

ただ乙巳の変で滅ぼされたのは、あくまでも蘇我氏の本宗家であり、中央豪族としての蘇我氏の傍系の地位は少しも揺らぐことはなかった。天皇家との婚姻も従前どおり行われ、蘇我氏の血を引く皇族は奈良時代の半ばに至るまで重要な地位を占めていたという。

完



## エッセイ

### 閑かなる

### 古寺の誘惑

### 大和路を歩む

藤盛 詔子

「京の雅・奈良の鄙」とよく言われるのですが、昔から鄙の方に心ひかれていて、奈良を中心に、大和路を歩いてきました。

古のロマンを求めて古道を歩めば、遠い昔の人々の足跡がそこそこに見られます。記憶に残っている想い出を、拙文でたどってみたいと思います。

天理市にある石上神宮から南にくだり、途中三輪山の山ろくを経て、桜井まで続く、わが国最古と言われる古道「山の辺の道」は、二年がかりで歩きました。

道中、天理周辺のイチゴ畑や、卯の花の芳ばしい香りが疲れを癒してくれます。

三輪そうめんの”森正”でひと

休み、本場のそうめんはさすがに美味でした。

奈良を中心に、東西に延びる「佐保・佐紀路」にある般若寺、咲き乱れる無数のコスモスが十三重塔を彩ります。

美男の業平ゆかりの寺は不退寺、春はれんぎょうの黄一色に染まり、秋は一面の萩、花の寺で知られています。

雑木林に囲まれ、これまた萩に揺れる秋篠寺、技芸天が優しい眼差しで迎えてくださいます。

奈良盆地の北西部に位置する斑鳩には法隆寺がありますが、隣接する門跡尼寺の中宮寺、ここにある国宝「如意輪観音」は世界三大微笑（アーケック・スマイル）像として知られています。やさしく気品のある優雅なお姿は、女性好みの仏さまです。

再び桜井にもどって、聖林寺、この「十一面観音」は等身大のふくよかな仏さま。白洲正子はその著書のなかで、こんな感想を述べておられます。

『聖林寺の十一面観音は、いかに

も自然な姿ですらりと立っており、よけいな意味づけが加えられていないのが美しい。』

「飛鳥路」には明日香村、高松塚古墳、飛鳥寺など見どころも多いのですが、彼岸花の咲く秋、赤一色のこの道を、自転車でのサイクリングは最高の楽しさでした。

大和を愛した著名人は少なくないのですが、行く先々のお寺で見かけたのは、会津八一の歌碑でした。この地に永きにわたり逗留し、沢山の和歌を詠んだ人です。

その一つ中宮寺の歌碑

みほとけの

あごとひちとにあまでらの

あさのひかりの

ともしきろかも

かつて、朝日新聞の「天声人語」の名コラムニストとして、知られた深代惇郎も奈良を愛した記者でした。絶筆となった昭和五十年十一月一日の一文の最終行は「いつかまた法隆寺を訪ねてみたい。」

天才の早すぎた四十六才の生涯

## エッセイ

### 我家の

### 愛犬達の小史

加藤 導男

もう五十年程前のことです。当時、私は職場の女性と付き合っていました（後に結婚した家内です）。喫茶店で、彼女から「昔の彼の写真見たい？」と言われ（内心ムツとしたが、惚れた弱みで…）、

「ああ、そう」と応えたところ、ハンドバッグの中から、洋犬で黒っぽいヨークシャーテリアの写真を見せてくれました。以前飼っていたらしい…。

彼女は動物好きで、九官鳥も飼っているらしかった。

※ ※ ※

結婚して五年程して、家内の実家から九官鳥が送られてきて、義父のウガイヤ、家内を呼ぶ声の物

まねを器用にやっていたのを思い出します。

そして、同時期に家内の姉が飼っていたシーズー犬のブリーダーを紹介してもらい、雄雌の二頭を購入したが、吠えず、優しい犬種で長男・長女の情操教育にプラスになったと思っています。

しばらくして、近くの長男の友達が転居で犬をもらって欲しいとのこととで飼うこととなった。シエパードに似た雑種で、庭先に犬小屋を買ったが、エサを上げようとすると、「ウッ」と吠えたりして、そうこうするうちに馴れてきて、おとなしくなっていた。後に、その友達の家でこの犬に虐待をしていたという事を他の方から聞きました。

※ ※ ※

しばらく経ち、広島に転勤になり、シーズー犬の二頭は、義姉宅で預かってもらったが、そこにも何匹か犬を飼っているの、止むなく、杜宅の方々に了解を得て空路で広島に送ってもらった……。

長女の五歳の誕生日の日に、屋台で亀をプレゼントした。在来種のキンセン亀の種類で僅か五センチ

当方は仕事で忙しく、家内がワンちゃんの世話をしていたが、亀のキンちゃんの担当は当方。衣装ケースに砂利を入れ、水を張り、エサは何故か金魚用のものが好物で、休日にはその衣装ケースを洗って、エサをやるのが楽しみでした。私が近くにくくと、目を細めて寄ってくるのです……。

十一月下旬から翌年の春まで、そのケースの中で冬眠します。その間、時々水をかける程で、世話のかわらない、可愛いキンちゃんでした……。

※ ※ ※

時が経ち、シーズーの雌のワンちゃんは十七歳で亡くなり、雄のワンちゃんは後一カ月で二十歳になるところで天国に旅立ちました。勤務先に家内から電話をもらったが、帰宅したら、近所の奥さん達

でした。

もう一度、ゆっくりと想い出を辿る大和路を歩いてみたい。まだ訪ねたことのない、飛鳥と難波を結び、日本最古の官道、「竹内街道」も歩いてみたい。元気で、この足で一歩一歩歴史を踏みしめながら先に進む希望をもって……。

おわり



▲般若寺のコスモス



▲聖林寺十一面観音

もみえていて、大きな段ボールに沢山の花の中にワンちゃんが眠っていて、お通夜をやってもらいました……。

※ ※ ※

※ ※ ※

十年前の秋、東北大地震のあった年ですが、ペットショップでシーズー犬をみつけ、家内が是非欲しいと言い出しました。それまで、二人はツアー等で全国を旅行もしていたが、家内は「もう、旅行は行かないで、ワンちゃんの世話をしたい……」と言って、飼うことに決めました。

名前は家内と仲が良かった私の母の名「ナフ」から「ナオちゃん」にしたと家内の希望で名付けました。

明治女の母に似て、辛抱強く、優しく、おとなしい性格で、一日、啼かないことが殆どです。

ところが、三年前の暑い最中の八月、家内が突然倒れ、私は、一一九番に電話をし、救急車が来てくれました。担当の方が私も同乗してはと言われたが、熱中症だと思いついていたので、自家用車で救急車の後を追いました。夕方だっ

たので、自宅を出る前、家内が「ナオちゃんのご飯はどうするの？」と言ったのが最期の言葉でした。救急車の中で意識が無くなったと、病院に着いてから聞かされました。私は今でも、救急車に同乗しなかったことを悔いています。

家内が逝った翌年の四月、亀のキンちゃんは冬眠から覚めず、天国に召されました（亀の寿命は二十年とのことですが、四十年も生きたので、長寿であったと思えます）庭に埋めてあげて、月命日には、お線香を上げています。

現在、長男とは月一回程、一緒に食事をしています。娘夫婦は転勤で海外にいるので、ラインで連絡を取り合っています。ナオちゃんは昨年、大病を患い、手術もしましたが、いい獣医さんにめぐり逢い、今は元気になって安心して暮らしています。

寂しがり屋で（そう言う私もうですが）、私が外出から戻ると大変な歓迎振りで、癒されています。私にとって最高の相棒で、今年十歳になったので、後十年以上はお互いに健康でいなければと願う毎日です。

完

## エッセイ

### 八月の追憶

#### 瀬谷 俊二郎

プロフィール

1945年の8月は、6日・9日に原爆が落とされ15日に終戦の詔勅が発せられて（9月2日の講和調印日が正式の終戦だが）日本が無条件降伏し、第2次世界大戦が終結したという世界の歴史の上でも大きな転換点となった月である。

終戦後76年たった現在、戦争体験のある人達が数少なくなっていく中で、終戦前後の記録・記憶を少しでも後世に残していくのが当時を生き残った者の責務ではないかと考えるようになったのがこのエッセイ執筆の動機である。

1936年生まれ筆者は終戦時にはまだ9歳で武器をもって戦った戦場経験等はなく、いわゆる銃

遊びはほとんどが戦争ごっこであり歌は軍歌が中心であった。

・開戦後しばらくはシンガポール占領等日本軍勝利の報に国民が沸く時期があったが、永らく事変という名の下に戦っていた中国とも日中両国の宣戦布告によって全面戦争状態に入り、1942年にはミッドウェー海戦で大敗する等先行きに暗雲が立ち込めるようになっていった。

供向け小説（怪人20面相、少年賛歌、火星兵団・・・）を読んだ。過ごした。

・住吉は尼崎、西宮等工業地区が近く1945年に入ってから空襲の頻度が増え、被災の危険に晒されるが多くなっていった。

がら家の外の裏塀のすぐ後ろにある防空壕にいき、まず妹を入れ続いて筆者も中へ入った。

・1943年にはガダルカナル島が奪取され、アッツ島玉砕に続いてイタリヤが無条件降伏し、国内では学徒出陣が始まった。

・年が明けるとB29による空襲が激しくなるというので、大都市では強制疎開や縁故疎開等が行われるようになり筆者の家族も東京から兵庫県の住吉へ縁故疎開することになった。

・警戒警報が鳴ると各家は一斉に灯りを消すか、覆いをかける（灯火管制）かして消火準備や防空壕への避難準備を始める。

翌日、住吉の浜で見た被災者の遺体（筵がかけられていたが・・・）も忘れられない。

・1944年になるとサイパン島が陥落し米軍大型爆撃機（B29）による本土爆撃が迫ってきたため、急遽学童疎開を実施することになった。

筆者と姉もこれを機会に家族と一緒に暮らすことになって住吉へ疎開先を移した。

空襲警報が鳴ると敵機が飛来してくる。飛行機の爆音とともに爆弾の破裂する音や焼夷弾落下時のシュルルといった音が聞こえてくる。爆発や火災であちこちが明るくなったり激しい音が聞こえたりする。

・当時の物不足もひどかった。1940年以降、米、味噌、醤油、塩、マッチ、砂糖、木炭等生活必需品は順次配給切符制になった。

#### 2. 空襲と配給

・筆者と姉は家族と離れて同じ小学校の生徒（30人位）と奥多摩のお寺（門修院）に疎開し集団生活を送ることになったが、当時の最大の記憶は空腹、蚤・虱である。

・住吉では伯父一家と我々一家以外にもう一家の3家族が同じ家で生活していた。

2・3時間して敵機が飛び去り空襲警戒解除のサイレンが鳴るとやっと防空壕から這い出るといいう事態が頻繁に起こるようになった。

米でいえは米穀通帳をもって買いくくと外米が60%混ざった米を一人1日2合3勺分（のちに2合1勺に減量された）の割合で配給され、外食する場合はそれに見合う外食券が必要となった。

週に1〜2回集団で遠く離れた村の小学校に通ったが大半の時間は寺の中で漫画（のらくろ、冒険ダン吉、フクちゃん・・・）や子

家は比較的大きく食事は大勢が一緒であったが食べるものはそれぞれに貧しいが分け合ったり、諸事助け合っていたように思う。

・春先（3月か4月）とうとう我が家に爆弾と焼夷弾が落とされた。空襲警報が鳴ったので寝巻のまま防空頭巾をかぶり妹の手を引きな

1942年になると綿・衣料品も配給切符制になり女性のおしゃれ

着はなくなっていわゆるモンペ姿が一般的となった。

### 3. 終戦後

・戦後しばらくの間、父の勤務先のある大阪府吹田市の官舎で暮らした。

吹田市は千里丘陵のふもとにあたる処で、あまり戦災にあっておらず、後年の大阪万博開催地の近くである。

・生活は相変わらず配給品だけなのでいつも腹ペコだった。

とは言え、駅の周辺では闇市が盛んになり高い金を出せば食べ物(芋やスイートン・…)などが少しずつ出回るようになった。

・少しでも食べ物を手に入れようと近郊の農家へ買い出しに行く人が増えていた。

しかし乗り物は本数の少ない鉄道だけでいつも超満員。

子供では押しつぶされそうでも怖かったが、筆者も時には買い出しに参加した。

サツマイモの対価はお金のほかに秘蔵の着物等で支払うことが多く

非常に情けない思いだった。

・日本の終戦直後のインフレはすさまじく、食料不足や多数の引揚者流入等で小売物価は4ヶ月後に2倍、6ヶ月後に約3倍になった、

このため1946年2月に突如、新円切り替えと預金封鎖が行われ、約3週間内に旧円を新円に交換しないと無価値になり、また新円預金も毎月生活費以外は引き出せないことになった。

その後も急速にインフレが進み、ほとんどすべての人が財産を失った。

・この頃の思い出を語るとすれば、焼け野原と戦災孤児も欠かせない。

多くの市街が焼け野原と化し空襲で生き残った人たちは焼け跡にバラックを立てて生活した。

バラックは焼け残った木とトタンでできたもので大きな風や地震があればとても耐えられそうもない粗末なつくりである。

そして戦争のために親を失った戦災孤児は巷にあふれていた。

1948年に実施された『全国孤児一斉調査』によると日本の戦争孤児は12万人余となっているが

当時の環境から考えて信憑性は限定的である。

東京の上野駅周辺で地下道に寝起きしていた子供たちは浮浪児と呼ばれ餓死・凍死した者も少なくないといわれている。

### 4. 振り返ると

・終戦までの9年間はその後的人生と比べて時間的には決して大きくはないが、内容としては印象に残ったことが多かった。

いまは、日本とアメリカが3年8ヶ月にわたる大戦争をしたことを知らない人がいっぱいいるが、戦争は実に恐ろしいものである。

・核爆弾のできた現在、その最初の犠牲者となり何十万人という人命が失われた広島、長崎の経験を持つ日本人はその破壊力の無制限の大きさ、非情さについて世界に訴え続けなければならぬと強く思う。

## エッセイ

# 天守が動いた

## 長谷川 憲司

弘前城天守が動いた

本年(2021)六月に弘前の私の再従兄弟(はとこ)が七十二歳で劇症1型糖尿病に罹り亡くなった。年齢も私と近く気が合ったので青年時代には一緒に遊んだこともよく覚えている。死去の報告を2週間ほど経ってから、彼の弟からの電話で聞いて驚いた。その後七月に弘前の菩提寺で四十九日法要が執り行われたのであるが、私は居ても立っても居られなく、つくばの自宅から法要に参列したのである。

法要の前日、午前中が空いていたので、大学時代に彼と訪れた弘前城に五十年ぶりに出かけた。弘前城は広い敷地に、一部が築城当時のまま残っている国内でも貴重な

城である。ちょうどその日は、東北地方も梅雨が明け三〇度を超え、まばゆい夏空が輝いていた。

### 弘前藩と弘前城の歴史

弘前藩の通称は津軽藩で、江戸時代に陸奥の国にあった藩である。

津軽の歴史は鎌倉時代に遡る。その頃の津軽は常に現在の岩手県南部と対立していた。津軽藩の初代藩主津軽為信(ためのぶ)は、も

とは南部氏の被官であり、戦国時代末期に独立を進めた。天正十八年(1590)七月の豊臣秀吉の小田原征伐に参陣して大名として認められ、更に関ヶ原合戦では徳川

家康に味方し藩威を拡大した。以降、江戸時代は津軽氏が青森・津軽地方を治めた。石高は飛び領地も含めて当初四万七千石、江戸時代文化五年(1808)には十

万石の大名になった。津軽為信は慶長八年(1603)に徳川幕府の成立とともに高岡(現在の弘前市)

に新たな町割りを行い、城の築城を計画するが、慶長九年(1604)為信は客死する。二代藩主津軽

信枚(のぶひら)は意志を継いで、築城を再開し、慶長十六年

(1611)に弘前城が完成した。

築城当時、天守は五層であったが、寛永四年(1627)鯨に落雷し、地下の火薬庫に燃え広がり、大爆発を起こしたという。その後、

武家諸法度により、自由に城を築くことも五層以上の天守の建築も厳しく制限されていたために、天

守は再建されず櫓で代用され、弘前城は約二百年間も天守がないままであった。

文化七年(1810)九代藩主津軽寧親(やすちか)の時に、蝦夷地警備の任に功績が認められたこ

とや、当時ロシア船が津軽海峡を往来し、その防備のためという理由で、石高が昇格したのを機に櫓

移築の許可を取り、隅櫓(すみやぐら)を改造し完成したのが、本丸の西南角隅に三層を成し、御三

階櫓(ごさんかいやぐら)と称された現在の天守である。なお、雷で焼失した五層の天守は現在石垣のみが残っている。

当時も幕府は天守の新築は認め

ていなかったの、弘前藩は幕府に對しては天守築造という名目ではなく、あくまで櫓の改築という名目で願ひ出たと言われている。

・太平洋戦争では延べ1000万人以上の日本人が兵士あるいは軍属として戦い、戦死240万人(うち70%が餓死)、原爆や空爆で焼かれた家屋は240万戸以上、民間人の死者70万人超といわれる。

・この先人達の惨たる犠牲を教訓に戦争のない未来を築くことが我々に課された使命ではないだろうか。

完



### 現在の天守の工夫

現在の三層の天守は、濠側の東側と南側には鉄扉を付けないで、矢狭間のみとし、また一層と二層にはその中央に張り出しを付け、切妻破風と石落としを設けるなど古形式を特徴としている。



▲移動前の天守

この両面を見たときに天守がより大きくそびえるように見える工夫をしていると言われる。一方、北側と西側の両面は破風も狭間も付けず、窓が大きく取られているだけである。

このように、外部から見える部分、東側と南側が堂々としている

が、北側と西側が簡素な造りとなつているのは理由があるらしい。

北側と西側が簡素な造りとなっているのは幕府の目を欺くためと言われている。弘前藩は代替天守とはいえ、なんとか格好の付く天守を建てたいと考えていた。しかし、あんまり立派に造っては幕府から咎めを受ける恐れがあったので、前述のように、外部から見える部分は装飾を施し、内部から見える部分は簡素に仕上げたようだ。天守が完成し、幕府の役人が監査にやってくる時、藩は役人を籠に乗せたまま、二の丸から下乗橋（二の丸から本丸へ架かる橋）を渡り本丸へと案内する。この間、役人は装飾された東側と南側両面を見ることはできないが、本丸に到着した役人は飾り気のない北側と西側両面を目にすることになる。

役人は簡素な造りの代替天守を見て、通常の櫓と判断し、問題ないと認可を下したと言ひ伝えられているのである。

### 石垣の修復のための天守の移動

近年この天守の石垣が外側に膨らむ「はらみ」が見られるように

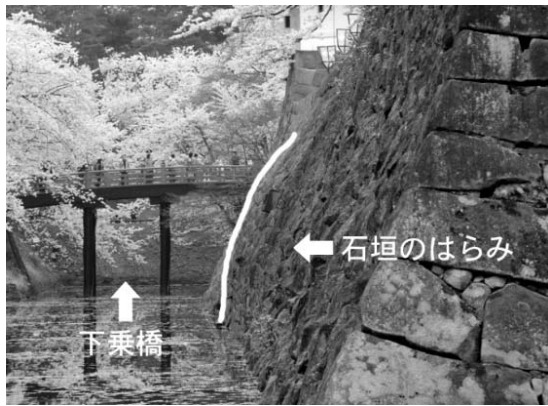
天守は向かって左手に約七十メートル移動・移設されていた。

### 弘前城を訪問して



弘前城（津軽城）は江戸時代を通じて津軽地方の象徴であった。西に標高二千メートル近い岩木山がそびえ、自然と良く調和した城下町弘前の家並みは、今も当時の武家時代の落ち着いた雰囲気を保ち、面影をしのばせるものがある。この地は、作家石坂洋二郎が高校教員をした町で、彼の小説を基に作成された青春映画『青い山脈』の舞台を脳裏に彷彿させてくれる。そしてこの町は、敗戦で身も心も

なったために、崩壊の危険を避けるために、平成二十七年（2015）天守が立つ石垣を修理することが決まった。石垣修理は天守の真下も行われるため、天守を移動する必要がある。高さ十四メートル、総重量四百トンの天守を七十メー



トルそのまま移動する計画であった。現在、天守は仮の置き場に設置され、濠が埋められ、天守台があった石垣の修復が行われている。

### 弘前城観覧

私はこのような時期に弘前城を観覧したのである。追手門から

疲弊した日本人に希望を与えてくれたあの「リンゴの故郷」なのである。

弘前城の城門や櫓など多くの遺構が今も残り、春の「桜祭」、夏の「ねぶた祭」（※青森はねぶた、弘前はねぶた）、秋の「紅葉祭」、冬の「雪灯籠祭」など、四季の様々なイベントが津軽で催されるそうだ。

今回私は身近な親戚の法事で懐かしい東北のこの町を訪れた訳であるが、何年か経ってからも一度静かにこの町を訪れてみたいと心に誓った。

※残念であるが、今年も「ねぶた祭」は中止である。

### 「参考資料」

- 「弘前公園」株式会社コンシス（ネット情報から）
- 掲載写真は「弘前公園」から転写および個人の撮影写真
- 「弘前城が動く」弘前城石垣修理事業 弘前公園総合事業 弘前市役所（ネット情報から）
- ウィキペディア「弘前城」「津軽為信」

順序良く天守までたどり着いた。三の丸に現存する「追手門」は四十九万二千平方メートルの弘前公園の正面玄関である。現存する城跡には、天守をはじめとして櫓三棟、城門五棟の建築物が残されており、いずれも国の重要文化財に指定されている。



この古形式の三の丸にある追手門を通り抜け、コの字型に百メートル程砂利道を歩くと、二の丸へ通じる「杉の大橋」（当時は杉で作られていた）に差し掛かる。桜の時期にはこの大橋は両側から咲き乱れるソメイヨシノに覆われる。

残念ながら私が訪問した時には、既に桜花は散り、新緑の森の中を



過ぎると、左手に南内門（ミナミウチモン）が見えてくる。更にそのまま二の丸を進み、左手角に未申櫓（ヒツジサルヤグラ）、右手角に辰巳櫓（タツミヤグラ）を見て、奥に進むと、本丸に通じる下乗橋（ゲジョウバシ）に差し掛かった。藩政時代には二の丸側に下馬札が置かれ、藩主のみ乗馬のまま本丸に入ることができたようだ。ここを過ぎると正面に天守が見えるはずであったが、前述のように、



▲弘前駅前から岩木山を望む



▲左から「弘前ねぶた」「五所川原立佞武多」「青森ねぶた」

# 神奈川県道40号線 「通称・厚木街道」 の歴史

西沢 昭

神奈川県道40号線は横浜市旭区鶴ヶ峰から、厚木市に至る道路です。通称厚木街道と呼ばれ、国道246号線も厚木街道と呼ばれていることから混同されます。きょうはこの県道40号線の横浜市と大和市の部分についての歴史をたどってみます。

古道の推定には、一般的に古文書や古地図、各種石碑が役に立ちます。今回はそんな昔の部分省き、江戸末期から近現代における街道の変化をたどってみます。

## 江戸時代

この付近の新編武蔵風土記稿や新編相模風土記稿を見ますと、相州道・厚木道・神奈川道などという言葉が出てきます。「村内に相州



## 昭和時代

昭和恐慌により、世の中に失業者が増えました。失業者対策が行われました。その一つが道路の改修です。神奈川県公文書館にある史料によりますと、昭和七年からの4年間で、厚木街道の直線化工事が行われ、現在の経路となりました。この工事は二俣川から大和市までで、これにより、尾根を通る道から相鉄線沿いに走る経路に変更されました。細かな曲がりくねった道も、「これからの自動車社会を見据えて」と、工事の決意願いにも記載されています。当時一日の自動車通過数は数十台であったので、ずいぶんと先を見据えた考えであったと感心します。詳しく中身を見てください。昭和七年からの3ケ年で、瀬谷区二ツ橋から西に向かい小田急線の先までが直線化されました。昭和十年には、

道という一条の道あり」というような文章です。また付近にある石碑を見ると「右神奈川道」などと刻まれていることもあり、これらのことをつなぎ合わせ、「厚木街道」がこのあたりを通っていたということが想像できます。私が調べたところでは「厚木街道」という名称が出てくるのは、江戸時代終わり歌川広重が描いた「東海道細見図会・神奈川1」が最初ではないかと思われま



右図は歌川広重の絵です。この絵の上部に小さな文字が書かれています（詳しく調べたい方は国会図書館のデジタルコレクションに絵が載っています）。よく見ると「相州大山道あつきかい道追分」と書かれています。この追分は現在の西区浅間町の追分です。また横浜市教育委員会から刊行されている「横浜の古道2」には横浜市内の相州

道（厚木街道）が記載されています。当時の厚木街道は程ヶ谷宿より、神戸町にある神明社横を通り、星川小学校横、上星川の蔵王神社横から坂を上り、西谷浄水場を横切り、保土ヶ谷高校、本宿小学校、二俣川駅北のドンキホーテ裏から坂を上り、二俣川小学校北を通り、中尾小学校の南、春の木神社下、三ツ境駅の北を通り、相鉄線踏切を渡り、瀬谷警察署の前を通り、二ツ橋交差点で右に曲がり、二ツ橋上橋交差点を左に折れ県営相沢原団地内を通り、瀬谷地区センター前、瀬谷郵便局の南方路地を入り、橋戸2丁目信号で環状4号線を渡り、西福寺北隣、境橋、東電大和変電所、草柳3丁目交差点から厚木飛行場の中を横切り、綾瀬に抜けて行つたと考えられます。

## 明治時代

時の政府の肝いりで、地形図の作成が行われました。明治十五年ころから順次発行された「迅速測図原図」です。厚木街道と思われる道が記載されていますが、前記「横浜の古道」では相鉄線瀬谷駅あたりは点線で推定線となっています。実はこの部分「迅速測図原図」

経路が変更になりました。その時の資料があります。

大和市史5)には昭和一七年一月一日県庁での都市計画打ち合わせ覚書があり、「東京厚木線、横浜厚木線は空C廠（高座海軍工廠）設立に伴い支障となり、いずれも付替えの事となるも・・・」と経路変更がされることが記載されています。どのような経過をたどったかは不明ですが、現在の経路に近い、厚木基地を北方面に迂回し、相鉄線の南を通り、さがみの駅前で南下するように変更され、現在のような経路となったと想定できますが、詳しくは今後の研究課題です。

では道路の記載がなく、綾瀬市史研究十一号3)に瀬谷区から大和市、綾瀬市内の相州道（厚木街道）の研究結果が記載されています。綾瀬市史研究では現在の県道40号線に近いところとなっています。この時代どこが厚木街道であったかは議論のあるところです。

## 大正時代

大正時代から昭和の初めにかけて厚木街道は大きく変化します。大正九年全国に府県道が制定されました。どこを通る道が府県道〇〇です。というもので、内容が官報で公示されました。「横浜厚木線」は横浜市から愛甲郡厚木町」となっています。官報からは具体的な経路は分かりませんが、これで厚木街道の経路が決まったことになりました。さてこの厚木街道、調べていくと起点は保土ヶ谷区元町であることが分かりました。現在の今井道と呼ばれる道です。これで二俣川まで行き、現在の二俣川小学校北を通りあとは江戸時代の前記道路となっています。大正時代の厚木街道の起点は保土ヶ谷駅近くでした（左図は当時の官報）。

(58)

前記保土ヶ谷駅から二俣川駅までの経路が、鶴ヶ峰に橋を作ること、経路が変更になりました。これは当時地元の人たちが、経路変更反対の陳情書を提出しており、これで逆に大正時代の経路が分かった次第です。しかし国は最初この変更を認めませんでした。翌年認めています。そして保土ヶ谷駅前から二俣川駅前までは新しい府県道となりました。このあたりの理由は書類として残っていないのでわかりません。そして昭和十一年二俣川駅から二ツ橋までの経路が相鉄線と並行して走るように変更となり、ようやく現在の厚木街道の経路が出来上がりました。旭区内の昔の厚木街道には「旧厚木街道」の道路標示が設置されているのでよく分かります（左図）。



厚木街道が直線となったのち直ぐに、今度は厚木飛行場建設により、



右図は昭和七年の二俣川と鶴ヶ峰の間を示した地図です。先の府

県道の起点が保土ヶ谷から鶴ヶ峰に変更となる前の地図です。上部を走る道路は府県道横浜中野線、左下の神中線を横切る道路が府県道横浜厚木線です。あいだの帷子川には橋は無く、現在のように太い道路で結ばれていないことが分かります。

このように一つの道路を見ても、時代の流れとともにその経路が変化することが分かります。このことは昔の道路位置を特定することが困難となることを表しており、そのことが旧道めぐりとして新たな昔探しの魅力となっていることにつながります。近現代の史料は公文書館などに多く保存されていますので、調査することで、新しい知見に出会うことができます。

(59)

## (参考文献)

- 1 国立国会図書館 デジタルコレクション画面より
- 2 「横浜の古道」
- 3 綾瀬市史研究十一 「綾瀬市の古道」 大久保幸夫
- 4 官報（大正九年四月一日号）
- 5 大和市史・資料編6（437頁）

## 徳川吉宗

## 暴れん坊ではなく陰謀将軍

真野 信治

はじめに

昔よく見ていたテレビ時代劇の中で印象に残っている番組のひとつに「暴れん坊将軍」がある。番組の構成は、八代将軍徳川吉宗が、旗本三男坊の徳田新之助に身を変えて江戸市に出没し、悪を暴いてそれを討つという毎度お約束通りの展開で成り立っている。いわば、「最後にびっくり！水戸黄門的顛末」と同系統のものといつていい。加えて、主役の松平健の素早い殺陣も売りであり、誰しもがスカツとする決着をもって番組の締めくくりとしている。以前、まだ幼かった長男が私の隣でよくこの番組を観ていたのだが、話の内容がよくわかっているとは思えなかった。ある時、これのどこが面白いの？と聞いたこ

とがある。息子曰く、それは最後のやり取りだと言う。つまり、悪人のアジトに乗り込んできた吉宗に対し、その親玉が「きさま、何者だ？」と聞くと、吉宗が「お漬物だ！」と答えるのが最高に笑えるという。「??」と思ったがよく聞くとこういうことだと分かった。悪人「きさま、何者だ?」、吉宗「このうつけ者！予の顔を見忘れたか?」、悪人「予じゃと?あつこれ以上様!」（ここで全員が這いつくばる）。このやり取りの事を言っているであろう。もうお分かりのことと思うが、幼い息子は「うつけ者」と言うセリフが「お漬物」と聞こえたらしい。

ところで、この八代将軍吉宗は、NHK大河ドラマでも取り上げるほどの人気者である。一般的には、三百年続いた徳川将軍のなかで中興の祖といわれるほどの名君と言うことになっている。将軍就任後、積極的に財政改革を実施し、「儉約の徹底」を掲げたいわゆる「享保の改革」を推進したとされるが、一方で年貢増徴など農民に対して負担を強いる政策であったという説もあり、その改革の効果を疑問視する研究者も多い。紀伊徳川家

の四男に生まれながら二人の兄の死とともに藩主となり、さらには御三家筆頭の尾張藩を出し抜いて、まさかの徳川幕府八代将軍となつてしまった彼を、類まれな幸運児だったと見なすべきなのであるか?本稿はこの吉宗の成り上がりにもスポットライトを当ててみたい。

## 紀州藩主への道

紀州藩主徳川光貞の四男に生まれた吉宗（当時は松平頼方）の一大転機は宝永二年（一七〇五）に始まる。五月に嫡兄の綱教が四十一歳で死没したのを発端に、八月には父光貞が七十九歳で死没、さらに九月には藩主になったばかりの次兄頼職までもが病死する。わずかに四カ月間の出来事である。結果、気が付けば吉宗が藩主の座に就いていたわけである。父光貞の死は、年齢から判断して老衰とみて間違いない。気になるのが、綱教と頼職の死に関する共通点である。両名とも江戸から国許に下向して間もない時期に発病し、死に至っている点である。特に頼職の発病に際し、不可解なのは、その側近が急ぎ幕府からの奥医師派遣を懇願していることである。紀州藩にも藩医がいるにもかかわら

ず、である。先の綱教の死を不審に思っていた頼職の側近が、今回も吉宗が裏で暗躍していると考えたのだろう。つまり、藩医らが吉宗に買収されている可能性を危惧し、このまま診せれば主人が危険であると踏んだのである。また頼職自身も、体調が良くない中で毒を盛られている可能性を察知し、医師や料理人に疑念を感じていた痕跡もあるが、最終的に死に至ってしまった。しかし、双方の死について、当然のことながら吉宗が関わった証拠はなく、もちろん病死であった可能性もなくはない。ただ、この二人の兄の死が尋常ではなかったため、吉宗のよからぬ噂が世上に喧伝されていた痕跡は確かにあったのである。憶測を重ねれば、吉宗が以前よりこのような事態を想定し、あらかじめ藩医などを手なずけていたかもしれない。そうなる若年にもかかわらず相当の策略家と言わざるを得ない。一方で、藩主に就いた吉宗は厳しい儉約令を発しながらの緊縮財政を掲げて藩政を改革したことは評価されるべきものである。

## 六代将軍家宣の意向

紀州藩主になった吉宗は、いつころ。もちろん証拠はない。ただ、吉宗は将軍就任と同時に「御庭番」なる隠密制度を創設したという事実はよく知られている。さしずめ、紀州藩主のころから隠密集団を組織しており、彼らを使ったのかもしれない。ただし幼君五郎太の死はどうであろうか。わずか三歳の藩主が対抗馬となり得るとは思われず、吉宗側が暗殺するだけの理由はない。どちらかと言えば、吉通の異母弟である継友の仕業と考えられなくもない。実際、五郎太の後はこの継友が次の藩主となっている事を踏まえると、あながち否定は出来ない。紀州藩と同様、尾張藩内にも様々な抗争があった可能性はあるが、仮に外部からの刺客を許してしまったとなると、藩の危機管理意識は低かったと言わざるを得ない。

もしなければ間違いなく将軍にはなれないことを知っていた。ただ、性懲りも無くこの継友をも除こうと考えるだろうか。それはわからないが、さすがに何度も藩主を暗殺する行為は現実的ではない。尾張藩にしても、紀州藩の裏工作に對し、さすがにより高い危機管理意識を持って臨んでいたはずである。そんな中、吉宗は尾張藩包囲網の如き、政治工作を行っていた痕跡がある。まずは、権力を握っていた大奥の天英院の取り込みである。将軍になった暁には、天英院派の禄を増額することを約束し、さらには天英院実父である関白近衛基熙にまで贈賄に及んでいる。また、御三家のうち、将軍後継候補とはなり得ないはずの水戸藩にまで裏工作を展開している。と言うのは、候補にはなり得ない水戸藩主ではあるが、将軍選定会議では重要な役割を演ずることになるからである。実は、当時藩主綱條の藩政改革が挫折してしまったことで、水戸藩は多額の借金を抱えてしまっていた。その水戸藩に、将軍就任の暁に金銭的援助を約した可能性は大いにある。このように、

ろから将軍職を意識し始めたのだろうか。六代将軍家宣の唯一の男子、家継が幼く病弱であったからであろうか。『折りたく柴の記』には、家宣が将軍職を御三家筆頭の尾張藩主吉通に譲りたいという意向であったことが記されている一方で、吉宗についての言及は全く無い。おそらく家宣は、自身が将軍職に就けるかどうかの微妙な時期に、紀州綱教に篡奪されそうになった苦い経験から、紀州嫌いであった可能性はあり得る。結局、家宣は新井白石の懇願を受けて幼い家継を次期将軍に定めたので、家宣死後はすんなり幼君家継への引継ぎが成されている。また、当時の大奥に目をやると、家宣正室の天英院と家継生母の月光院による二大派閥が並立しており、このことが今後の将軍継承に少なからず影響を及ぼしてくる。因みに月光院派の中心人物は、かの有名な「絵島生島事件」の御年寄絵島である。この事件で絵島を失った月光院派は、さらに多くの女中が処罰されたことで、劣勢となつてしまい、吉宗の将軍就任直前の大奥は天英院派の天下であった。七代将軍家継は吉宗の予想通り、将軍就任の三

年後に病没するのだが、実はこの時、家宣一押しであった尾張藩主吉通はすでにこの世の人ではなかったのである。尾張藩との抗争  
尾張藩主徳川吉通は、木曾の林政改革などに挑むなど名君の評価が高かった。因みに生母の本寿院は絶世の美女だったという。順風満帆であった吉通であるが、家宣の死から一年後に二十五歳という若さで突然亡くなっている。が、その死は不審極まりないものであったことが伝わる。持病など全くない健康体であった吉通が、夕食後に大量の血を吐いて悶絶死したとあるので、これは明らかに自然死ではない。食後に出た饅頭を食した直後のことらしいが、側近・医師団はその饅頭を調査したのだろうか。加えて、吉通の後を継いだ嫡子の五郎太も二カ月後に突然死している。常識的に見れば、何者かが二人を暗殺したと考えざるを得ない。『鸚鵡籠中記』などに、この時期紀州藩の隠密が尾張屋敷周辺をウロウロしていたとの記述もあり、後々の将軍候補のライバルになり得る吉通を吉宗が先手を打って抹殺したと考える余地は十分あ

る。もちろん証拠はない。ただ、吉宗は将軍就任と同時に「御庭番」なる隠密制度を創設したという事実はよく知られている。さしずめ、紀州藩主のころから隠密集団を組織しており、彼らを使ったのかもしれない。ただし幼君五郎太の死はどうであろうか。わずか三歳の藩主が対抗馬となり得るとは思われず、吉宗側が暗殺するだけの理由はない。どちらかと言えば、吉通の異母弟である継友の仕業と考えられなくもない。実際、五郎太の後はこの継友が次の藩主となっている事を踏まえると、あながち否定は出来ない。紀州藩と同様、尾張藩内にも様々な抗争があった可能性はあるが、仮に外部からの刺客を許してしまったとなると、藩の危機管理意識は低かったと言わざるを得ない。

多角的な政治工作を実行した吉宗  
状況証拠から、吉宗が有力対抗馬の尾張吉通を死に至らしめた可能性は決して低くはないと言える。因みに家継の将軍就任時の尾張藩主は継友であった。家宣の「尾張藩主を後継者に」という意向はこの時点でも生きていた可能性は十分ある。そして、吉宗自身もなに

継危篤を受けて諸大名が集まっている中で、天英院と水戸綱條が強力に吉宗を次期將軍に推薦するに至った。裏では吉宗將軍職への道が着々と進んでいたことを露とも知らない尾張藩主継友が呆然としているうちに、あつという間に吉宗が上座についてしまったわけだ。こうして吉宗は御三家筆頭の尾張藩を出し抜いて、八代將軍職を手に入れたのである。

### 吉宗の暗躍を援けた人物

前述した通り、吉宗は紀州藩主のころから、のちの「御庭番」と称する隠密を駆使し、様々な工作を行っていたと思われる。ただ、大奥や他藩、幕閣への政治工作、或いは実行犯への具体的指令などは、吉宗自身が表立って携わることは良策とは言えない。そこを、吉宗に成り代わり裏工作を代行していた者がいたとしても不思議ではない。それを推理してみると、可能性がある人物として、父光貞の弟である伊予西条藩主松平頼純とその嫡男であった頼雄が浮かび上がる。兄弟が死に絶えた吉宗にとって、叔父の頼純・従弟の頼雄は、数少ない近親者であり、常に近侍する理解者であったと思われる。

## エッセイ

# はじめに「コトバ」ありきか2

## 色葉匂へど その6 (ゲンさんの歴史幻想)

宮下 元

【前82号の続き】

◆人類の進歩は「コトバ」ありきか  
我々現生人類（ニホモ・サピエン）ス「新人」。以下『新人』と称すは遺伝子進化は少ないのに、急速な技術進歩を遂げた。

その要因は、文字の発明とコミュニケーション能力つまり「コトバ」にあると思う。新約聖書ヨハネ福音書ではないが『初めに言（ことば）があった』である。

前82号その5で文字の成り立ちまでを述べた。文字からみれば、古代エジプト人は既に高い能力と文化を持っていたとわかった。

次に、更に遡って音声言語を捉えてみたい。ただし、音声言語の起源は有史以前つまり文字の無い時

では、なぜこの親子が裏工作に携わっていたと想定できるのか。それは吉宗の紀州藩主就任以降、この二人がなんとも不可解な動きを見せ始めたことによる。すなわち、宝永三年（一七〇六）いきなり父頼純が頼雄を義絶したのである。理由は「行跡無宜」という漠然としたもので、廃嫡された頼雄は西条藩下屋敷の座敷牢に押し込まれてしまった。かわりに側室の子である頼致（後の紀州藩主宗直）を嫡子と定めたのである。ただ、頼雄の評判はすこぶる良く、なにか落ち度があったとも思えない。急な仕置に納得できない重臣らも必死で翻意するよう諫言するもかえって手打ちとなってしまった。非常に不可解な事件であった。注目すべきは、藩主吉宗がこの従弟を不憫に思い、後に紀州に移したという事実である。その後の頼雄はもっぱら謹慎していたらしいが、実は表舞台から消え去った彼のその後を伝える明瞭な記録はないのである。こうしてみると、吉宗に近いこの頼雄は、彼の指示を受けて裏で工作するにはうってつけの人物であったと言っても差し支えない。しかも、一連の行動から判断して、父頼純

も諸々の工作に協力していたと考えられるが、こちらはまがりなりにも西条藩主であるため、あまり目立った動きはしにくい。憶測を重ねれば、吉宗と非常に親しかった頼雄が、吉宗を將軍に就けたためにいわば滅私奉公の如く暗躍し、特に隠密などの実行犯の取り纏め的存在として活動していた可能性は十分ある。その際、父頼純もすべて了承のもと、表面上は廃嫡することで、頼雄を暗躍しやすくしたと考えられなくもない。その後、頼雄は吉宗が晴れて將軍に就任した後、享保三年（一七一八）に死没したとあり、これが定説となっている。が、その死は謎が多いという。病死との伝承がある一方で、何かを訴えるため江戸に向かったのだが、その途中に刺客に殺されたという説もある。この説は非常に示唆的であり、決してあり得なことはない。つまり、頼雄はある意味將軍の秘密を知りすぎている男であることも事実なのである。よくある話だが、利用価値がなくなつた者が辿る哀しい運命が待っていたと考えられなくもない。或いは、全てを察した上で自ら身を隠したのかもしれない。因みに、頼雄は

和歌山の感応寺に葬られているのだが、そこを紀州九代藩主治貞・十代藩主治宝が、相次いで墓参しているのも非常に気になる。おわりに  
いずれにしろ、紀州藩主の庶男として生まれた吉宗が、藩主及び將軍職を實力で勝ち取ったという事実は認めても良いであろう。ただ、その手段について、仮にこのような裏工作が史実に近いとなれば、決してほめられた方法ではない。自分にとって邪魔者であれば、実の兄弟であろうと、御三家筆頭の尾張藩の藩主であろうと除いてしまえばよいという思考を果たして持っていたのか。もちろん吉宗の心の奥底を知り得ることは出来ないが、それを窺い知る史料があるわけでもない。ただ、これが吉宗の偽らざる姿であったとすれば、非常に恐ろしい男であると判断せざるを得ない。暴れん坊というより、野謀・陰謀將軍なのである。

参考文献：河合敦『徳川幕府 対御三家・野望と陰謀の三百年』

代で、考古学の世界だ。推定しかできない。以下に仮説を述べてみたい。

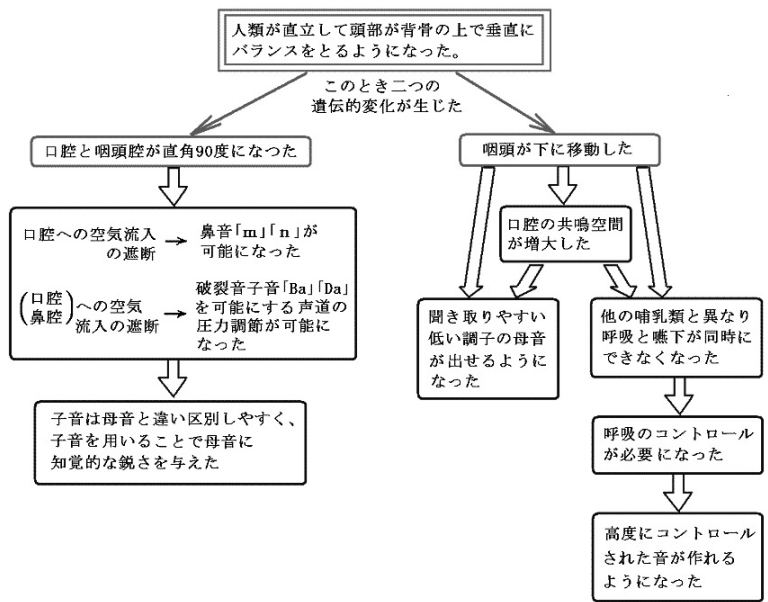
### ◆繁栄の理由は道具と計画能力

人類が繁栄したのは『道具の進歩』によってである。二足歩行で手が自由になったのが大きい。直立姿勢で脳が大きくなったこと、喉が開放されたことも幸いした。喉の変化で複雑な音声が出せるようになったから。コトバも道具である。仲間が協力し合うのに有効なツールだ。

動物の鳴き声は表意音で、危険とか食べ物との連絡や、求愛行動とかである。人類は、多彩な発音（音素）を組み合わせて単語を増やした。単語が組み合わさって『文』が生まれた。更に新人は、助詞や接続詞によって、自由構文や入れ子構造文が可能になった。これが我々の会話（音声言語）である。

### ◆喉と舌の進化で多彩な音声

喉や口腔に関して、チンパンジーと比べると違いが3点ある。  
①咽頭・喉頭が下がって口腔が広くなった。  
②口腔と咽頭腔がL字型（直角）



## 言語の獲得 (咽頭の変化)

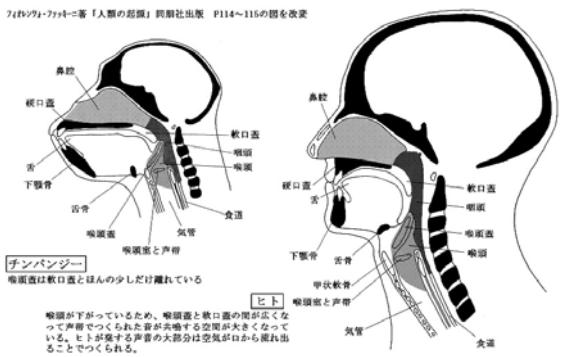
『カンジ (言葉を持った天才ザル)』、NHK 出版、スー・サバージ・ランボー著 より

になり息をコントロールできる。つまり、音素の種類が増えたのだ。ただ、旧人（ネアンデルタール人）は、頭骨の仕組みを見ると舌骨が未発達で、母音（a, i, e）も子音（k, g など）も未だうまく発音できなかったらしい。

◆知恵のビッグバンが起ったもう一つ、新人（現生人類）が動物・猿や旧人と大きく異なるのは、『認知能力』の差である。

動物はある程度の会話や記憶力や知能は持っているが、目の前の事を中心に認知している。しかし、新人は目の前以外の新たなことも想定できる。他空間や未来（四次元空間）を想定できる。時間的観





念だ。そしてそれは創造力と創造力といった新たな事に対する計画力である。『シンボル』認識取得も大きい。

猿人が二足歩行したのが約700万年前、旧人が250万年前。我々新人（現生人類）ホモ・サピエンス）が生まれてたった200、300万年。しかも、アフリカを出て6万年しか経っていない。6万年前に『知恵のビッグバン』が起きたという。『認知革命』とも呼ばれる。以前は手斧石器だったのが、急速に槍先石器や骨器などが多彩になりシンボル（女体像や記号など）が現れた。どうも知恵のビッグバンとは時間的観念と計画力（想像力

と創造力）によるようだ。その能力取得は、コミュニケーション能力との相乗効果がきつかけらしい。

◆噂話が四次元認知能力を産んだ  
我々は噂話が大好きである。井戸端会議やワイドショーなどそう。居ない人の悪口で盛り上がる。ユヴァル・ハラリ氏等の説では、噂話で四次元空間認識と自由構文を取得できたのではないかと。獲物の話や居ない人の話で、過去や未来の話をする。目の前の空間では無いので、人・場所・時間を特定するために5W2H付き（助詞や前置詞で示す）の複雑な文になる。また、嘘つきか信頼できるかも話す。対象をラベリング（あだ名シンボル化・概念化）する。『又聞き』の話も多い。『又聞き』だと『入れ子構文』になる。こうして複雑かつ自由な言回しの会話ができるようになった。また、20名以上の仲間を理解する上で噂話が効率的に役立ったと思う。

これらの能力と道具の進歩は、ネアンデルタール人との生存競争、および、マンモスなど大型獣を狩るのに飛躍的に役立っただろう。ただ、エヴェレット氏の説は、ホ

モ・エレクトゥス（旧人）から高度な言語能力を持ち始めていたとの説である。

◆入れ子構造とメンタル統合能力  
『入れ子構文』(『再帰構造』..リカーションとも言う)とは例えば、『母は、父がかつて溺愛していた猫』にそっくりな猫を拾った』と兄が言っていた』

といった具合で、次々に文をつなげて永遠にイメージを膨らませることが可能になった。自由構造とは、多少単語の並び順を替えても、助詞や接続詞で意味を同じに表現できること。英語では主格・動詞の順序は決まっているが、他は前置詞や関係代名詞 (that, which) や接続詞で言い換えが可。このような複雑な文を使いこなすには『メンタル統合』機能が必要だという。メンタル統合とは、人や物の関係性（位置関係など）を理解できること。おそらく、旧人と新人との違いはこの『メンタル統合』能力の取得にあるようだ。新人の脳の前頭葉の前頭前野外側に突然変異が起きて取得したとの説。ただ、メンタル統合機能は2〜5歳の間しか取得できないという。だから、こ

の幼児の短期間に複雑な会話文に接しないと取得できない。幼児期に話しかけることがとても重要なようだ。

◆概念も主義も『虚構』  
では『コトバ』とは一体何か？  
コトバとはコミュニケーションツールである。コミュニケーションとは、お互いの心を理解し、より協力し合うことである。意思疎通の為に、正しく伝わり、かつ、納得し従わなければ上手く行かない。大集団になれば、仲間意識が必要である。それを保つのに共通概念を編み出した。そして、信頼関係も生まれる。

概念は、コトバで定義・表現される。その共通概念は、集団を維持するために作り出したツールの一つだ。共通意識を持った集団（仲間）は強い。

ただ、ユヴァル・ハラリ氏が言うには、概念も主義も『虚構』とのこと。人間のコトバ（脳）が作り出したもので絶対はないのだと私もそう思う。例えば、『宗教（神様）』『日本国・国境・日本人（民族）』『会社』等も一時的なもの。貨幣や株やビットコインも虚構で、

のようだ

◆コトバも色即是空か

NHKチコちゃんと言うには、お経は生きている人に釈迦（ブツダ）の悟りを諭すもので、日本人に一番親しいお経が『般若心経』という。その釈迦の教えとは、「すべてのもの、コトバも心も『空』（くう）である。つまり実態がない。それに囚われなければ楽になれる」という。難しい教えはわからないが、端的に言うると『色即是空』と言うらしい。

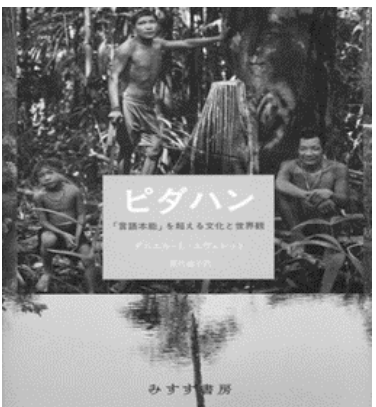
自我意識つまり我欲や嫉妬やベキ論（信念）や、不安に囚われなければ、悩みが無く幸せになれるのだろうか？ 悩みや争い（含む戦争）のない世界に生きたいものである。

◆敬聴とは心を受け止める事

私は今、ボランティアで傾聴活動をしている。傾聴は一般では、話つまりコトバを聞くものと思われている。が、実は『傾聴』とは人間の心（気持）をありのままに敬って聴くもので、私は『敬聴』と称している。

なお、『心』とは『感情』と『理性』

を“crooked head”（曲がった頭）と呼んでいる。どうも我々は裏表があつて、損得計算する『曲がった頭』で話す人間のような。



◆飽くなき発展は自我と不安から  
『曲がった頭』達の飽くなき技術進歩はどこからくるのだろうか？

文字によつて、誰でもノウハウの記録を見られれば、創造・発明・発見せずに、最新兵器さえも作れちゃう世になった。なのに『曲がった頭』達は、自我や自国ファーストで張り合っている。利益・効率化最優先で、技術競争し、虚構で張り合つて争っている（戦争も）。

私は、それは、曲がった頭が『自我』と『不安』を持ったからだと思う。

集団行動では、集団と自分との区別が出てくる。仲間の集団と他

破産すればただの紙切れ。集団内の信頼・信用で成り立っているだけだ。主義（イデオロギー）・法律・道徳・正義なども変化する虚構である。コトバの定義も変化する。一時的には共通でも、使う人・場所・時代が異なれば、意味（定義）も発音も文字スペルも変化する。『絶対』は無いのである。

◆我々は『曲がった頭』か

ところで、今もブラジル奥地に住んでいる先住民に『ピダハン族』がいる。言語人類学者（元宣教師）のダニエル・エヴェレット氏によれば、彼らに接した人は彼らを『世界一幸せな人々』と思うそうだ。

なぜなら、『ピダハン族』にはウツも不安も無い。今を生きて、笑つて過ぐし、見たものしか信じない（興味を持たない）。時間や数や左右の概念が無い。比較もせず、過去を悔やまず、未来を心配しない。もちろん神も信じない。『直接体験法則』『実証重視』で捉えて想像を信用しない。どうも、思考する脳『前頭葉』が我々と違うようだ。『メンタル統合』機能が違うのかも知れない。彼らは『ピダハン語』『ストレート頭』といひ、他の言語

(理知)の両方から成ると思う。  
『敬聴』はコミュニケーションの第一歩目である。まずは、お相手の心をありのままに受け止めることだ。一旦敬聴した後で、実際の要件・要望のやりとりをするのが望ましいし上手く行く。

『コトバ』はコミュニケーションツールである。とはいえ、単なる効率化ツールと捉えるべきではなく、心を通わせ合うツールと捉えたい。

人は一人ひとり違う。個性や自我を持っている。それを尊重する。つまり、多様性の尊重から始まる。集団も同様にまずは尊重からである。主義主張・宗教が異なっている、行動・発言を束縛しない、争わないとの考えから『自由主義』思想が生まれたという。『自由主義』は単なる自分ファーストとは違うのだ。

また、敬聴は自分自身に対しても行える。それが自己理解、自己尊重につながる。

私は世界の皆さんが敬聴を訓練し他人も自身も理解し尊重していけば、少しは争いが減るのではと期待している。

## 例会発表の概要 (令和3年4月5日)

当該期間は、新型コロナ禍による緊急事態宣言等により五月、八月、九月の例会は中止になってしまった。

＊令和3年4月4日(日)例会開催。会場・横浜市開港記念会館講堂。発表者2名。出席者94名。緊急事態宣言解除を受け、今年一月より中断していた例会が再開された。当日は新春講演としてご登壇いただく予定であった柴裕之先生と新任事務局長の村島秀次さんの講演であった。

▼村島秀次氏『日本書紀1301年と平城京ツアー』

村島氏は現在学習院大学史学科博士課程に籍を置く、当会きつての日本古代史識者である。我国最古の歴史書「日本書紀」が編纂され、復元されたいまの平城京を訪れそこから読み説く時代考証をさがら、大極殿院や広大な条坊を見ながらバーチャルな見学ツアーを堪能

『引用・参考文献』  
・フリー百科事典『ウィキペディア』  
・『ホモ・サピエンス全史』ユヴァル・ノア・ハラリ著 河出書房新社  
・『脳とは何か 活用編』、Newton別冊、ニュートンプレス  
社、2021/8/5 発行  
・『人類の文化的躍進のきっかけは、7万年前...』WIRED BY SANAE AKIYAMA  
・『言語の起源』ダニエル・L・エヴェレット著、白揚社  
『ピダハン』、ダニエル・L・エヴェレット著、みすず書房  
・NHK『チコちゃんに叱られる』2020年11月放送  
『なせお経を唱えるの』

### <コトバとコミュニケーションの進歩(歴史)>

2021/9/26

ツール	コミュニケーション ツールの内容	備考	時期
鳴き声(表意音) ジェスチャー	表意音: 当初の声(鳴き声)。危険連絡や恋など動物の鳴き声(単語)や身振りである。	動物・類人猿	魚4.5億年前、陸上3.9億年前
ことば(音声単語) 単文(単純口述文)	多彩な音声単語の出現...多彩な複数音素の組合せが単語。直立二足歩行で喉開放・声帯発展、脳の発展、手の使用。単純な文章は話せた。	猿人 旧人(原人)	700万年前-250万年前?
口述文(複文・文章) 入れ子構造文 自由構文 概念語	複雑な音声文(口述文)の発明...単語(&助詞・接続詞)の組み合わせで多彩な言い回しや入れ子構造文が可能になった。空間・時間認識も表現可能。自我の芽生え。概念(虚構)を発明。	新人(=ホモ・サピエンス=現生人類)	30万年前?~6万年前? : 認知革命
表意文字 (絵文字・象形文字)	表意文字(絵文字・象形文字)の発明: ヒエログリフ&楔形文字 漢字『甲骨文字』の発明。	エジプト&メソポタミア 中国の商国(殷)	BC3500頃 BC1500頃
表音文字	表音文字の発明: ヒエログリフの表音文字(子音のみ) ワディ・エル・ホル文字...エジプト在の外国人が使用 原シナイ文字 フェニキア文字...原シナイ文字から派生した文字を借用した。22文字 ギリシャ文字...フェニキア文字を借用。24文字 ラテン文字...ギリシャとエトルリア文字を借用当初20字→26字 万葉仮名(漢字)、片カナ(AD800頃)、平かな(AD900頃)ヘボン式ローマ字...日本語音のローマ字表記(ラテン語)。ヘボン氏が考案 ハングル文字...母音・子音を記号化し、その組合せで発音を示す。ロジカルな表音記号文字 拼音(ピンイン)...中国語音のアルファベット表記	中近東・地中海・インド 南米マヤ 文明 各地の民族に伝播・転借用 カナ人他 カナ人、シナイ半島 レバノン~トルコ・地中海 ギリシャ ローマ~西欧 日本、万葉集 日本 李氏朝鮮 中華文化圏	AD292~887頃 BC数千年前 BC19~18世紀 BC17~15世紀 BC10世紀~ BC9世紀~ BC7世紀~AD10世紀 AD6~7世紀~ 1867年 1443年 1958年~
紙と筆記具	紙(含む羊皮紙・パピルス・竹)・筆記具(ペン... 墨や絵の具の発明	各地の民族に伝播	文字発明と一緒に進歩
印刷技術	印刷・出版(器)技術の発明 活版印刷技術は1445年グーテンベルクが発明。	活版印刷技術	1445年
コンピュータ、ワープロ、スマホ、タブレット	コンピュータの発明、文字のデジタル化(二進数表現)。ネット通信。プリンタ印刷。 各種ネットコミュニケーション。電子メール、SNS(ソーシャルネットワーク)、Twitter、Instagram、FACEBOOK、LINE、TikTok、Clubhouse、Zoom など	全世界 全世界	20世紀後半~ 20世紀末~
翻訳機	自動翻訳機の発明・普及...初めは光学的文字読み取り。文字の音声化。音声入力の聞き取りデジタル化。多言語の自動翻訳。犬猫鳴き声の翻訳。などなど	全世界	20世紀~
電子文字時代	SNSと電子時代なので、これからは、全世界に通じる絵文字、ピクトグラム、各個別集団内独自絵文字、QRコード等が増えるだろう。日本発信『EMOJI』の時代が来る。	ネットで増加普及	20世紀末~

他に、ツールとして、映像、アイコン、モルルス信号、手旗信号、点字、手話、テレバシーなど様々なものがある。

できた。

▼特別講演 柴裕之先生 演題『山崎合戦の性格―本能寺の変後の主導権争い』

当会の新春講演に予定されていた外部講師による講演が、当月に順延となった。本来なら昨年度のNHK大河ドラマ『麒麟が来る』のクライマックスに時期が重なるはずであった。講師柴裕之氏の著書は資料に基づいた記述が多くわかりやすいとの評がある。本講演も本能寺の変に前後する戦況図を用いた解説で、なぜ光秀が謀反を選択したのか? 信長を討つてもなぜ天下を取る戦況に至らなかつたのか?などを分かりやすく説かれた。



ご講演中の柴先生

歴史を学ぶ者は、残された多くの史実から、その時代の尺度を持って読み解いていかなければならないことを教えられた。

＊令和3年6月12日(土) 例会開催。会場・横浜市開港記念会館講堂。発表者3名。出席者81名。  
▼林 久幸氏『後北条氏五代とその後の小田原城』伊豆は早雲で持つ 北条は小田原で持つ

林さんは後北条のゆかりの場所を訪ねた。伊豆―山梨―津久井―八王子―千葉(佐倉)と秀吉の小田原征伐の拠点をめぐること、関東六国を治めた後北条の偉大さを実感された。



例会初発表の林さん

またそれぞれの訪問地で学ぶ史実やエピソードは歴史探索の醍醐味である。現地を画像で紹介しながらも解く発表は実感が伴い楽しい。

▼粟 光行氏『聖徳太子 その系譜と業績』魔力は天才に勝る太子は、あまりにも桁外れのエピソードに包まれているので、研究対象として敬遠されがちでもある。それでも古代史を学ぶ上ではその存在を避けては通れない。当時国際政治の中心的立場にあった隋との外交努力は高い功績である。その上で新しい国造りの必要性を考え、国家の精神的なよりどころとして仏教を広めた。未熟な部分が多々ある時代に大所から国を考へ一つに治めた功績は、もう一度学びなおす必要を感じさせる発表だった。

▼榎 良生氏『平民宰相 原敬の生涯』昭和は遠くなりにけり榎さんは重くながちな政治史を、ふとほほを緩ませてくれるようなエピソードをはさみながら、和やかに語ってくれた。

大正中期、世界恐慌やスペイン風邪の蔓延など舵取りの難しい情勢の中で原内閣は成立するのだが、

原は世界的な経済競争力を強化するという政策を打ち立てるのだが、「我田引鉄」と揶揄されその目玉であった広軌鉄道の本丸は東京駅でテロに刺殺されるという皮肉な最期を遂げた。

＊7月3日(土)例会開催。会場・横浜市開港記念会館講堂。参加者58名、発表者3名。

▼瀬谷俊二郎氏題『膨張の70年(PART1)』

明治維新後、琉球藩を設置し、近代国家に組み入れる過程で、古島島民が台湾住民に殺害され、明治政府は台湾に出兵。琉球に軍隊と警察を置き、廃藩置県に伴い沖縄県を設置した。我国が領土を守り、他の領土を奪うという戦いの幕開けだった。これ以降は、朝鮮半島を経由する大陸へと矛先が向くのである。瀬谷氏は「膨張の70年」は、精神力という得体の知れないものによって突き進んだと論じた。

▼森岡 璋氏 題『綱吉と柳沢吉保』

綱吉の治世は生類憐みの令が針小棒大に取り上げられることが多いが、森岡氏は、綱吉は極めて博

識で優秀な将軍で、命を大切にするといい慈悲深い考えの持ち主であったと柳沢吉保の『楽只堂年録』、吉保の側室正親町町子の『松蔭日記』を用いてひも解かれた。学問好きの綱吉に、吉保はじめ多くの家臣が学びを通じて交流を深めたことなどを紹介された。特定的人物を取材記者のように調べ上げていかれた。

▼古谷 多聞氏 題『ノモンハン事件・雑記／前編』

発表の根底にあるのが歴史を語る上での言葉使いへのこだわりである。ノモンハン事件を「戦争」と呼ばず「事件」としたこと、愚かな日本陸軍の本質が隠されていると指摘された。内実はまさに戦争そのものでしかないことがその解説でわかる。明らかな敗戦を「事件」と称して結論をゆがめる意図が感じられるという説にも納得がいく。結びの私見に「この一件は関東軍がソ連の挑発行為に引かかった」と示された。同氏指摘のように現在もそうした動機は身近にあると感じた。

(編・記)

## 受贈図書

## 木村高久

◇大阪歴史懇談会

「会報」第437号、  
第442号

「会誌 歴史懇談」第35号

◇兵庫歴史研究会

「歴研ひろば」第282号

◇岡山歴史研究会

「歴研おかやま」第30号

◇岡倉天心市民研究会

「天心報」第38号、第40号

◇宮城県歴史研究会

「歴研みやぎ」第106号

◇愛知歴史研究会

「あいち歴研会誌」  
第169号、第171号

◇しんあいち歴史研究会

「歴研会誌」第802号

## 会員活動報告 (令和3年4月～9月)

●村島秀次事務局長の活動

・令和三年六月にて学習院大学の史学会副委員長の職を、任期満了により退任されました。

●寺田隆郎会員(鹿鳴家河童さん)の活動

・近隣各地で精力的に落語活動を続けていらっしゃいます。  
五月十五日ルミナリエ落語会第六回代替公演、お江戸両国亭。五月二十九日キャナリー落語会、お江戸両国亭。五月三十日亀有落語会、亀有地区センター。六月二十七日千代の会三味線・端唄、藤沢新堀ギター音楽院。七月三日(土)蓮池寄席、千葉きぼーる。七月十七日あじやらか寄席、上野あじやらか。八月九日(月)バイリンガル寄席(英語)、お江戸両国亭。八月十三日やかん寄席、溝の口。九月十九日キャナリー英語落語会、

お江戸両国亭。九月二十日おおのくち寄席、大山街道ふるさと館。九月二十五日藤沢素人落語フェスティバル、藤沢公会堂。

●中村康男会員(浮世亭寿八さん)の活動

・中村さんが主宰するアマチュア演芸サークル『楽笑友の会』(青葉区社会福祉協議会の実施する「あおばふれあい助成金」の助成を受けて、横浜市青葉区を拠点にして、落語・講談などの演芸で、地域の方々と楽しみや喜びを共有するボランティア活動の会)では、コロナ禍で懸命に働いている介護従事者と介護利用者への励ましの動画の配信を、横浜出身の講師・真打の五代目宝井琴鶴さんと横浜出身で主にドイツで活動中のピアノスト伊藤ゆりあさんのご協力を得てこの度立ち上げられました。  
「楽笑友の会」で検索ください。  
([https://rakusyoutomo.org/movie\\_gallery/](https://rakusyoutomo.org/movie_gallery/))  
横歴の皆様にも是非ご覧いただきたく宜しくお願いいたします。

(編・記)

## 訃報



▲三村様 (5年前撮影)

国の国分寺・国分尼寺をまわられて、ご著書も出版されていらっしゃいます。  
横歴の歴史をつなげてこられた先達の一人としても素晴らしい生涯を送られました。

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

合掌 (編・記)

## 訂正記事

会報82号に誤りがあります。訂正お詫びいたします。  
○4頁4段25行目

(誤) 鳩首  
(正) 梟首

(編・記)

永年会員 三村 光廣 様

令和三年九月十二日(逝去)

享年百二歳

三村さんは平成二年にご入会で当会会員の最長老でありました。

平成十五年には例会で「人類進化と現代人の心」と題して遠大なご講演をなさいました。また、全



# 創立四十周年記念誌 原稿募集について

今回の会報誌は令和四年十一月末日発刊の「創立四十周年記念誌」です。年に一回のみの発刊ですのでご注意ください。

●原稿の受付期間は、令和四年一月～同年九月末日

●投稿規定は従来通りとします。

★自由なテーマでの会員研究、エッセイは会報誌4頁以内（このスペースには題名欄、文字間の空白、写真、表、地図などすべてを含みます。ワードでの電子データでのご投稿ください）。

★俳句は5句以内、短歌は7首以内、詩は30行以内。

●原稿提出先

〒232-0022

横浜市南区高根町

2-8-1-1001

木村高久

☎045・242・8670

Eメール

kimutaka726@yahoo.ne.jp

## 編集後記

人類は古来より感染症におびやかされてきた。紀元前のエジプトのミイラに天然痘の痕跡が発見されたが、WHOによる天然痘世界根絶宣言がなされたのは1980年であった。14世紀にはペストでヨーロッパの人口の1/3〜1/4が死亡したという。また日本では平安時代中期のはしか（赤痢瘡あかもがさ）の大流行で朝廷の有力者が短期間のうちに次々と死亡したこともあり、藤原兼家の五男・道長が偶然にも権力を手中にし、結局、三人の娘が皇后・皇太后・太皇太后を独占（一家立三后）してしま

いよいよ来年は横浜歴史研究会が発足して四十年という節目を迎える。その歴史は81号、82号の会報誌（裏表紙）に高尾副会長が詳細な記事を纏められている。即ち昭和五十八年（1983）十月、新人物往来社の月刊誌『歴史読本』に歴史研究会があり、横歴の初代会長・大町頼勝氏らが尽力され、横浜支部（後に横浜歴史研究会と改称）が発足し、さらに、神奈川歴史研究会等の、十四の歴史研究団体が全国でスタートしたのである。

一方、医学は感染症との長い戦い等を通して進化し、近年の医学の発展は凄まじい。僅か2年ほど前に発生した新型コロナウイルス

クチンや治療薬が次々と実用化しつつあり、この感染症の制圧も近いと大いに期待したい。しかし当面はマスク着用、無駄な会話なし、居酒屋での懇談も無理な状態が続くことを覚悟しなければならず、横歴の魅力の低下につながってしまうのではと危惧している。このような状況下では会報誌の更なる充実が必須であります。皆さまの益々のご協力を宜しくお願いいたします。

★★★★★

史を祝ってきました。四十周年記念大会も役員メンバーが中心になって準備中ですのでどうか大いに期待ください。

ところで、上記しましたが、今回の会報誌の「創立四十周年記念誌」は来年十一月末日に発刊予定で、来年の会報誌発刊はこの一回のみです。

通常の会報誌と同様に会員研究・エッセイ・俳句・短歌・詩・表紙写真等を募集させていただきます。締め切りは令和四年九月末日です。時間的余裕はまだありますが、お早めのご準備を宜しくお願ひいたします。初投稿の方も含め、是非ともこの際、ご投稿いただき、さらに充実した会報誌として発展させていただけたらと念じております。

（編・記）

